皇學館大学研究開発推進センター紀要　第六号
令和二年三月一日発行（抜刷）

資料

神宮皇學館『修学旅行　熊野日記』（明治三十年）

―神宮皇學館修学旅行日記・満鮮旅行記（三）―

皇學館大学研究開発推進センター館史編纂

資料

神宮皇學館『修学旅行 熊野日記』（明治三十年）

―神宮皇學館修学旅行日記・満鮮旅行記（三）―

皇學館大学研究開発推進センター館史編纂

本科第四回修学旅行
期　間　明治三十年十月二日～十日
目的地　熊野地方
引率教員　二名（木野戸勝隆教授・橋村正璟教授）
参加学生　十一名（四年：近藤弘代・沢田米吉・高松四郎・松本昌三・宗村信喜、三年：金剛幸之助・檜垣恒之・三浦千畝・安元久雄、一年：遠山正雄・藤原末三）
掲載資料　『修学旅行　熊野日記』（安元久雄編、神宮皇學館発行、明治三十二年五月、A5判一五〇頁）

翻刻にあたっては、仮名遣いは原文のままとしたが、漢字は常用漢字に改めた。また、原文は読点のみ使用しているが、通読の便を図り、読点を句点に改め、読点・中点・濁点などを適宜補った。文体を損なわない範囲で行頭の一字下げなど体裁を改めた箇所もある。底本に用いた金剛春雄氏旧蔵本（本センター所蔵）には朱の誤植訂正が多く為されており、それらも反映させた。文中に、今日的に不適切な用語が使用されている場合にあっても、歴史資料としての性格を鑑み原文のままとしたことをお断りしておく。

なお、本稿は、渡辺寛名誉教授（当時、館史編纂室長）が企画し、編集・翻刻は大平和典（研究開発推進センター准教授）が担当した。

修学旅行 熊野日記

為紀

木のくにの　やまふみわけし　もろひとは
まなびの　道もいや　すゝみけむ

本科三年生　檜垣恒之

三日（初日）

遼邈の地猶未だ王澤に霑はず、遂に邑君村長ありて各相凌躒すとは、これ神武天皇西州の都にて宣給へる勅なり。こゝにおきて天皇はかしこくも躬親ら東征の途に上り給へり。この熊野の地はこの御征途に最も艱難をきはめ給ひし地なりけり、海には暴風怒濤御船を漂はして遂に御兄二柱の尊を喪ひ給ひ、陸には峨々たる熊野の峻嶺にさゝへられ嶂煙毒霧に途さへわかずさまよひ給ひてかの頭八咫烏の先導を受け給ふに至りぬ、さればこの地は海に陸にその由緒深しといひつべし。ことし十月我が皇學舘は南北牟婁郡に修学旅行すべき命を下されたり。皇宗のつぶさに艱苦をなめ給ひしかしこき御跡を探り奉るは実に我等の務ならずやは。

鳥羽の船出

これかれさるべき書などひもときて下調を了へ、高松・松本両君は鳥羽に行きて出帆の時間など問ひ合せ、用意大方整ひたれば、出発を二日と定たれ、監督は木野戸・橋村の両教授にて、本科生松本局山、高松隈川、沢田主弘、近藤三亥、宗村豊河、三浦仰山、金剛菱州、安元年川、檜垣江雨、遠山檀邦、藤原一瓢の十一名すべて十三人なり。この十一名という呼び声には余りにその少数に驚く人もあらむ。さるは病気その他の事故によりてこの行に加はらざる者多く、こたびの一行は本科生の過半数にも足らざるなり。この日午后五時、いづれも度会郡四郷村楠部なる大上御祖神社の側に打揃ひて出立ちぬ。夕陽将に沈まむとして暮雲残照をとゞめ、晩鴉ねぐらを求むに声うらさびし。朝熊の里をすぐれば日は全く暮れぬ、山路寂して声なく只草間にすだく虫の音のみ凄切としてあわれなり。安元ぬし、

たどりゆく道へたゝらぬ山の辺に　妻恋ふ鹿の声聞ゆなる

朝熊山上の月を仰ぎつゝ田野をすぎゆき茂れる森に入ては僅にひまもる影に道をたどり、八時頃鳥羽港谷岡屋といふ旅店につきぬ。四日市より来む汽船九時には着くめれど、こゝを出でむは十二時なるべしといへば、暫く暇あり。されば買物すとて出行く人、飯したゝむる人、はかなき物かたりして碁盤に向ひて石をにらみつむる人、さま〴〵なる興の中にこの家の主人たちいでゝ、船舶着港は今宵の程は覚束なし、翌未明になるべしといふ。人々思ひの外のことなれば互に顔見合せて、さる事はなからむ昨日はたしかに十二時なりときゝけるにと高松の君は汽船会社に行きて問ひ試みたれど、答ふる所亦同じ。木野戸教授、

名にしおへば鳥羽の港にはつる船　飛ぶが如くに早くはてなむ

しかず一睡をむさぼらむにはとて皆布団に横たはれば、いつしかまどろみけむ。夢は熊野の辺をたどりぬ。牛のほゆるが如き汽笛の声におどろきさむれば、これなむ宵より待ちにまちたる紀洋丸の着けるにて、四時すぐる頃なりけり。かくて端舟は来れり。いそぎ乗りて汽船に移りて船門に立てるボーイに切符をわたすと共に、一行は下等船室の乗客となりぬ。室に入れば先異臭鼻をうち灯火は朦として小暗し、上なる棚は既に先なる客の為に占領せられたれば、下界へ匐ひ込まざるをえず。さらぬだに光の通ぜぬ所腰をすうるもうす気味悪し。十三の黒影は茫然として窮屈げに端坐せり。さるほどに錨を揚ぐる音は聞えぬ。さては出帆に程あらじ。かゝるいぶせぎ所よりはとて甲板にはひ出づる者五人、六人。猶住めば都なりけむ。残れるもありげなり。折しも東方漸く白み、鳥羽湾頭の諸山は模糊の中にあり。朝風冷に面をかすめて心地えもいはれず。やがて例の汽笛と共に進航を始めぬ。時に五時半なり。昨日迄は何の島くれの島あるは名に高き安乗崎音にきく大王崎等は黒暗々の中にすぐるならむと思ひしに、一変して今日は居ながら此等を指点する事をえたり。船は坂手、菅島等を左舷に見つゝ進む。

あさびらけかすむ島々うち見つゝ　鳥羽の湊を船出するかな

又、思ひいづるまゝを、

鳥羽の湊に船よそひ　さしてゆくへは熊野灘　よせてはかへす荒海の　八重の波路をかきわけて　ふりにし跡を探らむと　ますらをのこのひとすぢに思ひたてるもいさましや

時に安元ぬしも、

とばかりに鳥羽の港を船出して　飛ぶが如くに早帰りこむ

由来志州より熊野海辺島嶼多し。随ひて風致に富む。若し渺たる海上何物の目を遮ぎるなく眼光の及ぶ限り水天唯相連るのみならば、誰か倦厭たらざらむ。之に反してかき見る島の崎々、うち見る浦のくま〴〵、岸打つ浪は砕けて花と散り、岩ねに生ふる磯馴松はひとしほの趣をそへ、浪間にはかよふ千鳥の声なつかしく、沖には白希点々として散在せり。我等は今こそ画中をよぎれるなり。金剛ぬし、

荒浪のよせてはかへす岩の上に　さきちる花は千代の花かも

俄然として呼ばるゝ声に次ぎて拍手は起りぬ。顧みればあなうるはし。今しも朝陽は洋々たる蒼海の一方より登りてそめ、曙光浪に映して眼も眩せむばかりなり。やゝありて炎々たる紅鏡波上を去れば、水天渺として又見ること能はず。この壮絶なる壮観は筆の及ぶべきにあらざるなり。木野戸教授ほがらかにうたひいでらる。

赤酸醬うかぶとぞ見る青海原　豊栄登る天つ日影を

三浦ぬし、

青海原出づる朝日のまばゆさに　たつ白波もなぎ渡りつゝ

己も、

うれしくもあふぎみるかな海原ゆ　豊栄登る朝日子のかげ

安乗崎の灯台もすぎぬ。浪は次第に高まれり。百噸に満たざる紀洋丸は木の葉の如く弄ばれぬ。その上るときは身は九天に冲るかと疑はれ、その下るときは那落の底にや沈みぬらむと思はる。浪のあらびにうちまけてにや。はや酒石散をなむる人も見ゆ。いとかよわき人なるかな。おのれ常に胃弱にて船には暈ひやすしといへど、嘗て遠州灘の往復は経験せり。大王崎何かあらむ。こゝにて見事暈ひては日記の責任も尽されまじ。さる薬などをば用うべきかはと眼を見はりて波濤をにらめば、浪の色は黒くすさまじくしていよ〳〵我を上下縦横に弄べり。誠やおもしろかりし風景は忽変じて、懸崖連りて壁立し怒濤これに咆哮し、飛沫雪の如きさまものすごきことといふばかりなし。船は大王崎を進みつゝあるなり。

傍らなる三浦ぬし、

立つ浪の荒くもあるか大王崎　沖の小島の見えつかくれつ

われも又、

風なぎにたつ波高くよせくなり　これぞ名におふ大王崎

げにかしこき所ぞと人のいひけむも宜なりけりな。

四日　鬼ヶ城、七里が浜、三輪崎、浜宮、那智

本科四年生　高松四郎

たぬしき夢路を牛のほゆるが如き笛に打破られ、草鞋脚半もそこ〳〵にてはしけにかけ込み、汽船に乗り移りしは午前の四時卅分なり。人々先の夢をつゞけむとて鞄を枕に横はる。己も共にと打伏しゝに、女の声高に叫ぶに驚かされぬ。頭もたげて其方を見やれば、なまめける姿したる若き女のねくたれ髪しどろに打乱したるが暗き「ランプ」の元に今しも船人を責むるなりけり。僅ばかりの代物惜み給ふは何事ぞ。かゝらむにはよべ酒など買はねばよかりしものを。何時も〳〵かゝる事きくこそ腹だゝしけれなどいふ。男は頭うなだれて物も言はず、女はまた〳〵言ひつのりて、はては思のまゝに罵る。はしけよりはや船は出でなむとぞ。棄てゝかゝへりねなどいふ声す。同じ類の女なるべし。はてしなければ年たけたる女彼をすかして船は出づ。何事なりしにか。知るよしもなし。かしがましき声もやみぬ。いざや一睡と横たはりしに、ふと心付けば今日はおのが日記の当日なりけり。眠りては詮なしと跳ね起き急ぎて甲板に上る。丑三つは過ぎたれども夜は未明けず。萬籟寂として声なく「マスト」の孤灯独淋しげなり。待つ事廿分ばかりにして汽笛一声船は回転を初めつ。楯ヶ先は彼方か。牟婁崎は此方。昼ならんには室戸神社の鳥居や見えなむ。阿古師神社の森や眺められむなど思へど詮なし。帰り路には此所に半日を費す予定なれば、其の時にこそと只甲板に立つ。船の進むに従ひて潮風やうやく身にしみ渡り、寒しとも寒し。稍ありて沖に出づ。例の熊野灘なり。船は動揺し初めつれども、夢路を辿る人々はかくとも知らぬなるべし。夜はまたく明け離れたり。沖の青波、岸の奇岩、絶景ともにきのふに異ならず。水兵の歩哨然たることも堪へられねば船長室に上る。遠山君はやく此所にあり。船長何くれと物語す。沖を指していふやう彼を見たまへ。黒く小さきものは獵船なり。十数里も隔たらむといふ望遠鏡をかりて見るに、実に云へるが如くあまたの獵船なりけり。浪のまに〳〵浮沈する様、木の葉の池に浮べるが如し。

此時遙の先に煙のたつ見ゆ。望遠鏡もて見れば、二本「マスト」の大汽船なり。船長に問へば外国船なりといふ。

荒波の上にいくよかたびねして　外国にはてむ船をしぞ思ふ

船の動搖ます〳〵甚し。けふの浪は高きにかと問へば否とよ。かゝる日は静けき内なりといふ。あしき日は如何なるものぞと重ねて問へば、いかでいかでかくして居らるべき。熊野灘は日本の荒海の一にして、七里が浜は其内にもいみじき処なりと語る。話は進みぬ。長き航海の内には珍らしき事もあらむ。それ聞かせたまへといふに、船長鼻うごめかして語り出づ。或年の事なりき。大坂より出帆して伊勢に向ひぬ。日暮れ方より空はかき曇り、黒雲天を覆ひぬ。暫して風ば起りぬ。浪は高くなりぬ。七里が浜にかゝりし頃は夜の十二時過なり。己は例によりて此所にたちぬ。四面暗黒にして咫尺を弁へず。心を痛むることそもいかばかりなりしぞ。かくて一時を告ぐる頃、沖の方に当たりて青き火の燃ゆるを見る。一点二点見るが内に数十の光となれり。やう〳〵に船に近づくが如し。機関手某廻転手某を呼びて、之を見たることありやと問ふに、なしといふ。何の火ならむとはや打震ふめり。已、亡者の火は青しと聞けり。暗夜暴風の時現れて船人を苦むと聞きぬ、しかも熊野浦は古より難船の多きところなり。もしそれにてはあらじかといらふ程に火はますます近より、心ちよくもあらず。先の二人は何時か逃れけむ。只一人此所に残されたり。身の毛もいよだつばかりいとすごし、目を放たず見つむるに、舟に近づきて火は消えぬ。うれしと思ふ間なく又た一点三点遂に前の如くなりぬ。いよ〳〵こゝちあしく、身神ともに吾とも覚えず。総身に汗を湛へて火光と瞰み合ふこと一夜、東の海つら赤み渡りし時のうれしさは譬へむにものなし。つとめて沖を眺むれば、只怒濤激浪の天に冲するのみ。後に思へば太洋の怒濤、近海の静波に激し、潮水の作用にて彼の光を現したるなりき。之に怖ぢ之に懼れたることげに愚の極なりけり。九州に不知火ありといふも、蓋此の類ならむといふ。いとをかしき物語なりけり。やがて彼のいふやう木の本に鬼ヶ城といふ所あり。こは古鬼のすめるあとなりと言ひつたへき。遠くはあらず。停船中上陸して見給ふべし。又、此の浜の石は形丸くしていと美し。床の置きもの、碁石などはこれにて造るなり。熊野路の旅行にては重きにえ堪へ給はず。船に置き給はゞ鳥羽まで送り参らせむ。よき石得拾ひ給ひなば、五十円にもならむ石ありといふ。木の本港も見ゆ。船長指さして、かの岩多き所こそ鬼ヶ城なれといふ。おのれ室に帰りて、停船中鬼ヶ城を見むことを発議す。動議可決してその由船長に告ぐる程、船は木の本港に着きぬ。海岸に見ゆる人家、凡二百許なり。浜辺に多くの舟を並べ、旗を立て、神酒を供へ海人その間にうたげす。まことやけふは九月の節句なりけり。木野戸教授、

菓もて花の窟や祭るらむ　旗立てる見ゆ木の本の里

神代紀に、伊弉册尊の御霊を紀伊国熊野之有馬村の土俗の祭るには、花の時には花を以て祭り、果の時には果を以祭り、又鼓吹幟旗を用ゐて歌ひ舞ひて祭ると見えたり。この有馬村は、この木之本村の南二十町許にありと南紀名勝略志に記して、そこなる花窟を大神の鎮座す所なりといひ伝ふとぞ。その花窟には帰途に詣でむ予定なり。かくてはしけに移る岸に至れば、浪荒くして舟留らず。太き綱打ちかけ、岸にて四人五人して引く。舟は上下に動きて止まず。一人〳〵に波の卑きを待ちて岸に飛びたる。皆そろひしは午前六時なりき。実にも浜辺の石は大となく小となく、皆円らかにして、黒き青き光りいと美し。また何処の海辺も多くは皆砂なるに、此所は皆石のみにて、水際になるまゝに只形の小なるのみなり、疾帰りて石を拾はむなどいひつゝ、鬼が城に向ふ、「ザクリ〳〵」とあと戻りして歩み悪し、右の方に行くこと一町許して岩壁のある所に至る。この岩、海に向へる処洗ひたるが如く、いと清らなり。岩の麓を辿り、海に添ひて右に行き左に廻る。十町ばかりゆけば、岩に蹲りて魚釣る男あり。傍の籠を見れば、鰺入れたり。此は餌なりといふ。何をか釣るといへば「ツルボ」なりといふ。如何なる魚にか聞ける事なけれど、問ひかへす暇もなし。急ぎ進みて又左に廻り左に旋り、

岩に上り岩を下り、岩をとび岩を潜りて行くことまた十町余りにして鬼ヶ城に至る。前は海に面し後には山を負ふ。大々的岩城なり。その形、獅子の口を開きて大海を呑まむとするが如し。高く突出せる崖壁は前に垂れて引きなば落ちむ様したれど、千畳敷と称する岩間を覆ひて余りあり。其の端にたれ下れるは、さながら猛獣の歯牙に似たり。岩は鼠色に赤色を帯び、所々に丸きまた細長き穴あるは虫の食みたるが如し。正面天井共に丸く凹めるは古狂瀾怒濤の剜りし名残ならむ。この高さ三十丈余、巾は高さの二倍余なるべし。下に五寸より直一尺程の穴あり。鬼の足跡なりとか。実に断崖絶壁、海に面して峙てる様の雄壮なる、言語に尽しがたし。橋村教授歎賞せらること久し。此所を去ること少許、海中に小島あり。魔見島と称ふ。伝へいふ、昔田村麿将軍此の島に上りしに、岩上多く鬼の住めるを見たり。之より鬼が城と名づくと。松本君、

鬼ヶ城昔は海士も強者
鬼ヶ城陥ちて何事岩の浪
鬼ヶ城破れて落日影淋し

吾も、

海ぎはに聳えてたてる千尋岩　鬼のすみかと聞くぞをゝしき

雄大なるこの壮観に心神を奪はれ茫然として立つこと幾時。見るには安かれど、船や待つらむと思ひ棄つ。顧みて海面見渡せば、足元より続ける大海原、水漫々として際涯なし。波の尽くる所は布哇か、はた亜米利加か。汽笛一声高く叫びて吾等に帰路を促す。急ぎ〳〵て先の浜辺に出づれば、船長頻に帽をふり、汽笛亦耳を劈く。石拾はむ暇もなく汽船に戻る。七時少し過ぎぬ。走りありきて暑かりしかば、室には入らで直に甲板に上る。船長来て如何なりしかといふ。見たる様語りて悦ぶ程に、「ボーイ」来りて朝食を報ず。けふの朝食を為さでやはと皆室にかへる。船の動搖、室の臭気、昨日にかはらねど、さほど苦からず。飯は例の塩辛し、菜は茄子計なれども、一碗かき搜りて漸く一切二切を得たるのみ。外に梅干と薤と香物とを出せるは昨夕に少しは勝れり。食ひ終へてまた甲板に上る、忽にして青松白砂遠く連れること幾里。之ぞ名に負ふ七里が浜なりける。げに長さは七里にも渡りぬらむ。須磨(磨カ)に似たりといふあり。舞子の如しといふあり。清涼なること似るものなし。宗村君、

七里が浜舟はてよ今宵月夜なら

安元君、

いつよりか波の白ゆふかゝりけむ　七里が浜の松のむら立

吾も、

見れどあかぬ七里が浜に舟はてゝ　一日をこゝに暮してむかな

かたへの一群に鯨の話ば始りぬ。一人いはく、七里が浜は鯨のよく来よる所なり。是より後は潮を噴くを見ること度々なり。又、吐き出せる鰹魚、鰯の傷けるものなどあまた浪に漂へることありといふ。又、一人がいふやう、凡その通知らぬは何にまれ便なきものなり。一年尾鷲の海辺に鯨入り来れり。何にか追はれけむ。岩間にふかく衝き入りぬ。人々之を見てあまた打集ひて、引き上げむと太き麻縄四筋五筋をかけ、百人ばかり力を合せて引きしかど、鯨は千引岩の如くにて動きもやらず、縄は終に引きゝられぬ。或人之を見て、さても心なのしわざや。鯨を上ぐるには上ぐる器あり。百人千人して上げむとすとも、たゞ事にてなし得べしや。早く其の器を借り来れといふ。人々木の本より持ち来りて、僅の人して事なく引きあげし事あり。知らぬ事は皆かゝるものなめりなど語る。航すること一時半ばかり。潮水俄に濁れり。あやしみて問へば、此は熊野川の落口に近づけるなり。熊野川は又新宮川といふ。十津川の下流なり。十年ばかり前に彼の聞えたる洪水ありてよりこの方流水今に澄まず。それが為にかくは近海まで濁れるなりといふ。間もなく熊野川の落口に至る。帆檣林立して一港湾の如し。小蒸気ありて引船する様など見ゆ。左の岸は人家稠密にしていと賑はしげなり。これぞ紀州の一都会、新宮町なりける。船のたよりあしきにや、此所には寄らずて猶進む。

しばし行けば海水清く澄みて、また初の如し。

三輪崎に着きぬ。此の港に周囲三、四十間ばかりの岩島あり。高き上には松のたてるもありて、其の様庭にも持ち行かまほしげなり。あはれ士耳古の軍艦ノルマントンはこの岩島に衝き当りて悲哀の最後を遂げたるなりとか。呼ばゞ答へむばかりの港内にて、さりとは情なき事なれなどかたへの人のいふを聞くに、いと哀なる話なりけり。

そは今をさること七、八年前、我が　天皇陛下に其の国の勲章を捧げ奉らむとして来れり。使は彼の国の皇族なりきといふ。東京にてその事終へて、横浜より帰路にこの辺りにかゝりし頃、名に負ふ熊野灘浪高く暴風さへ加はりぬ。三輪崎に近づきしは夜の明方なりけり。余りに烈しかりしかば、三輪崎に風を避けむとして港に向ひぬ。されど霧深くして、行く手は少しも見えず。電気の光も今は用をなさねば、携へたる烟花を甲板よりうちあげうちあげあたりを照せども、これ亦思ふが如くならず。詮なくひた進みに進む。此時岩には衝き当てたるなり。僅ばかりの人の外は海の藻屑となり終れるなりとぞ。きくもいみじき話ならずや。あはれ〳〵、其の乗込の内にはやむことなき人もありきといふに、其の国の君は如何に歎きたまひけむ。又、多くの乗込の人にはたらちねの親のみ国に待ちけるもありしなるべく、めぐき妻子の家に残れるもありしなるべし。その人々のかくと聞きつけたる時の心は如何なりけむ。たよりなき親の、吾が子を奪はれて悲みの余り病つけるもあるべく、かよわき妻子のたのめる人を失ひてなきくらしたるもありぬべし。人々た丸霰の間に倒れむは猶本意ならめど、只浪風に玩はれてはかなかりしこと、いかに口惜かりけむ。他国の人なりとはいへど、おのれはこゝに一滴の涙なきこと能はざるなり。見渡せば港内水静にして青き畳をしけるが如く、岩島は厳として動かず。立てる青松、亦さりげもなくいとやさし。船は早く留りしも、一行がはしけに移り全く上陸せしは九時半なりき。三輪崎は和歌山県にして東牟婁郡なり。是亦小都会にして、新宮に次げる所なりけり。戸数百ばかり。海岸の人家多く、丸き石を屋根に載けるは沖より吹き来る風に備へたるものか。

衣かせ山見ゆ。松本君、

衣かして汝なんとする裸山
衣かせ吾か旅これより山の奥

をのれも、

つたへきく汝のその名まことならば　衣かせ山旅ゆくわれに

七十里の浪の穂を事なく渡りつくして、これより那智の深山に向はむとす。一行勇ましく歩み行く。宗村君、

熊野なだわたり尽しついざさらば　那智の神山ふみうがちてむ

おのれ、

けふよりはわが世なりけりよしゑやし　山高くとも道あしくとも

一行、外套を肩に委ね、鞄を腰に横へたる様皆同じ。只両教授が袴の股立取りて洋傘携へたまへるあるのみ。伊賀にては収税官吏と誤られぬと聞きしに、此度は何といはるゝならむなど語る。天晴れ気暖にして、足いとかるし。苦毛零来雨可など歌ふ程に、はや佐野の村なり。神武紀に所謂越狭野至熊野神邑と見えたる狭野の地なり。此の辺りの道は近き年の開通と見えて、広く清らなり。海岸に出で山林に入り、坂を登り山を降り、田畝を過ぎて行く程に、宇久井といふ処に至る。過ぐれば勝浦湾前面に横はる。汽船、黒煙を吐きて進めるは、吾等が三輪崎にのり棄てたるもの今勝浦につかむとするなるべし。海岸の危岩断崖、何処もながらいと妙なり。稍行けば一つの茶店あり。猿茶屋といふ。その名もしるく店前に猿の鉄鎖に繋がれたるあり。食を乞ふ様をかし。此所に息ふ。時に午前十一時、半時ばかりにして出で立つ。日将に中せむとして暑さ甚しく、汗背に透る。十二時半、浜の宮といふ所に着く。村の中央に神社あり。標して熊野三所大神社、神武天皇頓宮の遺蹟といふ。此所ははや那智村にして、浜宮は其の大字なり。神社に至る。村社なり。古く渚宮といふものこれなり。

拝殿あり。中央を通路とし、左右に八畳宛の室を設け、左に神霊守札等あり。拝殿を出づれは直に本社なり。清らかにはあらねど、小くもあらず。謹みて大前に額く。祭神は天照大御神、彦火々出見尊、大山祇命なりといふ。本社の左に小石祠あり。丹敷戸畔命と刻す。右にも亦同じ様なるあり。三狐神と刻す。此は「ミケツカミ」と訓みて、即保食神なりとぞ。木野戸教授、

わけ登る熊野の山路さきかれと　渚の宮に幣たてまつる

神社の右隣に一小寺あり。補陀洛山寺といふ。堂に文武天皇の勅額あり。長三尺横二尺ばかり、金刻の篆書に日本第一補陀洛寺と記せり。古は盛なりし寺ならむ。頓宮の跡は何処ぞととふに、社掌汐崎某いでゝ、神社の前なる杉むらの荒蕪せる処に導き、この所なりといふ。周囲四間許の石壇に草蓬々たり。社掌曰はく、此の地元、老樹森立して頗秀霊なりしかば、土民皆畏敬して此の境に入るものなかりしを、明治の初年上地せられ、その後払下となりて老杉古松皆檀に伐採せられ、遂に民有に属し、此の様とはなれるなりけりと。拝殿に帰る。社掌、浜宮神社由緒要領といふものを示す。その神武天皇神祇礼祭の旧趾の条に曰はく、

大神社　今ハ村社タリ。往時ハ渚宮、又王子社トモイヘリ。

三社一殿ニシテ、正殿ニハ天照皇大神、左右両殿ニハ彦火々出見尊ト大山祇命トヲ奉祀ス。地方ノ古伝ニヨレバ、神武天皇熊野通御ノ時、此地ニシテ丹敷戸畔ノ一族ヲ誅滅シテ親ク天祖皇祖ヲ祭祀セラル。是祭神鎮座ノ起源ナリ、云々。今日記録ノ確徴スベキモノナシト雖、此神社（往古ハ渚宮、又ハ王子宮ナル宮号ヲ冠シ、中古神仏法混淆ノ時代ニハ熊野三所権現ト称シタリ）、往時ニアリテハ熊野中屈指ノ大社ニ属シタリシコトハ、今日現在スル所ノ各種ノ実蹟ニ徴シテ口碑ノ所伝ノ偶然ニ非ザルヲ知レリ。例ヘバ其境内ニ神武天皇頓宮ノ遺蹟アリ（地方ニテ若宮ト称ス）。神社ト咫尺ノ間ニ相対ス。又往時、此地ニハ一戸ノ居民ナク、一村挙ゲテ本社奉仕ノ神職タリシコト、及境内ノ一隅ニ丹敷戸畔ノ小祠（往時ハ錦浦大明神ト称シタリ）アリ、地主ノ神ト称シテ一村ノ産土神タリ。

神武天皇の頓宮の跡なりといふもの已に疑はし。もし頓宮の跡にして真跡ならずとせば、天地神祇をまつりたまへる跡といふことは従ひて破るべし。己はこの頓宮の跡を疑へり。そは考証に譲りて茲には省きぬ。又、社殿創立の条に曰はく、

上古祭場ノ遺趾ニ就キ、欽明天皇ノ時ニ社殿創建セシモノナリト伝フ。現在社殿ハ慶安元年ノ改造ニ係レルコトハ、本社所蔵ノ棟札ニ徴シテ明ナリ。

欽明天皇の時といふはいかゞあらむ。その証とする処は只熊野年代記といふ書に欽明天皇廿四癸未年浜宮殿出現とあることの一のみ。又、この書に註して、熊野速玉神社々人の家に秘蔵したる熊野最古の旧記なりといへど、これのみにてはあまりに力弱し。かくて社殿の慶安元年の改造といふは、慶安元年よりことしまでは二百七十九年なり。社の様を思ふに此は信なるべし。又、祭典式略の条に曰はく、

鳥獵ノ式

村民山野ニ獵シ獲ル所鳥肉ヲ供シテ祭ル。蓋彦火々出見命故事ニ依ルナラン。古事記ニ、火遠理命者為山佐知毘古而取毛麁物毛柔物。

注連縄懸ノ式

社前ノ老樹ニ長大ノ注連縄ヲ懸ク。其式尤モ鄭重ヲ極ム。蓋天祖ノ故事ニヨルナラン。古事記ニ、以尻久米縄控度其御後。

的弓ノ式

上古此地ニシテ丹敷戸畔ヲ征討アリシ故事ニヨルト云ヘリ。

百石当ノ事

往時ハ祭典ノ費トシテ一期ニ百石ノ米ヲ支消スルヲ例トセリ。其主幹タル者ヲ当人ト云ヘリ。往時ニハ牟婁在庁ノ官人及熊野別当等モ祭式ニ参列シタリト云フ。百石当ノコト宝永年間ニ至ルマデ其遺式アリシガ以後絶エテナシ。宝永旧記ニ霜月当ノ廻張ナルモノアリ。其文ニ、霜月、当ノ儀ハ米

百石ヲ出シ、十月晦日ヨリ度々ノ振舞コレアリ。氏子二組ニ定メ之ヲ祭ル云々、トアリ。以テ往時ノ盛式ヲ想見スベシ。

頓宮の事信を措き難しとすれば、是らの祭式故事はいかにと云に、こは学説に依て後人の造れる者にもやあらむ。かくて百石当など盛なる様思ふに、この宮は元那智の宮を移したる所にて、即那智の浜宮なりしなるべし。さればこそ熊野別当も参来て祭典に預りし成べし。地理に依て思ふもよく当れり。然るに其の後浜宮の海を以ちて丹敷浦なりといふ学者の説を聞き、それより祭神を改めたるなるべし。学者の説によりて種々搆へごとするは何処にもあることにて、丹敷浦の四、五ヶ処あるにても知られなむ。

猶、丹敷浦のこと、丹敷戸畔のこと、神武天皇御順路のことなどもあれど、そは皆考証にひくべければこゝには省きつ。附録の旧跡といふ条に曰はく、

山城島

村ノ東南海中ニアリ。往時平維盛此島ヨリ入水セントナシ、転ジテ那智山中色川村ニ匿ル。今尚其裔アリ。

かくて平家物語を少しばかりあげたり。

同書を引きて、はなに戯れ月にあぐれ(らカ)し平家公達の最後がいかに哀なりしかを知らしめむ。

三つの御山の参詣事故なく遂げ給ひしかば、浜の宮と申し奉る王子の御前より、一葉の舟に竿さして、万里の蒼海に浮び給ふ。遙の沖に山なりの島といふ所ありき。中将それに舟こぎ寄せさせ岸にあがり、大なる松の木を削りて泣く〳〵名籍をぞ書きつけられける。祖父太政大臣平朝臣清盛公、法名浄海、親父小松の内大臣左大将重盛公、法名浄蓮、三位の中将維盛、法名浄円、年廿七歳、寿永三年三月廿八日、那智の沖にて入水す、と書付て、舟にのり沖へぞ漕ぎいで給ひける。思切ぬる道なれども、今はの時にもなりぬれば、さすが心細く悲しからずといふことなし。頃は三月廿八日のことなれば、海路遙にかすみ渡り、哀を催すたぐひ哉。只大方の春だにも、くれゆく空は物うきに、況や是は今日を最後只今限のことなれば、さこそは心細かりけめ。沖の釣舟の波に消え入るやう覚ゆるが、さすが沈みもはてぬを見給ふに付ても、御身の上とや思はれけむ。己が一つらひきつれて、今はと帰るかりがねの、越路をさして鳴行も、故郷へ言伝せまほしく、蘇武が胡国の恨まで、思ひ残せる隈もなし。こはされば何事ぞや。猶妄執のつきぬとこそとおもひかへし、西に向ひ手を合せ念仏したまふ心の中にも、さても都には今を限とはいかでか知るべきなれば、風の便の音つれをも、今や〳〵とこそ待たすらめと思はれければ、合掌をみだり、念仏を止め、聖に向ひて宣ひけるは、哀人の身に妻子といふものをばもつまじかりけるものかな。今生にて物を思はするのみならず、後世菩提の妨となりぬる事こそ惜けれ。只今も思ひ出でたるぞや。かやうの事を心中に残せば、館(余カ)に罪深むる間、懺悔するなりとぞ宣ひける。聖も哀に思ひけれども、我さへ心弱くしては叶はじとや思ひけん。涙押し拭ひ、さらぬ体にもてなし、あはれ高きも賤しきも恩愛の道は思ひきられぬことにて候へば、誠にさこそ思し召され候ふらめ。中にも夫妻は一夜の枕をならぶるも、五百生の宿縁と承れば、先世の契浅からずや候ふ。生者必滅、会者定離はうき世の習にて候なり。末の露本の雫の例あれば、仮令遅速の不同ありといふにも、後れ先立ち御わかれ、終になくてしもや候ふべき、云々。頻に鐘うちならし念仏をすゝめ奉れば、中将も然るべき善智識と思し召し、忽に志念(念カ)を飜し、西方にむかひ手を合せ、高声に念仏百返ばかり唱へ給ひて、南無と唱ふる声共に海にぞとひ入り給ひける。与三兵衛、石童丸も同じく御名を唱へつゝ、続きて海にぞ沈みける。

さて此由緒を尋ね行くに、つと胸ふたがりて物も言はれぬ処なりけり。其は神社鑑査状の第一条なり。曰はく、

鑑　査　状

第四七一号　　和歌山県下大神社

天照皇大神像

一彦火々出見尊像　　木丈各一尺五寸　　参体

大山祇命像

右美術上ノ参攷トナルベキモノト認定ス

明治廿四年七月三日　臨時全国宝物取調局臨時鑑査掛　　山名貫義

（以下連名略ス）

あなかしこ。御霊の宿りますらむ神体は、かしこくも宝物取調局鑑査掛の手になり。あなかしこ〳〵。俗吏の手を触れたるさへあるに「美術上ノ参攷トナルベキモノト認定ス」とはそも〳〵何といふことぞ。あはれ政府は神社の何物たるを知らざるか。寺院仏閣をこそ美術の参考にせめ。神社に向ひての美術よばゝり何たる不敬ぞ。何たる無礼ぞ。吾のこの一条を読むに忍びざるなり。

神社と国家とは如何なる関係あるかをしらば、其の神社の神体を美術扱することの憚なしや否やは言はずして明ならむ。国庫は何故に二万七千余の神宮費を支出するか。国家何故に官国幣社を設けたるか。府県社は何が為ぞ。郷村社は何が故ぞ。いかに物しらぬ俗吏輩とはいへ、報本反始の大礼なること位は知られむを知りながら、猶しらざるまねするか。其心情悪むに堪へたり。そはとまれかくまれ、政府が神社の神聖を犯して御神体を宝物扱し美術視するこそ奇怪の業なれ。政府は神社を設立したる旨趣を忘れたるか。さりとも神体を改めしは神仏混淆の名残にて、さるべからぬ形せるものを神宝として齊き居らむも知れずとて、之を調べしなりといはむか。然らば「美術上ノ参攷トナルベキモノ」といふ鑑査状は許すべくもあらず。又、宝物取調局の俗吏の行ふべき業にはあらず。彼は確に神社を設けし旨趣を忘れたるなり。彼は確に神社と国家との関係を知らざるなり。神霊それいかにか感じ給ふらむ。やがて神社を辞して那智に向ふ。六十八町とぞいふ。川関、井関などいふ所をすぎて、市野々といふ村にかゝる。打ちむれたる小児がよそ行きの晴したるおもゝちいとうれしげなり。彼方の森に翻れる二疏の大旗にて此の里の祭礼なりとはしられたり。安元君、

産土の社の森の下蔭に　ひざ折りふせて何いのるらん

行ほどに道の曲れる角に遇ひぬ。あまた集へる若ものは手を拍声をあげて来れり〳〵と悦び叫ぶ。忽見ゆる神輿の一列。先に立てる二人の男の子は相ならびて、麻上下に大小を横たへ、割たる竹の柄を紙にてまけるを杖つきたり。次には新しき米俵を肩に負ひて、一列に二人。次には高さ一尺ばかりの黒き瓶子を捧げたるもの四人。次には白き式台に餅をもりたるを捧げたるもの二人。次には十二、三ばかりの少女が十人あまり。頭より被りしは色すすけたれどもたしかに絹の白衣なり。思ふに被衣の遺風なるべし。次には神職一人。黄袍の正服厳めしく、大和錦の祝詞袋を携へ、肅々としし歩を移ししは、かかる山里にもと思はれぬれど、笏を襟に挿みたるにてこそ興ざめしか。次は神輿なり。形は小なれども縮緬の幕引きはへたるいみじう目出たきに、之に太鼓を結びつけ舁ながら打ならししはまた口惜しかりき。次は氏子なるべし。男の子は紋付きたる羽織を着、女は赤き衣飾りて男の童を引くあり。少女子携ふるあり、凡二、三十人ばかりつき従ふ。えもいはずうれしげなり。松本君、

すなほなる里の民らが心にぞ　神はやすけくすみたまふらむ

すなほなる里の民らが神まつり　をかしと笑ふ人ぞをかしき

徒に世をばなげかし田舎には　なほ教ふべき民らありけり

なまなかに文よむ人ぞなまなかに　よこさの道にまよひ入るなり

宗村君は熊本県の人なり。そぞろに故郷思ひ出でけむ。歌ひけらく、

嗚呼なつかしき託摩の野　　ああ想ひ起す豊田河原

一年鎮守のあきまつり　　着よとて母が縫ひませる

茶縞のあはせ紺の足袋　　吾ははれ衣ときかざりて

森の横手の花相撲に　勝ちて貰へる手拭を
見せたきこころの矢竹にて　道づたひ立走れば
賞めらるるよりも叱せられし　昔そぞろにしのばれぬ
嗚呼託摩の野豊田河　思ひ起さぬ時なきを
はしなく又もここに来て　旅の衣をぬらすなり
人間至る処懐古の情起る　思ふまじとて茶屋をいづれば
入りあひの鐘夕をつげ　雲那智山の峯をおほふ

市野をすぐれば広き田畝の間に出でぬ。目前に蟠れる鬱蒼たる深山は、これぞ那智のみやまなりける。道程は即一里もあるならむ。行くこと暫しにして、繁れる木かげに一叢の白雲を認む。雲の如く、又霧の如し。やがて小流あり。鳥居立つ橋の擬宝珠に銘あり、曰はく、

日本第一熊野那智山振加下馬橋　大旦那源朝臣頼宣氏
寛永二年乙丑十二月吉日　奉行中村四郎左衛門尉一成

やうやく那智の麓に至れるなり。傍の旅宿兼茶店に息ふ。店に札あり。御人宿と記す。深山に近ければ、御狐御狸などの宿を求むることあるにやと笑ふ。時正に午後一時。然れども店小にして俄に十三人の食を弁ずることを得ざるなり。食ふべき菓子もなし。目さとき一人、神棚に餅の供はれるを見て、あれ売らずやといふ。さすがに拒む。さても鋭き眼光よと笑ふ。之より上までは幾何あるぞと問ひしに、「十八町アリマスノシ」といふ。大雲取は峻しきかといへば、「ヒドクアリマスノシ」と答ふ。何里程あるかと尋ねしに、「四里アリマスノシ」といふ。一行は遂に噴き出しぬ。彼は何事とも解せぬなるべし。やがてこゝを去りて、橋を渡る。道は石をたゝみ、巾は一間にあまれども、登りいと急なり。かたへの老杉高く茂りて、道為に小暗し。一町ばかり上るに、足重し。あへぎ〳〵上る程に、木立まばらなる右の方に遠く白煙の上るが如きを見る、先に霧か雲かと迷ひしものなり。音も聞ゆ。うれしさ言はむ方なし。神躍り気揚る。上り上ること十五、六町にして、神社の辺に至る。石階いよ〳〵急なり。人家の数二十ばかり。軒また石階に従ひて並ぶ。皆石垣の上にありて、一見城郭の如し。蓋那智山房の跡ならむ。亀井屋某に入る。門を搆へ、玄関いと厳なり。庭に廻りて廊下に息ふ。見をろせば千山万岳低く、身はこれ天上の神人かと疑はる。鞄をおろし、外套を置き、昼食を命じおきて、神社に詣る。石階を上ること猶一町。山上広く平かなるところにあり。県社熊野夫須美神社といふ。

手を洗ひ口をそゝぎて進めば拝殿あり。周囲十四、五間、奥に神床を造り、榊を立つ。拝殿の右に社務所あり、間口八、九間、奥行三、四間もあらむ。神職二人之に居り。拝殿のかなたに廻れば、隔たること十間ばかりにして、神殿五棟あり。丹青の美、彫刻の妙を加へざれども、厳なる宮造りにて、形小ならず、様いやしからず。一殿毎に石階あり、石階毎に門あり。固く閉つ。門に木札あり。祭神を記す。右の端は大己貴命。その左は家都御子神。（此は本宮の祭神、又、出雲国なる国幣中社熊野神社の祭神・櫛御気野命と同神にして、素戔嗚尊なり。上古に天津国より木種をもち降り給ひて、其御子五十猛命、大屋津媛命、抓津姫命、紀国に渡したまひて樹木を繁殖せしめられしかば、樹木他国にまされるを以ちて木の国と名づくるに至れり。かく木に功ありし神なり。故に家都は木津にて、御子は伊弉冊尊の御子の義なり。又、櫛御気野命は奇御木主命にて、やがて同義なり。）国常立神。その次は御子速玉神。（此は新宮の祭神と同神なり。伊弉諾尊の黄泉の国より帰りたまひし時になりましし神にて、御名は映玉の義にて、美称なり。）伊弉諾尊。其次は熊野夫須美神。（此は諸社大事に結宮は女躰とあるによりて思へば、伊弉冊尊なるべし。然るを同殿に伊弉冊尊を祭れるは、夫須美神やがて伊弉冊尊なるよしをしらず、誤りて二神となしたるにこそ。かくて夫須美をむすびともいへり。美は女称なることしるきを、夫須の義はしること能はず。或は久須の転通ならむかともいへり。尚考ふべし）事解之男神（此は速玉神と共に生れましにて、事は御夫婦のこと、解は斛の誤にて、さかとよむ。即離ることなり。御夫婦伊弉諾・伊弉冉二神の放り離れ給ふよりの御名なり。男は字の如し。）に坐して、此は結宮とい

ひて、この神社の本社なり。その次は天照大神なり。その左方折れて拝殿の左面に向ひて横に長き神殿あり。標して八神殿といふ。その左傍に小殿あり。祭神は建角身命。その次に末社二殿あり。少名彦命、彦火々出見命を祭るとぞ。木野戸教授、

名におはす速玉のをの長かれと　結の宮にかくるねきこと

本殿と拝殿との間を右に行けば、極る処に鳥居ありて、石階あり。之を下れば うたてや大なる香爐立てり。大書して西国第一番札所といふ。錦爛の装飾いときら〳〵しく、寺僧、守札を護して座し、香の烟内に満つ。

大神の御庭にちかくなかごらの　残れる見れば髪さかたつも

かみ長がたつる烟にかしこきや　みづの玉垣いかにけがれむ

維盛のめゝしき挙動が那智の山僧をして袖しぼらしめしは、蓋この辺なりしなるべし。

堂の前に不老軒といふみやびたる店あり。瀑の写真、桂樹の釜敷、神代杉箸などうる。瀑の水もて製れりといふ養甘もあり。瀑の写真、遂に品ぎれとなる。足をかへして社務所を訪ひ、古事を聞かむとす。松本・三浦の二君已にあり。社掌潮崎某、書類五、六綴を出して示せる所なりき。己も手にとり二枚、三枚よむ程に、皆去りて影なし。即証書を置きて之を借り、三人して宿に至れば、今しも昼げの最中なりけり。食を終へ、主人を召して瀑を問ふに、数は四十八あれども一、二、三を見ば足りなむ。日足もそれにて程よかるべしといふ。即案内を命じてこゝに向ふ。時に午後三時。

深々たるみ山を辿り行くに、道狭くして自一列の単陣形となる。或は上り或は下り、右に行き左に廻り、凡二十町許にして那智川に出づ。之より石を飛び岸にそひ河をゆくこと四、五町にして、二ノ瀑に至る。瀑底水漂ふ方十間あまり。淵に古木の根あり。踞して之を見る。瀑の長十八丈、巾二丈もあらむ。翠木緑樹の間に洒せる大白布。その様面白からざるに非ざれども、岩壁甕の如きに添ひて落つるが故に水岩を嚙む壮観なし。宗村君、

これぞこの那智の二の瀑　山姫のおりてさらせる布にやあるらむ

一小山を越て又河をさかのぼること五、六町にて三の瀑を見る。近づくこと凡廿間。道極りて進むこと能はず。水中の大石に上りて之をのぞむ。長さ五丈、巾二丈許なるべし。大さは前に劣れども、岩を離れて直に落つるを以て水声堂々として神目を快くす。こゝは吾が一行の流れを遡れる最終点なり。水清くして底の真砂も数へつべし。やがて二の瀑に戻り、先の道を辿りて流れに添ふこと一、二町、一川合して左に流る、これより河は黄褐色の磐石を以て床となし、水いよ〳〵清し。岸に添ひて下ること一町許にして、岩床深く凹みてその長凡五間あまり、剣ヶ淵といふ。案内者曰はく、昔龍馬、神剣を負ひて此淵より出づ。かの岩上に見ゆる蹄のあとは、即その馬の歩みし所なりと。此れより、或は岸をつたひ、或は水にいり行くこと二町許にして、河はなく水は別天地に飛ぶ。身はこれ一の瀑の□(ママ)頂に出てたるなり。その響遙に雷霆を聞くが如し。傍に巨岩あり。松杉之を覆ふ。即かはる〴〵之に上て下界望む。地低きこと幾千仞。老杉古松苗の如く寸木の如し。目はくらめき体は将に倒れなむとす。而して瀑は只其上半を見るのみ。響の所を知ることあたはず。慄き恐れて皆急ぎて退く。かくて又元きし方に帰り、山の半より道を左にとり、つゞらおりなる細道を下り下れば、いと広らかなる石階に出づ。音いみじう近し。これ一の瀑の道なり。猶も下りに下りて階を終れば平地なり。拝殿あり、大瀑布前に直垂す。これ飛龍神社の拝殿なり。河を挾みて二、三十間をへたつれども行くに道なし。即一拝し仰ぎて之れを見る。雄大豪壮、愉絶快絶。胸ひらき神とふ。人々われを忘れて茫然たり。しばしばもの いふものもなし。やがてよいかな〳〵とさけぶは橋村教授なり。なにをもちてか之に例へむと独ほめのゝしりたもふ。瀑は断崖千丈にかゝり、天を劈き□(ママ)々として飛落すること八十四丈、巾は五丈に余る。流水初めは分れて三脈となり、次には合して一となる。層々として烟をはき、濛々として霧を漲らす。尽くるが如

くにして尽きず、切るるが如くにして切れず。或は累峭に触れて雪の如く飛び、或は窮崖にあたりて玉の如く砕く。終りに勢を改めて白雪巉岩を打てば、巖怒り水吠え山岳も将にゆるがむとす。げに天地の壮観なり。見るが内に服またく潤ふ。

木野戸教授、

けふぞ見る山もとゞろに鳴神の　遠音にきける那智の滝つ瀬

近藤君、

雲井よりたゞにおちくる水の音の　あないさましや那智のたきつせ

金剛君、

万代の長きためしにかゝりけり　那智の御山の瀑の白糸

白雲のかゝる御山の高ねより　おちてとよもす那智のたきつせ

安元君、

水上は雲にかくれて鳴神の　落つかとぞきく那智のたきつせ

よどみなき那智の御山のたきつせは　つきせぬ御代のためしなるらむ

そのかみの代々の御門のいでましも　尚世にひゞく那智の滝つ瀬

三浦君、

世々の君のみゆきまししもことわりや　雲井にひゞく那智の大たき

高山の峰をかすめてゆく雲は　那智のみ滝のさまりなりけり

天の川水やあふるとまがふらむ　雲井にかゝる滝としらずば

雲をおこし霧をふらして竜神も　いよりはゞかる那智の大瀑

松本君、

み山かくれに住みたまふ　いかなる神のすさびにて

この滝つ瀬のおちくらむ　古松老杉あたりくらく

千仞の断崖見あぐれば　千尋の白糸打みだれ

おちては岩に砕かれて　もゝちよろづの水く玉

谷の底ひに風たちて　白雲起りてのぼれども

満山の草木そよぎたちて　百の雷とゞろけと

夕日の光さしそへば　五彩をいろどる虹の橋

千年の苔なめらかに　万年の淵みどりなり

いかなる神のすみまして　遊びますらむすさびにか

あやしきものよかしこしや

金剛君また吟あり、

迸空飛沫淡如煙　瀑布高懸那智巓　想看花山移輦処　至今雲色惨秋天

おのれ、

山はさけ岩は砕けむひゞきなり　那智のみ山のあはれ大滝

那智の山ゆるぐばかりの音すなり　神のますとふこれの滝つ瀬

仰ぎ見れば千尋の岩にかゝりけり　をゝしかしこし那智の大滝

あら鷲もふかれて落ちむ風を起す　これのみたきに近くかけらは

白き糸さらせる布にあくかるゝ　人に見せばや那智の大滝

おちたきつたきのいたゞきあふぎ見れば　さきの大岩豆の如しや

岩高くひゞき勇しあはれ〳〵　何と歌はむ那智の大たき

文覚の滝はこの大瀑の下流にして、巨石の水を被れるもの是なりと案内いへり。その高さ二間もやあらむ。水は石をめぐりて前と左右と一連也、石の下数畳の空居ありとか。文覚はこの空居に入りて行を修めたる也といふ。平家物語の伝ふる所によれば、かゝる石の下にはあらぬと、いづれ正しからむ。文覚は当時不敵の剛僧。人の為さゞる難行を修め、人の恐るゝ苦行をつとむ。四海波隠の時、花に酔ひ蝶に狂へる平家の公達をして富士川の奇劇を演ぜしめ、壇の浦の悲曲を奏せしめたるもの、実にこの文覚の力なりけり。今平家物語をかりて、彼が此所に幾何の苦行をせしか、いかにして平氏顚覆の原動力となりしかを示さむ。

熊野へ参り、那智籠りせんとしけるが、先づ行の試に、聞ゆる滝にしばらくうたれて見んとて、滝本へこそ参りたれ。頃は十二月十日余のことなれば、

雪ふりつもりつら、ゐて、谷の小河は音もせず、峰の嵐吹き氷り、滝の白糸垂氷となりて、皆白妙におしなべて、四方の梢も見えわかず。然るに文覚滝壺におりひたる。首際つかりてじく（慈救）の呪を満てけるが、二、三日こそありけれ、四、五日にもなりしかば、文覚堪へずして溯き上りぬ。数千丈漲り落つる滝なれば、なじかはたまるべき。颯とおちながされ、刀の刃の如くに、さしも厳しき岩かどの中を、浮きぬ沈みぬ五、六町こそなかれけれ。時に美しき童子一人来りて、文覚が手をとりて引きあげ給ふ。人奇特の思ひをなして、火を焼（炙カ）きあぶりなどしければ、定効ならぬ命にてはあり、文覚程なく生きいでぬ。大の眼を見瞋らかし、大音声をあげて、我此滝に三七日打たれて慈救の三洛叉をみちようと思ふ大願あり。今日は纔五日にこそなれ、未七日だにも過ぎざるに、何者かこれまでとりて来れるぞといひければ、聞く人身の毛よだちて物いはず、又滝壺に立ちてぞうたれける。第二日と申すに八人の童子来りて、文覚が左右の手をとりて引きあげんとし給へば、散々にもみ合ひて上らず。第三日と申すに終にはかなくなりぬ。時に滝壺を汚さじとや、鬢ゆいたる天童二人、滝の上よりおり下らせ給ひて、世に暖に香しき御手を以て文覚が頂上よりはじめて手足の爪先裏に至るまで撫で下させ給へば、文覚夢の心地して生き出でぬ。そも如何なる人にてましませば、かくは憐み給ふやらむと問ひ奉れば、童子答へて曰く、我はこれ大聖不動明王の御使に、金伽羅・勢多伽といふ二童子なり。文覚無上の願を起し幽冥の行を企つ、ゆきて力を合せよと明王の勅に依りて来れるなりとぞ答へ給ふ。文覚声を怒らして、さて明王は何処にましますぞ、都率天に、と答へて雲井遙に昇り給ひぬ。文覚掌を合せて、さては我行をば大聖不動明王までもしろし召されたるにこそと彌頼もしう思ひ、猶滝つぼに帰り立ちてぞうたれける。其後は誠にめでたき端（瑞カ）相ども多かりければ、吹きくる風も身にしまず、落ちくる水も湯の如し。かくて三七日の大願遂に遂げしかば、那智に千日こもりけり。

文覚の滝は見るにたらず。人々眼を転じて、又、大瀑を仰ぎ見る。快何時か尽きむ。日は漸く傾かむとす。遂にこの壮観を後にして帰路に就く。石階の登り口に木標あり。

太上天皇恒仁（弘安二年二月晦日）初度

と記せり。恒仁は亀山天皇の御諱なり。かくて弘安は後宇多天皇の御代の年なり。法皇とならせ給ひし後、かの蒙古の御祈の為に行幸し給ひしにこそ。後白河法皇もこのわたりに智証門人阿闍梨滝雲坊行真と銘せる卒堵婆をたてたまひし由、源平盛衰記に見えたりき。石階をのぼること六町ばかりにして宿に帰る。時に午後五時廿分。此日たま〳〵重陽の節にあたるを以ちて、二国或は三国の同盟忽興る。各赤丹のほにきこしめして、盛に瀑の快をかたる。

思ふこと遂にならずば　この山にかくれてすぎむ瀑を友にて

食終りて先の書類を見る。その由緒に記して曰はく、

当宮ハ紀伊国神名帳ニ載スル所ノ牟婁郡正一位熊野夫須美神社、正一位家津御子大神、正一位御子速玉大神ノ三神ヲ始メ奉リ、滝宮、若宮、八神社、御県彦社、其他ノ神ヲ祭リ、中古熊野三所権現ト唱ヘ、亦十二所権現ト称ス。其始ハ神武天皇戊午ノ年、東征スルヤ、皇師ヲ引卒シ、荒坂津、浜宮、丹敷浦、那智山下ニアリ、行程五十余町ニ至リテ、酋長丹敷戸畔ナル者ヲ誅伐ス。時ニ、邪神ノ毒気ニ中リ、人物感ク瘁エテ皇軍復振フコト能ハズ。爰ニ奇シキ哉、倏忽那智ノ山東光峰ニ神光ヲ現シテ天皇ヲ補佐シ、霊光赫々トシテ則那智大瀑飛滝神社ノ淵底ニ鎮リ給フ。於是乎、帝神威冥助ノ灼然タルヲ□（ママ）感シ、瀑下ニ幸謁シテ親ク奉賽シ、初メテ此所ニ崇祭ス。而後、仁徳天皇五年、或云五十八年、勅シテ今ノ宮地ニ鎮座ス。則チ第二殿（家都御子命、国常立尊也）、第三殿（御子速玉神、伊弉諾尊也）、第四殿（熊野夫須美大神、伊弉冊命、事解ノ男神ナリ）、此三宮ヲ古ク熊野三所大神ト称ス。第一殿（大己貴命也）、第五殿（天照大御神也）ヲ合セ上五社ト称シ奉リ、四時ノ祭典厳ニ之ヲ執行ス。

中ニモ第四殿結宮ヲ以テ本社トス。星霜移リテ両部習合ノ時ニ際シ、桓武天皇ヨリ勅額ヲ賜ヒ、以テ神徳ヲ表章セラル。曰ク、日本第一大霊験所根本熊野三所権現ト。是レ即第二殿ヨリ第四殿ニ至ル大神等也。古ヨリ本社ノ勅額門［今はこの門なし］ニ揚グ。維新ニ際シ、権現号ナルヲ以テ檄シテ之ヲ奉蔵ス。社伝ニ曰、我社長ノ職ヲ襲ク、昇殿シテ三神社ノ号ヲ前社長ヨリ口授シテ、旧来伝フル所ノ牟婁郡印ヲ奉ジ、一社ノ執務ヲ管スル例ナリ。古ヨリ旧除夜旧晦日ノ夜、社長出仕ノ三位ヲ拝スル例アリ。自余ノ社ハ拝セズ。此ヲ社長ノ三社拝ト云フ。

伝云、八咫烏皇師ヲ援奉ルノ功績、澆漓ノ今ニ赫々タリ。此レ我神祠ニ八咫烏神霊ヲ頒布スルノ権輿ナリ。一月六日別宮飛滝神社烏神霊書神事古伝アリ。神歌神ハ元ヨリアガラモ神ヨ心スマセバミナ神ヨ心スマセバ皆神ヨ、上古印版ノ術未開ケズ。依テ烏神霊ヲ筆書シテ頒布セシ遺例ナリ。其神験ノ炳然タルヤ、普ク衆庶ノ知ル所ナレバ、略ス。

爰に奇しき哉、倏忽那智の山東光峰に神光を現はし云々、大瀑の淵底に鎮り給ふとはあやしき筆づかひなり。かくては高倉下命が神剣を奉りしことをいかにとかむとすらむ。特に一言の之を弁ぜざるはいと疑はし。且神武天皇此所に行幸ありて親しく奉賽し給ひしことは、正史は更なり、雑書にも未之を見たることなし。もし実に然らむには、なにの岩くれの淵など名あるもの多き中に、しるしとなるべきものもあるべし。さるに一として天皇にかゝはれるものなきは、いかに。こは浜宮をにしき浦といへる説によりて、さかしらなる山僧が造れるならむ。飛滝神社の祭神を記さゞる神歌の仏めきたるなど、凡べて山僧の手に初められたむと思ふこと多し。その浜宮が丹敷浦に非ることは考証に之を弁ぜむ。

さてこの社のことにつき諸書を見つれど、参考書乏しくよるべきものなし。故竊に思ふに、此地は聞へたる大瀑ありて、行を勤むるなどには最適せる所なり。されば古、山伏行者の輩多く集ひけむ。これらの輩、遂に近くましまして霊験高き熊野両宮の神霊を迎へて奉祭したるを、後に何の神たれの神と合せ祭れるなるべし。社長の三社拝といふことを思ふに、その初はこの三社のみなりしならむ。それより勢つよくなりにしまゝに、山僧妄に仏意を寓せる神歌などを造り、また神祇官にならひて八神殿などをも創めしなるべし。八神殿の祭神によりて思ふも、たゞ神祇官の八神殿にならはんとしたるのみにて、その神祇官の八神殿にはいかなる神を祭れるかをも知らずして、只八柱の神を祭りしならむと見ゆるは、この八神殿の祭神を見て知らるべし。さればこの神社は熊野三山中最新しきものなるべし。本宮は崇神天皇の御代、新宮は景行天皇の御代に神社を建てられたるなりといへり。那智はこの以後なるべし。仁徳天皇の御代といふこと或は然らむ。かくはいへども、この神社決して尊からずといふには非ず。只中頃山僧があらぬ造りごとしたりといふのみ。熊野より移りませる神霊は厳たり。しかも霊験いやちこなりしことは、下条に挙ぐる武将等が信仰あつかりし様を見て思て（ママ）べし。

又、祭典の事を記して曰はく、

当宮御創建以後一千五百有余年ノ今ニ至ルモ中絶スルコトナク、一社ノ大祭今以テ厳重ニ執行ス。其神事ハ仁徳天皇勅祭ノ遺例ニシテ、毎年六月十四日、別宮滝本大布ヨリ本宮ヘ奉迎ノ祭式ヲナシ、又、六月十八日別宮飛滝神社ヘ渡御ノ神事等、最モ古風ノ祭式ナレバ、其大略ヲ左ニ記ス。

六月一日、大祭神役定ノ式アリ

十四日、未ノ刻ヨリ、別宮滝本祭場ニ於テ宮廻リノ祭式、管弦、神楽舞等ヲ奏ス。申ノ刻、奉迎ノ事、神輿ハ扇ノ神輿ト称シ、全体飛滝ノ形ヲ表シ、長壱丈八尺、杉ノ骨木ニ、大和錦ノ表地ニ、白麻布ニ菊巴ノ御紋ヲ附シタルヲ裏地ニ張リ、鏡八枚、金地ノ日ノ丸ノ扇子三十三本、其余杉ヘキ板ニテ造レル光リ縁松及蝶ノ髭烏扇子ノ品ヲ以テ餝リ奉ル事、古例ノ口授アリ。其数現今十二基。即刻限ノ太鼓次第神役係リノ諸員、大勢本宮ニ打揃ヒテ、ザア〳〵ホウイト大声ヲ発シ、一時ニ出ヅ。本宮ト別宮トノ両所ヘ役割ニ応ジテ相分

レ、神輿御渡リ中、其前ニ五本骨ノ扇形（長八尺）ニ馬ヲ画キタルヲ第一ニ押立ツルナリ。古老ノ伝ニ、上代ハ穀ニ虫ノツキタルトキノ形ヲ作リテ、蝗ヲ掃除スルコトアリシト。右ノ古事ニヨリテ、古クハコレモ男莖ヲ画ケルナレド、何レノ頃ヨリカ、古風モ変リ、馬ノ画ヲ以テ男莖ニ変ヘツトゾ。本宮ヨリ別宮ノ方ヘ一ノ使、二ノ使参リ、彼方ニテハ使請ノ役アリ。使ハ六人、皆使ノ松ト唱フル松ニ火ヲツケ、持チテ神輿ヲ迎ヘ奉ル。供奉ノ人々一同大声ニハアリヤ〳〵ト唱ヘ、奉迎ノ人々ハ大伊良天ヲ以テ神輿ニ火ヲ合スコト数十回、終ニ本宮ノ御前ニ至ル。此時扇ボメノ式アリ。檜ニテ削リ作レル所ノ扇打松ト唱フル神符ヲ以テ、十二前神輿ノ第八ノ御鏡ヲウチ奉ル。古伝アリ、此間、奉楽、神輿御着後直ニ御田植ノ式、何レモ茅ノ笠ヲ被リ、木製ノ諸農具ヲ持チ、一人古作ノ牛頭ヲ被リ、貝及笛歌人大皷等ニテ神歌ヲ謠ヒ、祭場ヲ相俱ニ左廻スルコト三度後、見分ノ式（千年万年アッパレ〳〵）飯持ノ式、大和舞等アリ。以下略之。

六月十八日、大祭、渡御ノ神事、未ノ刻、本宮大拝殿ニテ宮廻リノ祭典、本宮ヲ始メ奉リ並ノ宮十三殿、御戸開、祝詞、奉幣、奉楽、祭主巫女沙庭舞等アリ。申ノ刻、神輿渡御、御大祭十四日ニ同ジ。別宮ヘ着御ノ上、御田苅ノ神事、何レモ茅ノ笠ヲ被リ、木製ノ草苅鎌ヲ持、笛歌大皷等ニテ神歌ヲ謠ヒ、祭場相俱ニ左回スルコト三度（秋ノ田ヲ苅リワケユケバ草葉ノ露ニスソヌレヌレヌヤヨカ　アリヤン）次ニ見分ノ式、飯持ノ式、大和舞等アリ。畢ニ還御、当日別宮ニ於テ、祭神中八咫ノ烏形ノ帽ヲ被リ、松火ヲ持チテ、光ノ峰ノ遙拝ノ祭所ニ至リ（神木ノ祭所、榊八本、長八尺ノ杉ヘキ板八枚ヲ以テ神供棚ヲ造リ、注連ヲハリ之ニ神饌ヲ奉ル）神木結ノ神事アリ。以下略之。

年中祭日

大祭五度、中祭九度、小祭六十五度、式十六度

祭典の古儀存するときは、その神社の古を思ふこと深し。その古を思ふ念深き時は、常に神社の古の如く盛ならむことを希ふは人情なり。古儀を存し祭典を盛にするは、大に悦ふべきことなり。この神社の祭典いと盛にして、また古きが如し。神社の為はた国家の為、ます〳〵盛ならむことを祈る。

又歴朝の華謁を数ふれば、

仁徳天皇　一度　天武天皇　一度　平城天皇　五度
清和天皇　一度　宇多天皇　二度　花山天皇　一度
白河天皇　一度　堀河　院　一度　鳥羽　院　八度
崇徳　院　一度　後白河院　十五度　後鳥羽院　三度
土御門院　二度　後嵯峨院　二度　亀山　院　一度

の多きに渡れり。而して花山院の如きは、正暦三年より五年まで、二の瀑の傍なる丘上に庵を搆へてましましきといふ。今の社殿は先帝孝明天皇の嘉永五壬子年より御造営を初め、明治元年に至りてやうやく落成せしものなりとか。猶社頭造営修繕の事を記して曰はく、

古代、熊野三山社頭造営修繕、朝庭之ヲ直裁シ、諸国郡ノ正税ヲ以テ費用ニ供ス。造営年記ニ造国某国ト云フ是ナリ。爾后、時運沿革鎌倉覇府創業以還、室町・豊臣・徳川氏ノ季年ニ及ブマテ、世々覇府ノ処分スル所ニ係レリ。嘗テ徳川覇府八代吉宗公、享保中三山修営竣切ヲ告ゲ、〔一万六千四十両〕将来小破ノ時修補シ大破ニ及バシムル勿レト金三千両ヲ奉進セラレ、修繕ノ資本トナス。和歌山藩主徳川治宝、専ラ意ヲ尽シ、之ヲ管下ノ士庶人ニ貸与シ、尋デ三山神官等協心戮力シテ元江戸上方筋ヘモ差分、人民ノ私有金ヲモ募リ貸附、一途事務局ヲ設立シ、列藩ヲ始汎ク士庶人ニ貸与シ、累年勉励シテ漸次隆盛、巨額ノ蓄積ニ至ル。〔元利金六十万五百七十二両二歩二朱ト四貫九十文七分、但明治四年辛未年迄〕其息ヲ収テ以テ爾来造営及ビ四時祀典ノ費用ニ供ス。元和中藩主ヨリ奉進セラレシ神田アリト雖モ、遂年荒蕪糧用ニ充ザルガ故ニ、貸附金ヘ金□（ママ）ヲ以テ三山神官等家族凡一千余有口生理ノ補助トス。而

シテ慶応丁卯年十二月、神官等輩下ニ詣リ右事務所濫觴ヲ具状シ、聖護親王宮ニ就キテ執奏ヲ請フ。御世話卿亜相烏丸某卿ヨリ総裁岩倉某公ヘ伺ヲ経、西四辻某殿ヲ以テ奏聞セラル。廷議貸附方取立勝手タルベシト勅充ヲ辱ウス。且明治戊辰年、皇族公卿其他諸名称貸附総テ廃棄ノ旨アリ。神官等驚キテ神祇官ニ詣リテ伺書ヲ奉ズ。宦令シテ曰、三山貸方ノ儀ハ宮社御修復年中神祭ノ儀ニ付御免ノ事ニ候間、当局ヘ届済ノ趣大坂裁判所ヘ申出、勝手ニ取申スベシト。豈計ランヤ、先回棄損ノ命アリ。

往昔盛大の様思ひやるべし。終りに至りて曰く、

嘗テ戊辰年、大政復古ノ盛世ニ遭遇スルヤ、三山亦習慣ニ拠リテ一社ノ庶務渾テ朝廷ノ直轄スル所ト為ル。而シテ後、一般社格撰定ノ挙アルヤ、三山ノ内熊野座神社（本宮なり）而已国幣社タルヲ得、熊野夫須美神社（那智なり）御子速玉神社（新宮なり）ハ県社ニ列セラル。

その他寄附祈願の状いと多し。今その内より重なる物の人名と年月とをあげ、終に最近代にかゝれるものゝ二、三を示さむ。

一源義国願書　仁平元年二月十五日
一同人寄附状　同　年
御幣帛御花米御灯三万三千灯
一太上天皇御寄附状　建暦二年二月
一鎌倉久明親王御教書　正和二年三月廿八日
一源尊氏教書　暦応元年二月五日
一検校准后令旨　貞和二年八月十一日
兵部卿律師御房
一源義教教書　嘉吉元年四月廿二日
一井伊千代寿寄附状　永正十四年拾月廿七日
一今川義元寄附状　弘治二年
駿河国熊野那智山領案
一氏真寄附状　永禄十年
遠江国入野郷内駿州北安東ニ改替
一源家康寄附状　永禄十二巳極月
遠州山野庄土橋郷八貫文
一晴久書状
一津軽越中守信牧祈願書　慶長十八年

近代に関せる文書の内、最かしこきものは孝明天皇の御綸旨なり。「ペルリ」が突然浦賀に入り来れる当時、先帝がいかに御心を痛めしめ給ひしかはこの一の綸旨によりても伺ひ奉ることを得む。吾人臣民たるもの之を思はゞ、いかでか外人をして神州の清潔を穢れしむることを得む。いかでか外人をして国体の尊厳を傷けしむることを得む。拝読してうたゝ感涙に堪へざるなり。

夷類頻来乞求通商其情狡黠固不可量因茲辺海防禦雖尽警戒　宸襟所不綏庶幾以神明冥助不汚神州不損人民国体安穏天下泰平宝祚悠久武運延長之事御祈一社一同可抽丹誠可令下知于紀伊国熊野社給之由　天気所候也以此旨可令洩申

三山検校宮給仍執啓如件
十一月廿三日　権右中弁長順
謹上住心院大僧都御房

（此は嘉永六年の事なり、猶数通あれども今略す）

祭神がいかなる神なるか、朝庭との関係はいかなりしかは、右記す所によりて知られなむ。かばかりたふとく、かばかり朝庭関係深かりしこの神社、今県社にとゞまれるは、そも〳〵いかなる事ならむ。

時時辰（マヽ）十一時を報ず。人は眠りて夜はいと静なり。倉皇として寝に就けばあなうたてや。雨ふりいでて窓をうつ。木野戸教授、衾の中より頭もたげて、

あす越えむ山路いかにと思ひねの　夢驚かすさよ時雨かな

友は皆さりとも知らねなるべし。あめはいよ〳〵強く夜はます〳〵深し。今宵の夢はいづこ。大瀑か。はた雲取か。

五日　那知村より雲取をこえて湯峯まで

昨日夕つかたより雲の行静ならず。何の山よりとも定なく吹き下す風物さわがしき空なりしに、夜に入りて雨足甚しくなりぬ。さらぬだに明日は山坂けわしときく。こゝろもとなのこと(ママ)哉とて枕につきたることなれば、如何でか安くねらるべき。けさ早くおき出でゝ仰ぎみるに、愈降りまさりぬべき空模様なり。うちむかへば近くは鬱蒼たる山岳、玉散る谷川、遠くは渺茫たる蒼海、波寄する雨にかすみて濃くうすく見ゆるけしき、さすがに面白し。時は七時を過ごせり。いざと宿の男にみちびかれて湯峯さして出立つとて、木野戸教授、

雨雲を取りはらいつゝみくまのゝ山わけ行かむ益荒男の伴

草鞋踏みかためて隈川子、

面白しいざや我が友雲取を雨にうちこえ足くらべせむ

那智のたきの音の谷間にひゞくを後にきゝながして、幾十の石段登り降りつゝゆく。路の両側にかけられたる筧の水あふれて路の窩みたる所にながれ入り、恰も谷川を行くが如し。一、二町行きたる寺間の小側よりやがて大雲取にはさしかゝれり。

いく千年をへたりけむ。松柏の大木蓊鬱として杖をまじへ石もて畳みあけたる路けわしく、おつる雫のためになめらかに苔生して、踏む足もとの危さ。若し一人二人の旅ならましかは如何でかゝるる山坂をかゝる雨風にえこえむ。折りしも坂の上のかたより一束の薪かつげる男降り来たり。細き路をかたさりて我を通し振りかへり見て、こんな日に危ないノイシ、と云ひすてゝすぎぬ。見返れば杉の大木に身はかくれて荷へるたきゞのみ。やがて山かげに見えずなりぬ。うねれる坂をあへぎ〳〵のぼるに従ひて、汗あえいき急しくなりぬ。しばしたゝずむ傍五、六尺をへだてゝ升大の動物ぢッと眼をすえて鷹揚に此方をにらまへをり。いと憎さげなりければ、をどりかゝりて礑と打ちたる枯枝は空しく中央よりをれて徒に土をうちぬ。渠はやがて一間許り先に悠々とひき退きて冷笑顔なり。つく〴〵と顧れば是ぞ深山幽谷に多く住むなる谷具久なりける。身には灰色をおび斑紋ありて下腹白し。さすが人声におそれたりけむ。草深く姿をかくしつ。外套のちり打はらいて空を仰げば雨益つよくカフロットをかして顔に打つけ、目のまはり頬のあたりまでひたぬれにぬれて冷たくむつかしきことかぎりなし。

行き〳〵てふと心着けば、我が後に有るは遠山・檜垣の二君のみ。余の一行影も見えず。我はいつしか異路に踏み迷ひけむと心もとなくて、しばし杉の大木を小楯に雨をさけて、声をしぼりて師の君たちをよび求めぬ。三度四度して答やすると耳を澄せば、松杉の枝をかすむる雨後の響の中に況(ママ)えたる声かすかに叫ぶは隈川子とや思らむ。一声くりかへせばやう〳〵呼者のすがたも顕はれぬ。只之れは果して隈川子なり。猶坂一つをへだてゝ、三亥子か、と云ひつゝ一文字にかけ上り、しばし苦痛の息吹きながら、病気て歩みかぬ、と知らせたり。其はこゝろもとなしと小高き所に立ちて見下せば、今しもはるかをくれて寂しき顔をたれて踉蹌と覚束なき足曳きながら一歩〳〵上り来るは三亥子なり。はては立ちも恰へかぬたる風勢にて側の岩に取りすがり雨にぬるゝを厭はず。辛くも腰を据へたりけり。

偖青醒めたる顔もたげて四方きよろ〳〵見廻し涸れたるため息つゞけざまに吹き出しつゝ細き声震はして、足の筋が引しめてドウモ、と云ふもたえ〴〵なり。されど、雨はさかりに病める病まざる者の用捨もなく横様に降りかかれり。また踏みも見ぬ嶮しき山路の雨風にあてられたるなれば、さらぬだに病後日あさく沈みがちなりし三亥子、何出立心にはなりけむと、去る日、心地よげに立ちいでたる故郷の空のみ見かへらむも、理なりけり。されど、こゝに仆れてはとて、気をはげまし、杖によらせ、先に立たせてたゞ後よりかゝぐるやうにして行く。三亥

子を思ひやりて、

たけ杖にすがりてたどる山路にうき節そうる雨にもあるかな

誰やらむ、

とぼ〳〵と足曳きながら登るなりよなかき竹の杖を命に

とて笑ふも罪深きことなりかし。

見わたすかぎり見るきはみ、雲か、山か、雲か、雲霧一面におほひかゝりてあたりをかしく、風一度わたれば響を包みて殷々と鳴りひゞく。物凄しと云ふも愚なりけり。幾年ちり積りけむ、重なれる栃葉に雨雫ホタリ〳〵とおちて、人通ふ路とも思はれず。おほかた野路はたつき乏しき所ときける、況して那智山奥深く、名にし負ふ大雲取なれば、輿も馬もあらばこそ。稀にも人の通はぬ山路にて、素より足を休めむ家だにもなし。あはれ大塔宮は、不臣の暴虐に苦められ玉ひ、南都に足を止めがたく、熊野をさして般若寺をおちさせ玉ひけむ昔の思ひおこされて、柿の衣に笈はかけねど、洋服外套の同じ扮装カフロット頭巾を眉半に責め、三亥子を保護しつつ山坂をたどる状、熊野参詣の田舎山伏の其ならねど、げに当時の御いでたちにさも似たりとて、三亥子に外套の宮といふ称号をおほせたりけり。蓋し長き外套をめされたる故なるべし。

坂は急なれど長からず。一つ尽れば亦あなたに顕はれ、起伏せること恰も大浪の如く打ちつづきて、何時坦ならむとも見えざりき。嵐はいよ〳〵凄しく、雨は益々降りしきれり。背中腰のあたり点滴外套を犯してシホ〳〵としみまさるわびしさ、云はむかたなし。

雲取や雲に嵐の声そへて　をやむ隙なくふる時雨かな

谷深く崖をさかさにおつる滝の音、ダウ〳〵と谺にひゞき、大なる木のすく〳〵と並べるが、朦朧として、前なる山よりも、後なる峯よりも、左右の峯巒白き物、濃かなる物、煙の如きもの、種々なる雲霧、簇々として立ち上り、二、三町遠き山々の頂は望むべからず。其の奇観ほと〳〵形容すべき筆もなし、須臾にして前山没し、後山没し、大幕かなり我頭上におふひ、山亦全く没して、はては雲その左右の峯巒にかゝり、暫はさながら雲中の人となりぬ。有耶無耶の間、そゞろと詩興を引けり。おのが後なる隈川子、

雲取にくもを取らむと上りくれひ　うたてやくもにつゝまれにけり

又、先なる年川子も、

名に負へる大くも取の峯なれど　くものはれ間はたえてなきかな

嗚呼、雨のつよきを怨むこと勿れ。風のあらきをいとふこと勿れ。一望千里の観なきを悔むこと勿れ。この雨よ、この雲霧よ、かくは深山の景象を幻ならしめ、妙ならしめ、しかも亦美ならしむと云ふは、千畝子なり。げにさなり。山霊つねに惜みてこの壮絶を人に示さず。しかるに我が行、会々この風雨を犯して辛苦を嘗む。故に聊その好奇心に報ひむとてこそ、この奇観特色を呈するなめれと呼ばる者は、年川子なりき。一里行きても人家はあらず。二里行きても人には逢はず。三里歩めども猶峠には程遠し。しば〳〵路なき路に踏み迷ひ、樵夫が径の枝折をたよりにわけ登る。くるしき中にも外套宮、

みそら飛ぶ鳥もたつきやなかるらむ　雲ゐる峯にあらし吹く日は

と小声に宣べば、声に応じて我も、

あらし吹きそふ雨の日に　峯の細路踏みわけて　たどり行くこそくるしけれ

雨はいよ〳〵降りしきり　あらしはいとゞ吹きまさり　行手のかたはそれぞとも　知らぬ山路の岨つたび　ゴーととゞろく山彦は　如何なるけもの、声ならむ　山路ははやも埋れぬ　せむすべなけれど踏む足の　行くにまかせてこえてみむ　今宵の雨の宿りまで

と息せきこらへてうたふ。かゝる間にも、あらしは甚しく谷底に吹き倒されむとするやうにて、幾度も身の毛のよだつに、しぶき冷かに面をはらひ、目に見ぬものの手もてひた〳〵とかい撫るやうにて、こゝろもきえゆくばかり物凄し。いとたへがたくやありけむ。遙先の方にて豊汀子、

大雲取今日こえくればまきの枝を　ひきさくばかり吹く嵐かな

如何なればかゝる物凄き所をこゆらむ。如何なればかゝる径をばえらびけむとまで思はれて、倦むとはなしに倦みはて、ひそかに雨ならぬ涙を袖にぬぐへば、滑る足踏みしめて我が耳元ちかく、

くも取の峯の嵐は強くとも　ふみこへ行かむ大丈夫の伴

と驚かすは、例の年川子なり。

偖もよう〳〵峠と思ぼしき所に出でたり。雲影深く鎖せる間より、面白き形したる山、或はその尖頭を漏し、或は又半腹の一面を顕はす奇絶すてがたけれど、雨急に風甚しく、只無言の中にこの景色を読みながら行く。路は山腹を走りて、だら〳〵下りなり。最早かくこそあらめと思ふにたがひて、坂又坂をおりつ登りて、松杉の大木幾本ともなく吹き倒され、細石小砂集りて自堤をなし、或はさながら草生ひ苔生して底を流るゝ水の上に自橋をなしたる所いくつも通りて、おぼつかなき樵夫が家あり。つゞれまとへる老夫にむかひつ、村ある所まで何里ぞと問へば、怪しき顔してやや打ち守り、小口村まで三里と答ふ。如何に住めば都とは云へ、何を楽に一人二人にてかかる奥深き所に住むらむと見返りながら、

松風もましらの声もなか〳〵に　耳なくさめむかゝるすまひは

と云ひて行きすぎぬ。こゝの岩かげかしこの木の間に紅葉のみえければ、木野戸教授、

くまの山時雨の雨にぬれつゝも　紅葉見がてら行く旅路かな

我も、

松杉の青葉ばかりと思ひしに　紅葉してけりみくま野のやま

幾度水をわたり、石を踏み、踏みはづしぬべき足元の危さに杖を命と頼むらむ三亥子が困苦、思ひやるだに気の毒なり。二里ばかりひた下りに下れば、小口川の流れ崖下に見え、こゝの山かげかしこの腹に家あり。全村合せて僅に二十戸にみたず。これを小口村と云ふ。雨漸くやみて、風も稍をさまれり。されどなほ、そよめくまゝに松をからめる蔦蔓のハラ〳〵散りかふなど、時にとりての一興にて、幾株の山桜は今は枯木のやうにて、辺僻の埋木花にうたはるべき春なきを恨むに似たり。

路のへには枝もたわわに色づける柿五、六本あり。取りて嚙めば腹立たしや、直に石に投げつけぬ。

渋柿の色に迷ひて二つ三つ

かくて、下りつくせる所に茶屋あり。きよき流れの岸ちかき所なり。こゝにて昼餉をしたゝむ。南紀名勝略志に、

那智山八村組小口村に続きて山道三里半許を大雲鳥と云。極めて難所也。此雲鳥越の内に志古山・小口村とて何れも里あり。小口は川の辺なる故に小口川原と歌にもよめるか。小口村より西北四村組受川村に続きて三里半許を小雲取と云。

山家集西行

雲取や志古の山路はさておきつ　小口河原のさびしからぬは

志古村は三村組揚枝村の西南、熊野川の南の辺に在。右に云小雲取と云山は、志古の山とも云ふ。小口村は大雲鳥の北、小雲鳥の南に在。長さ一町許あり。扨、膝のあたり痒ければ、脚絆ひきめくりて見るに、血ながる。あなやと手もておさへたれど止らず、赤くズボンをそむ。こは山蛭にすはれたる也けり。我のみかと思ひたるに、千畝子も遠山子もすはれたりとぞ。

偖、行く先五里に余れる山坂をはきたへたる五寸の草鞋に踏みにじらんとす。僅ばかりの舟渡をわたり、さしかゝれるは小雲取の峯なり。一里登りて四里降れば、出湯のありと云ふ。即今夜の宿、湯峯村なり。例の隈川子、

行けや行け足は引くともつとめ行け　至ればそこに出湯ありとふいでくれぬ間にとて、又もや山の奥深く踏みわけ登る。

白雲つねに路をうづめ、立つ霧の谷間にたゆる時なく、後は大雲取山高く聳え、

前は小雲の連山峙ち、右も左も峯巒奇嶽、居重りて屏風の如く、彼方此方とわけ行くに、岩根こゞしき禿山前に顕はるかと思へば、既に後の方にあり。行けども行けども連峯、眼を遮らざる所とてはなし。けはしき砂礫の坂は、かけ声のみ勇ましく、足はなか〳〵思ふやうにはかばかしからず。若過ちて跌きなば五尺の身は毬の如くまろび行き、大石にくだかれぬべし。誠に石をおこして崖下に押せば、凄しく走りて大蛇の行くが如き遠き山下の雲に入る。気力殆つきむとして、辛くも絶頂に登りぬ。

なほ行きゆけば、断崖左右に聳えて点滴声する所も有り。雑草高き径も有。松柏の中を行く処も有り。きき知らぬ鳥の声せり。足を止めて局山子、

雲取の大峡小峡あらし吹き　かかなく鷲の声きこゆなり

と云を聞て、にはかに物恐ろしくなれり。踏みわくる径にもあらざれど、人多く通ふ路としも見えず。日のかたぶき心細きことかぎりなし。

路いくほどか歩みけむ。稍垣なる所に出でたり、うちひらけて茶屋二軒ほどあり。うれしやと先腰うち据うるは例の宮なめり。

こゝより湯峰までは二里と云ふ。くれなば一きは難儀まさらむとて、何と云ひけむ、其所の名もきかず。疲れたる足をはげましていそぎにいそぐ。おぼつかなげにさぎりのみ立ち迷ふ夕山かげに、夜ははや遠近の山の木の間よりおふひきにけり。雲深ければ月の光ももれこず。踏む足元の覚束なさ。二里とはきけど、知らぬ山路。これより幾重の山をこゆべき。幾せの谷をかわたるならむと思ひつゝゆけば、心細し。かぎりも知らぬ遠近の虫の音の中に、虫ならぬ響あり。松吹く風かと耳欹つれば、あらず。岩うつ水の音なり。猶行くほどに、水音ちかくなるまで歩をとめてすかし見れば、谷がはのそれならで、岸より岸の巾ひろし。これや音にきゝつる熊野川ならむ。彼方の薮陰に灯の光露にうつりてみゆ。やがて至りつけば、こゝは受川村なり、何くに橋あるかと見わたすをりから、行きすぐる里人の姿に良き案内と思へば追ひつきて湯峰まではと問ふなり。程近けれど、路けはしければ、案内なくてはといと気の毒げなるけしきにてしばし考へゐたりしが、松明求めて参らせむとて、岸にみちびき、つなげる小舟の纜ときて、忽かなたに渡しぬ。

一行後れ来て、渡守はや船よこせとよぶは千畝子なめり。声高らかに、

受川や流るゝ水のせを速み　せきとめがたき我が涙かな

とうたひつゝ、そら泣するは誰なるらむ。

やがて皆渡りはてぬ。舟人河辺の家をかけめぐり、辛くも松明を求めくれぬ。木野戸教授、

取る手火の光うれしも受川の　うけくつらけき夜の山路に

村のはづれにて炬火に火燃して振りかざしつゝ行くほどに、又もや奥かをわかぬ谷のむら山見るも、覚束なき崖の小径にさしかゝりたり。松吹くかぜ、岩せく水の音、物凄からぬかは。かざす炬火の光、木の間の露にきらめきぬ。

峠に上れば、路分れて二条に成れり。右せむか、左せむか。こゝの案内をきゝもらしたるが口惜しさよと思案にくれたれど、とてもかくてもとて左を取る。そぼ降る雨に松明あまた度かきけされむとす。心細きことかぎりなし。

松の火のかげによそりてみくまのの　おくの山路を辿る夜はかな

と歌はるる声は、木野戸教授なめり。

幾隈か山路ををれ行けば、はるかの山陰に灯二つ三つ見えて、一むらの人里あるやうなり。さては彼所なめりと、嬉しさに足の疲れもわすれていそぎ行きつきてきけば、あらず。独一山こえて先の村なりと云ふ。腹立たしさに我は茫然として、思はずしりゐに倒れぬ。

雨かせのはげしき夜の旅まくら　むすばむ里は遠しとぞきく

さてあるべきにあらねば又も路をいそぐに、終に山きはまりて、行くべき径だに見当らず。こはいよ〳〵あらぬ所に踏み迷ひたるならむとて、再同じ径を戻りてきけば、独そこなりと云ふ。たちかへりて左の方を見れば土橋有り、わたりて

少し行けばあやしき臭鼻をうち、湯気谷間をおほへり。いよゝこゝぞと立並ぶ旅宿の掛行灯にたより、伊勢屋と云ふを音なへば、つひに見なれぬ異様の人々といぶかるめり。

やがて、案内につれて打ち通れるは、母屋に対へるはなれやなり。床の間もつけられ襖も新しけれど、五分心のランプ一つ、八畳二間の只中につきつけおかれたるには暗しとかこつ人もありき。

室は水音清き谷川にのぞみ、出湯の小屋は窓ちかく見ゆるに、思ひの外なる心安きやどりと初めて心おちゐて覚ゆるぞうれしき。時に八時三十分比なりき。

応永の昔、小栗判官の湯治せし所とて、小栗ののと云ふにて浴び、夕食をへてこゝの主人を訪ふ。先風雨の難儀、途中の嶮岨等かたれば、主人も山家の不便、出湯の効能より、去し二十二年の水害の話にうつる。かかる山家にも水の憂はのがれぬかとあやしまれたり。

主人の云をきけば、全村僅に二十余戸。そが中に宿屋をする者十数戸。田有るにあらず、畠あるにあらず、皆木こりを業とす。而してすべての品物は本宮より肩によりてはこばるとぞ。その不便、大かた推しはからるゝなり。

出湯の由来は、昔成務天皇の御時、大阿刀足尼こゝの国造となり音無の里に住けるが、この地に来りて出湯を見、由りて名けて湯原郷と称せり。後湯棟と云ひ、慶長年中更に又湯峯と呼ぶに至れり。湯は無色透明にして、硫化水素の臭ありて、華氏百九十度の熱度なるあり。昼夜をわかたず漏出せりと云ふ。されど草根集なる徹書記が歌に、

熊野路や往来のなみもおきかへる　湯の峰かすむ冬の嵐に

とあれば、湯峰と云ふ名はふるき事なるべし。岩根こごしき山坂に足すべらして、身は崖下にまろひ行くと見ておどろけば、夜風いと冷かに簷の玉水づぶ〳〵と音して、潺湲たる谷川響の相和するのみ。

本宮　九里峡

本科四年生　近藤弘代

二竪の為に苦められし除波いまだ全くさらず。終日快々として書史を繙くも心憂ければ、しばし郷里に帰りて身をやすめむか。はた止りて神都の秋気に心を養はむかと、とかくに思ひ惑ひき、郷里に帰らば父母もあり、兄弟もあり、身の養に足らはぬ事は無かるべし。されど薪木こる片山里のことなれば、もとより語るべき友人も無く、逍徉徘徊して鬱を慰むべき山水の景もあらず。しかじ。玲瓏たる朝熊山の鹿の音を聞きて、賤猥卑俗なる樵夫の謠に易へ、神路の山に燦爛たる紅葉の錦を見て粛殺たる故山の秋景に代へ、潺湲たる五十鈴川の碧流に耳目を清め、渺々たる二見浦の清渚に心気を滌がむにはと、思ひ止りたり。されば課業にも大方は欠席して専心神の養につとめたりしに、やゝ日数経る程に修学旅行の命ありき。処はかねてより嶮岨の名たかき熊野の方なり。余はまた惑ひぬ。行かむか止らむかとしばしば躊躇したれども、もし此の機会をはづさむか、一人ふりはへて出でたつ事は難からむ。健康はいまだもとの如くならず、足もまた常の如くならざれども、よも道傍に倒れて同行諸氏の煩累となる事もあらじ。されば居残の仲間に入りて卑怯の嘲を受けむよりはと、負けじ魂引き起して熊野の路に出でたちたり。かゝる程に痩我慢は強けれども、足は心に任せざりけむ。昨日那智の石段をかけ登らむとするとたん、左右の足は一度につまづきて、遂に杖にすがる事止むを得ざるに至れり。哀や常には軽捷を以ちてほこれる三亥もここに至りては大に窮し、はじめの負けじ魂も失せはてゝ、遂に同行諸氏の煩累となることを免れざりき。されど吾が親愛なる諸氏は、この煩累をいとはずして懇に扶助せられたれば、余は之に頼りて雲取の峻峰をもふみこえて此の湯の峰に着くことを得たり。

温泉に疲を洗へる験にや、今朝は足の痛もいと緩みぬ。眼を開けば、隣の衾はぬけ殻なり。あら後れたりと直ちにすべりいでゝ浴室に走る。こゝには湯槽三ヶ所あり。余等の浴せるは、昔小栗判官の入りし所なりとか。小栗湯と名づけて常

には戸を鎖せるを、是夜、余等の為に啓きたるなり。いにし頃は里正之を開閉せりと聞けり。今はさるむづかしき事も無きにや。入りあらさねば底まで澄み渡りて塵のけがれも無く、いときよらかなり。しばし浴みて室に帰れば、はや六時三十分なり。是日、雨に濡されたるずぼんは猶乾かず、足袋も脚絆もぬれ縮みて鉄の懸け合ひ自由ならず。さりとて止むべきにあらねば、厭はしけれど其のまゝに行装を整へ、朝餉を終へて宿を出づ。時には七時三分（三十カ）なり。此処の家数はすべて十二、三戸あらむ。湯の峰の山奥深く溪間にたちつゝまで便あしき所なれど、温泉場のことなれば流石に洋酒舗まで備れり。数歩にして薬師堂あり。都の金看板とは違ひて荒削の杉札を掲げたり。近よりて見れば「天照出現湯花化石薬師如来後鳥羽天皇勅願所」としるせり。あはれこのみかどよ、王室式微の時に当り、宸襟を悩し給ひて所々の神仏に祈を籠め給ひぬを聞けば、かゝる所にすら御綸旨を給ひしこともありけむか。いとも畏きことにこそ。薬師如来は如何なるくすり師にをはすかといふことはしらず。湯花化石の御身とあれば、疵薬には御利益もしるからむ。されど我が健脚なる一行は、いまだ草鞋のすれ疵だに得たる人も無ければ、要なしとや思けむ。三文の手向ケして仏の冥護を祈る者もなかりけり。羊腸たる山路の隈々を廻り〳〵て一里ばかり歩めば本宮村に出づ。

本宮の御社は、村の南端なる山上にあり。整然として功石美はしく、畳みたる階を登れば氷木は高く聳えて厳めしきに、神の御稜威もあらはれていと畏き心地す。筋塀は高く塗り廻して、拝殿は左の方に、総門は右に並びてたつ。総門を入れば玉垣あり。此のうちは白き小石にていと清らに敷きかため、御社は二棟並びてたつ。正面にますは　素戔嗚尊にして、家都御子神と申し、右の方は　天照大神にまし、左の方なる広き社に相殿にてますは、　熊野夫須美神と　速玉男神とにいますとぞ。

相殿にますは伊弉諾、伊弉册二尊なりといふ説、諸書に散見す。されど那智山の祭神と新宮の祭神とを合せ祀れる事、縁由なきにあらず。かつ社務所員のいふところも一致したれば、しばらくかく記す。

御前毎につゝしみて拝みぬ。木野戸教授、

かしこくも宮居あらたになりぬれど　みいづかはらぬみくまのの神

安元閑鷗子、

みくま野にみやゐかためていにしへの　しづまりいます神ぞたふとき

余も、

雲井までそびゆる氷木にみくま野の　神のみいづの高きをぞしる

昔は万乗の陛下しば〳〵行幸なり、また御祈をこめられし事も度かさなれる御社なれば、史籍の参考とすべき文書宝物など定めて多からむ。されど時間を急げば拝観を請はざりき。社務所に至り縁起やうの印刷物はありやといふに、「無し」と答へければ、せむかたなうて境内の図をのみ購ふ。開き見るに、たゞ建築物の数を並べ、一〇、二〇などしるせるのみにて、他の文字は一言も無ければ、祭神の御名を問ふに、前にしるせる如く答へぬ。委しき事は知らぬ様なれど、此方よりもとはざりき。かゝる図面には祭神の御名だに記しをかまほしき事にこそ、この御社はもと熊野川と音無川との中島にありしを、去にし明治廿二年に大水溢れて、此のあたりの人家は勿論たやすく浸るべしとも思はれざりし御社さへ畏けれど激流に漂ひて熊野灘波上の芥と流れ去りぬ。人畜の死傷も少からざりきとか。いかに畏く惨しかりけむ。其の後廿四年に至り、御殿を営みて此処に鎮めまつれるなりとぞ。今はさる憂もなかるべし。されば神さびたる松杉は無けれど、あたりを見渡せば熊野山は混々として前を走り、千峰は峨々として中天に屹立し、万岩は幽邃にして雲深く遠く、塵界の外に脱して実に神境の感あり。

いづくまでたちつゞくらむみくまのの　雲にそびゆる山のみね〳〵

高き石段をふたゝび数へ下りて、来りし道を引きかえせば、音無川に至る。石を通ひて静隠なる流なり。閑鷗子、

名も高く音にもきけど音なしの　川の流はいとどしづけし

余も、

熊野なる音なし川の音もせで　など世の中にひゞきそめけむ

橋あり。さゝやき橋といふ。夫木抄に読人しらず「熊野なる音なし川に渡さはや　さゝやきの橋忍び〳〵に」と見えたれば、新ら敷ものにはあらず。如何なるみやびをの何時名づけたりけむ。ゆゑありげにてをかし。閑鷗子、

流れゆく名をしのびつゝいつの世に　誰がさゝやきしみはしなるらむ

昔の人の為とにはあらねど、しぬび〳〵にうち渡りてもとの宮居をとむらへば、鬱蒼たりし神奈備の森は跡なく失せて枯杉寂々と立ち、氷木高しりて鎮りましけむみあらかは、誰わづかの石礎ばかりを残して蓬草は時をえがほにはびこりぬ。あはれ崇神天皇の朝以来茲に千有余載の霊地は、一朝の洪水に遇ひて空しく荒蕪の地と変しぬ。降りての世とはいへ、何とてかくあさましき。天災地変は神もまゝならぬにや。

ちはやふる神も心のまゝならぬ　時やありけむあはれ世の中

これより予定の如く舟に乗りて熊野川を下らむとす。こゝにをかしかりしは其の談判なりき。余等ははじめ、此処の宿にたちよりてあらましの値段をも問ひし後、本宮の社に詣でたりしに、今かへりきて乗るべきよしを云ひたれば、主人避けぬものとや思いけむ、「昨日今日の雨に水がさ増して船頭困れば」とて、思の外なる値をこそ請ひたりけれ。おろかや、水かさ増りたりとて、銭がさまで増すべき筈やはある。如何に此のあたりの案内に暗き余等とはいへ、妄に欺かるゝ者にもあらねば、「初の話と違ひて高値を貪るものかな。普通の価ならずば乗らじ」と掛引ぬけめなく言ひたるに、主人なほも真面目に不満の躰を見せて、「われは決して不当の金を貪るものにあらず。御気にめさずばいかゞなりともしたまへ」と言いすてたらむやうの気色、甚無礼がましければ、心の中にはをかしけれど、「しからば行かむ、このしもの請川といふ所にて乗べし」と言ひおどして出でむとすれば、多人数の余等をとりにがして何とせむ、「さらば三十銭づゝにて」と折れたる主人のつらよ。彼は剛情云ひはりて余等を折らむとせしに、かへりて此方に折られつるこそをかしけれ。こゝに談判なりぬ。舟の出づるを待つ程に雨は降り来れり。今日は九里峡を過ぐる日なるに、さてもあやふくなる天気や。竜の神もすこしは心し給へかしと祈るも詮なし。これより十余里の間舟中のみなれば、思届入を持参する必要もあらむとて皆かふろッとを冠り店をさぐり行きぬ。二、三人のむれ、柿の色に眼やとまりけむ。ある舗の軒にたち止れる姿のをかしければ、そを指して、

渋柿に小首かたげし鴉かな

と妙評を下せるは局山子なり。子が姿も彼方より見ばまたかくの如く評するならむ。

とかくする程に舟の支度とゝのひたりと呼べば、皆岸に下りて乗る。苫も葺かねば外套は黙滴を落していぶせけれど、昨日に比ぶれば猶安楽郷の思あり。河流はいたく濁れり。いかにしてかととへば、「此の頃の雨の為にはあらで、いにし大洪水の後いまだ澄まざるなり」といふ。水源のいかばかり崩れけむといふことも思ひしらる。

人ゝのうらみはたえじ熊野川　濁れる瀬ゝのすみかへるまで

名高き熊野の材木は大方こゝを流すにや、数多の筏うちつゞきて水のまに〳〵下り来れば、木野戸教授、長き鬚をかきなで給ひつゝ、

熊野川おろすいかだ師こゝろして　わが乗る舟の水脉さまたぐな

岸には岩石多く突きいでゝいと危きに流の早ければ、三浦仰山子、かなたの心を思ひやりて、

ともすれは下す筏の岩にふれ　流あやふきみくま野の川

舟子纜を解き櫂を操つれば、舟はたちまち瀬を走りて壮快いふばかりなし。岸の樹木はあたかも汽車の中にて見る如く転々として遷り行き、一瞬の間、遙に本宮を去りて峡間に入りぬ。

くまの川流るゝ水の瀬をはやみ　こゝちよげにも下る舟かな

隈川子、

熊野川ながれをはやみ行く舟は　いるが如くも思ほゆるかな

あらかじめの嘆にや。閑鷗子は、

久方の川下す小舟のはやければ　あかでやすぎむきしのながめに

屈曲せる所は水勢ます〳〵急にして、其の鋭きことさながら滝のをつるが如し。かゝる所にてもし過りて岩に触れしめむか、舟はたちまち微塵に砕けん、はたたゞちに激流に巻きこまれむ。舟子の心づかひもまた思ひやるべし。雨の脚は糸の如く細けれども猶跡を絶えず、止むかとすれば又降り、ふるかと思へばまた止みて、おぼつかなき程におかしき景色に入りぬ。右の方を見れば、大巌兀としてあたかも地蔵の如く此方に向へり。舟子にとへば、「ほとけ岩」といふ。よくあたれり。やゝ行けば滝あり。左の方にて絶壁よりたゞちに落つ。またあり、斜に巌の凹所を走りて河に入る。あたかも竜の下るが如し。またあり、三段に折れて落つ。また去りまた連りて五線六線の滝みな趣ありておかし。隈川子、

わびしさに雨をかこてど雨なくば　かくさま〴〵の瀑を見ましや

顧れば右の山よりも二ツ三ツおちぬ。那智の裏滝といふあり。峭壁あたかも削りたる如く直立して、高さは五十尺もやあらむ。中は二十尺にすぎざるべし。上には緑樹蒼々としげり、下にもまた二、三の松杉青々としておかしきに、飛泉頂より落ちて岸なる岩にあたれば、水は砕けてあたかも白玉を散らすが如し。こは那智のうらにあたるにや。隈川子、

いかめしき岩の上より面白く　落ちくる水も那智の裏滝

余も、

いさぎよく落ちくる水の岩にふれ　飛びては消ゆる滝のしらたま

うつし得たりとも思ほへず。しばしゆけば、紅葉麗々として秋雨に輝き、今をさかりに染め尽せり。

そめつくす千しおの紅葉うつさまじ　熊野の川のにごらざりせば

左を望めば峻しき巌並び峙ちて、嶺と峡とは木立生ひかくし、岩づらのみあらはれたるもおかしき景色也。問へば、「四目山」といふ。如何なるこゝろにか。水は早くして舟はしばしも休まねば、一瞬一瞬にかはる景色すこしも厭くひまなけれど、山水のみにては物足りぬにや。皆鞄の口を開きて例の薬出しぬ。湯也ともあらばと思ふに、ゆくりなく徳利と杯とは廻り来れり。あたかもよしと一杯かたむけて次々に送る。かくて眺めつゝ飲みつゝすぐる程に、雨の止みぬればにや、杯は乾きぬ。菓子も尽きぬれば、序なりとて、午時も至らぬに弁当を開く。瀬荒くして舟はゆれども、酒石酸を求るものも無し。熊野の灘にては一昼夜の間かたく口に鍵して菓子すら入れざりし人々の口も、こゝにては三ツの握飯に飽き足らぬさまなり。河合村に至る。一筋の清き流は北より走りて此の河に入れり。これより清流と濁流と二筋の縞となりていとおかしけれど、伝に二、三町が程にやうやく狭められて清流は遂に跡を失ひぬ。あはれ濁水の勝を占むる世の中こそなげかはしけれ。瀞八丁は此の清流の河上なりとぞ。そこをも見るべかりしを、熊野嵐に予定を乱されしかば、残り惜しけれどうち棄て、今日は引本まで至らむとす。炭鉱あり。山の中腹にて穴の口より麓まで二筋の針金を張り渡し、万力じかけにやあらむ。掘り出せる石炭をば器に盛りてこれに懸くれば、器はただちに針金を伝ひて落くると共に、今一筋の方より空器のつゝと登り行くも目なれぬ余等にはいとをかしと見ゆ。流はいよ〳〵速にして舟はます〳〵早ければ、仰山子、

ふる雨にみかさまさりて熊野川　下る小舟の早くもあるかな

千色万景は走るが如く又去り又来りて、細に之を認むること能はず。目に止りしは十が一にも過ぎざらむ。加ふるに詞拙ければ、余は到底これをうつすこと能はざるなり。九里峡もはてにやなりぬらむ。雨はやうやくなだらかになり、流は広く緩みぬ。すべて九里十八町（旧里程、今名を害せむことを恐れて改めず）此の間嵯嶺は屹として雲中に聳え、絶えず両岸を走りて自然の堤防をなし、或は鬱蒼と

して杉檜の茂れるあり、或は赫々として紅葉の輝けるあり、怪巌珍石は趣をなして涯に突出し、奔流は之に躍りて蚊竜玉を吐き、巉巌絶壁は所々に峙ちて胆を寒からしめ、飛泉は上よりほとばしりて万景を清からしむ。あはれ此の絶勝絶佳の地、辺鄙に僻在せるを以ちていまだ名を知らざれど、実に世に稀なる処也。しかして余は終に佳作なかりき。思へば今回の行程は鳥羽の港に船開せしより茲に三大変化をなせり。初は漫々たる紀洋の怒濤を蹴りて万里の蒼海にうそぶき、上りては大雲小雲の両嶮峯に雲を踏みて天外の仙境を窺ひ、下りては九里峡に千変万化の絶景を見て造化の美を謳ふ。其の変幻実に驚くべし。しかして皆壮快の極に達せり。知らず、此後幾変化せむ。時計を見れば二時四十分なり。折しもいづれの方より起り出でけむ、緊急動議は「今夜新宮に宿り、明日つとめて路を急がむ」と誰もしか思ひけるにか、異口同音に賛成を唱ふれば、監督教師との評議によりて動議は採用せられぬ。さて「港まで下りなば御社に詣で給ふに便あしければ」とて、舟子櫂をおき岸に着けたれば、皆河原に上る。時に午後三時。これより新宮に詣でむとす。

六日午后

本科一年生　遠山正雄

九里八町の流を下ること既に四時間半也。雨はます〳〵ふりてやまず。衣服はうるほひて河風身にしむ。山は雲霧に蔽はれて壮絶の景色を隠し、河は濁水を奔らして水底の奇観を見さず。船中いとしめやかなり。時辰の二時半を示しゝとき、舟は岸につきぬ。誰一人舟路の名残ををしむものなく、跡をも見ずして急ぎをりけり。おのも〳〵彼方此方に向ひて佇むに、流れ出づるはそも何ぞ。雨の雫か。あらず。たきつ音いと高し。江河は細流を択ばずとかや。かかる細流をもあはするため、水量著く増すなめり。げに人々の上陸を待ちかねたりしも理なりけり。共にをりたる内に、行商めきたる婦人二人あり。よりてこの処の地名及び熊野社までの道のりを問ふに、曰はく、こゝはおともといふところにして、御宮迄は五、六町なりと答ふ。あたりには人家もなく、田畠さへ見えず。たゞ断岸にそへる一大磧なり。

東の方に当り、河下に熊野社の森といふが見ゆ。道なき磧の小石をふみさくみつゝ行く。この河の中には木の本の浜のごとき奇しく美しき物なければ、心もひかれず。さりとてあたりのけしきも格別ならねば、仰ぎて見もやらず。ひたすらイキ急ぐ。貳町許り行きて川辺なる細道に出づ。あはれ、磧の小石になやみてつぶやきしわらじは、うれしやと思ふ間もなく道の両側の草葉の露にうるをはされ、川なす路の溜水にくるしめられつゝ、早く〳〵と責むる心に追ひたてられ、しばらくにして新宮町の町はずれに達せり。道の側なる店頭の様は、何となく繁昌の色あり。よりて此の町の賑ひは本宮町などの及ばざる処ならむと知られたり。森に接せる人家の間を右折左往して、やがて長き石垣に沿ひて行く、其の高さ五、六尺。苔甚だしくむしたり。杉檜等の下杖之にさはりて落葉をはらふ。垣つきて右に出で大なる木の鳥居の前に来れり。鳥居を入れば広き神園にして、松、杉、檜、樟等の巨木、社のめぐりに鬱蒼として茂り立てり。

夫木集に、「なぎの葉にみがける露の速玉を　結ぶの宮や光そふらむ」とあるその□（栁カ）の木は、参道の左側に斎垣ゆひ廻らしたる中に神さびたてり。宮門の前にいたれば、右の方に喇盥場あり。終日水分神の厚き霊かゝふれる手なれども、兎に角とてここにて洗ひて門を入る。数十歩にして三宇の宮殿並み立つ。こはかしこくも去にし廿二年火災にかかり給ひしによりて、二十六年に造営し奉りしものなりとぞ。木野戸教授、

とのつくりすが〳〵しくも見ゆるかな　うべ新宮と名づけ奉れり

安元君、

み熊野や山のあなたは大空の　色と波との一つなりける

おのれもまた、

広前にこいのみまつる万代に　国平らけく守りたまへと

みくまのの神のめぐみは紀の国の　ちひろのうみのそこひ知られず

謹みて宮殿の様を伺ひ奉るに、土台を二尺許り高く固め上げ、遶らすに板垣をもちてす。正面は十二間にして、中央に二間半の門ありて、其左右にも各々一間半のものあり。幅は九間なり。この内に三殿ましませり。その右の方にあたりて又一宮殿あり。そを第四、第五、第六の三殿に区分せり。各殿の祭神は、

第壹殿　熊野夫須美大神　伊邪那美命
第貳殿　熊野速玉大神　伊邪那岐命
第三殿　家都美御子大神　国之常立命
第四殿　若女一王子　天照大神
第五合殿　天忍穂耳命　瓊々杵命　彦火々出見命　建鵜草葺不合命
第六合殿　国狭槌命　豊斟渟命　宇比土煮命　大戸之道命
面足命

奥御前三神殿　天之御中主神　高皇産霊神　神皇産霊神

本社はその第貳殿を申し奉るなり。今の社格は県社なり。而して奥御前三神殿とは本社の裏に板垣の外にあるなり。この第何殿といふは、本社の北を第一殿とし、順次に南に数へ奉るなり。

神祇志料に、

熊野早玉神社、（按延喜式一本、新鈔格勅符、早玉を速玉に作る、並同）今新宮庄熊野村の海浜にあり。（南紀名勝誌、陽国名跡志、紀伊神社略記、神名帳打聞）蓋出雲の速玉神同神にして、伊弉諾尊の御子速玉之男神を祭る。（延喜式、釈日本紀、長寛勘文、日本紀纂疏）故仍て御子早玉大神といふ。（紀伊国神名帳）景行天皇御世、始めて神社をたつ、所謂新宮是なり。（帝王編年記、皇年代略記、熊野略記）

又、南紀名勝略志に、

新宮は、新宮庄新宮村に御鎮座なり。旧記にいふ、新宮は景行天皇五十八年丁卯歳、以勅勧請本宮三神及天神地祇十二神霊於御食山依為新地奉号新宮、云々。宮牆の内東西百四十歩、南北七十歩。那智山より東北四里半の行程なり。

天下る神やねがひを三津塩の　湊にちかきちぎのかたそぎ
玉葉神祇　中原師光朝臣

熊野の御供に参りて歌つかうまつりし中に　新宮海道残月

わだつみのひとつに見ゆる天の戸の　明くるもわかず澄める月哉
拾遺愚草　定　家

幾かへりつらしと人をみくまのの　うらめしながら恋しかるらむ
詞花集　恋下　和泉式部

和田の原波とひとつにみ熊野の　浜の南は山のはもなし
新勅撰　雑四　入道前太政大臣

あま小舟我をばよそにみくまの、　浦よりをちに遠ざかりつ、
新拾遺　恋四　藻壁門院但馬

おなじくもかたるうきめをみ熊野の　うらわの波に身をしづめける
風雅集　雑下　建礼門院右京大夫

み熊野のうらわの松の手向草　いく世かけきぬ浪のしらゆふ
新勅撰　雑四　七条院大納言

我からと思ふものからみ熊野の　うらみてのみぞ過しつる哉
堀川百首　河　内

かけまくも清き心をみ熊野の　浦のたまもの光をぞ待つ
玉　吟　家　隆

昔みし玉かとのみぞみくまの、　うらまでとふる袖の泪は
夫　木　行　意

みくまのの浦よりをちに立つ旁の　はれぬ思ひを猶や隔てむ
建　保　順徳院御製

初の第三殿の前面には小石を敷きたれども、其の他は青艸繁茂して、神の恵みの露いと深く、木立やゝ稀なり。老樹古松のみぞかむさびて見ゆなる。宮門の内

の右側なる堀のもとに新らしき小舟二艘あり。こは大祭日神輿を乗せ奉るなり。さてその祭日は古来陰暦九月十五日、十六日の両日にして、十五日には神馬にて御旅所新飯の山に渡御の式あり。十六日には神輿にて熊野川の汀に至り、それよりこの御船に奉ず。こゝに諸手船と唱ふる引船十艘、之を護衛して川上の御船島といふ島をめぐること七度にして、また神輿にて新飯の山に渡御あらせらるゝなりといふ。社務所の傍に、来む十月十一日大祭仕丁人名簿を掲げたり。雨しげゝればこゝにしばし時間を待てどもやまず。三浦君、

みくまのゝうらさびしくも旅衣　いつまでくたすしぐれなる覧

三時十分といふに広前をまかりて篠なす雨をつきて、かねて本町旅宿の匡擘ときゝし馬町なる油屋といふにたどり行。街衢広濶にして商家軒を並べ、警察署あり、電信局あり、裁判所などもみゆ。貨物商は日用の需用を充たして余りあるべく、多くの旅宿は艸枕の夢を結ぶに足べく。さて今日は十月六日なれば、このあたりの祭り日は近づきけるなり。されどかの青くち葉二あゐのものどもをおしまきつゝ入れたる細びつの蓋やうの物を持ちあるくも見えず、町わらんべの頭ばかり洗ひつくろひてなりの見にくきが艸履の緒すげさせうらせさせなどする騒ぎは見えねど、かゝる辺鄙の街の割合には行きかふ人多く、何となくときめきて見え、かつは家の内外を灑ぎ掃びなどするものもありき。これらみな祭りの用意なるべし。かゝる処の古式、旧典、習慣などいかならむ。

今しばし足をとゞめて速玉の　神のみまつりまのあたりみむ

と思へどせむなし。好奇心よなとがめたまひそ。かくて油屋に着きにたれば、例の如く高松君先入りぬ。やがてこの宿主、而も横柄なる女丈夫との談判もとゝなひたれば、彌十有余時間の雨凌ぎとは定りぬ。神倉山、徐福墓等に行きなんとて、又もいでたつ。

馬町南端より西に入り、田道をふみて神蔵山の麓に達す。南紀名勝略志に、権現の鳥居より内はたゞちに石階にして、仰ぎ見るばかり峻し。三、四階昇りては佇み、五、六階にしては休ふ。階段はみな自然石をたたみ上げたるものにて、苔むしていと滑かなり。雨水はその間を流れて、土瘠せ石出づ。草は蓬々として路傍に茂り、足を没す。漸くにして一の平地あり。かの高倉下命の倉庫はここにありきといひ伝ふとぞ。ここにて一息つぐ。ふく息は神ならぬ身の伊吹の真霧なれば、何も出現せず。たゞふと古歌をふき出したる。その続古今集神祇の部に入道前太政大臣、

み熊野の神蔵山の石だたみ　昇りはててもなほいのる哉

昇りはて又も昇る。ときに近藤君、追ひ来つ。安元君、

石たたみ登りつくして神蔵の　かみに祈りぞいよよかける

金剛君もまた、

あはれこの神蔵山の石たたみ　たどる心は神ぞしるらん

たびころもたづねてくれば身にぞしむ　神蔵山の秋風の声

行くこと一町余にして、一小祠あり、天照大神を斎き祀れるならむ。ここより左の方に当りて、傾きたる廿字形の門ありて、柵これに連なる。入りて見るに、右の方より斜に足を延べたる大岩、僅に一尺余の通路を残して伏せり。柵に限られ岩根に迫られたる道を歩む事二、三十歩にして道は果て、柵はこの岩をかこみてかしこに尽きたり。此処はしも山腹にして、麓はいと峻しく樹木繁茂せり。この岩の上に高さ五、六間余、廻り二、三十間もやあらむと思はるる大岩の、恰も不倒翁の如き形したるが、少し前と左とに傾きて重也、屹然として空に聳え、将におちなむとするに似たるあり。実に危ぶげにて、見るもおそろし。このもとに高倉下命を祀れる一小祠あり。東北に向ふ。規模、前の祠に同じ。共に速玉神社の摂社なりといへど、荒廃の様見る人をして心をいたましむ。木野戸教授いはるるには、神武天皇紀に至熊野神邑、即登天磐盾とみえたる熊野神邑は今の新宮町にて、此の山即ち大磐盾なりと云はる。さればここにて国見し給ひしにこそとて、

これやこの神のみ蔵か天皇祖の　登りましけむ天の磐盾

後に土人の語るをきくに、此の社の神を災危消攘の神なりとて、正月六日の夜のみ、馬町あたりの氏子挙りて、炬火を奉り、御前に集ふとぞ。

権現の華表より神倉山の華表まで八町二十歩あり。新宮村の西南にあり。天照大神、高倉下二神を祀れり。社家者云、高倉下天剣を得たるところなり、云々。

とあり、本牟婁郡那智村なる山田正といふ人のものせし錦浦考証といふものには、

二木島の北方に聳ゆる峻嶺を、天之倉山といふ。地方の古伝説に拠るに、上古、高倉下命、此山上に鎮座す。神武天皇二木島に上陸のとき、神剣を献じ、帝を助けて悪神を平定す。後、新宮なる神蔵山に遷座す。後世、其地に殿を建てゝ之を祭祀す。

と記せり。然れども高倉下はもとより此の地に住める人にて、この神蔵山に神剣を獲て、二木島に行きて之を天皇に奉り、而して後、又ここに帰りたるものなるべし。

さて、この山は熊野川畔より南に走り、高くそばだちて、樹よく繁茂せり。高倉下命の社はその中腹なり。これより眼をはなち望めば、新宮町は眼下にありて一々指摘すべく、渺茫たる太平洋は際涯なし。城山は前面に横たはりて海風を遮り、新宮町を庇ふに似たり。思ふに四時ともにこの処にありて海陸の風景を弄ぶにたらん。

雨の足いと早ければ、人の足も止まらずしてもと来し道に立ちかへれり、石階を降りぬ、その中間にかの倉庫のありしといふ。陜き空地に礎石めきたる花崗石数個、哀げに残れり。これら中古の遺物なるべし。馬町にかへりて、電線に沿ひ里道をふみてゆく。その途中に菁莪雑誌熊野新報社といふがありき。熊野社より東南五、六町の所に至れば、路傍の田の中に方十四、五間の平地あり。中央に高さ五、六尺のいと古めきたる石碑、西に向ひてたち、前に竹の手向筒数対並びたり。これぞ徐福の墓なりける、碑面に秦徐福之墓と記す。

さみしく立てたる二本の古木立は半枯れて将に倒れむとし、種々の手向の花は色あせ萎みて地に垂れなむとす。雨は瀬りに注ぎて碑面を洗ふ。秋ははやいたくふけぬれば、稲葉そよふく風いとはだ寒くて堪へがたきに、叢にしげき虫の声さへ身にしむここちして、あはれさいはむ方なし。時しも彼方より畦道を伝ひ来る雨傘持ちたる一老翁ありけり、墓前に進み、手を合せて額にあて、真心もて拝する様、実に傍若無人の体なり。拝し終れるとき、三浦ぬしはつと側により添ひ向ひて、何故かく拝するかといふに、何のいらへもなく〳〵ならで、たゞ莞爾やかに歯をあらはして衆人の顔を見るのみ。さてはと三浦ぬし、己が耳を指しつゝ声たかやかに、これがきこえぬかといへば、翁うなづきぬ。地方の人々、一の祈りをなせば必かなふとて、之を信仰すとぞ。木野戸教授、

いく薬とらむと渡り来し人の　おくつきなりといふは実か

安元君、

大君の御稜威かしこみ諸越の　人も貢をさゝげ来にけむ

われも、

おくつきは熊野の草にかくるとも　その名はつきじ万代までに

徐福のことは史記に委しく見え、その帰化せりし事は神皇正統記に見えたり。口碑に、往古、徐福この新宮村に住せりきと伝ふ。

南紀名勝略志にいはく、

徐福墓は、新宮在上熊野村の西南二町にあり。本地大威徳なり。今は祠なし。土俗、其処を楠籔といふ。按に、義楚六帖に、徐福の事を載せたり。

又、俳韵にも載せたり。義楚六帖には、秦始皇帝の頃とあり。俳韵には、云々、徐福書を始皇帝に奉りて、童男童女各五百人を申請て、海上の三神山へ入りて不死の薬を求めて始皇帝に献ずべしと云事を記せり。其文献通考東夷伝には、始皇帝、方士徐福といふものに、童男童女数十人そへて、海上に入りて蓬萊を求めさせられけれども、神仙に逢はざる故、空しく帰りなば必らず誅

戮せらるべきことを恐れて、帰らずして其国にとゞまれりとあり、書によりてかはりあり。按に、漢土より蓬萊といふ者、日本に於きて諸書に三処あり。一曰、紀州熊野。二曰、駿州富士。三曰、尾州熱田なり。何れにしても、秦始皇帝のとき、徐福日本へ渡りてそのまゝ本朝にとどまりしと見えたり、云々。

応制賦三山　　絶海

熊野峯前徐福祠　満山薬艸雨余肥　只今海上波濤隠　万里好風須早帰

御制尊和　　明太祖高皇帝

熊野峰高血食祠　松根琥珀也応肥　当年徐福求仙薬　直到如今更不帰

又、同誌に、東陽山宗応禅寺の事をいへるところに、

新宮の庄、新宮の村の西南二町半にあり。禅宗の縁起一巻あり。云、紀州室郡熊野新宮東陽山宗応禅寺者、昔在二秦徐福採薬之墓地一蓬萊山之側、高楼傑閣巍然已成法物供無レ不二全備一、雖レ然物換星移而殿堂門廡悉傾二頽柱根礎石一已没二荒艸一矣云々。

とあり。斎藤正謙の題徐福祠といふ詩、

神心託跡有余栄　憶起当初航大瀛　万里来投君子国　一廛願作聖人眠
霊芝仙薬豈殊種　蓬島桃源非異情　同避狂秦君更遠　烏能擇木眼分明

尚、徐福の事、三神山の事等は、平田翁の赤県太古伝、また三神山余考に委しく考証せられたり。

雨少しふりやみてければ、此の間にと宿を指していそぎぬ。元来し道をたどりて小さき坂をこゆ。この坂は城山の丘陵の連亘せる処にして、北に城跡あり。南紀名勝略志に、

新宮城は、新宮庄新宮村にありて、元和年中より水野土佐守代々の居城なり。八幡宮といふ社、城内にあり。榎木氏の祖神也。

とあり。いそぎぬれば、元まで登らで、本意なくもかへりぬ。天主閣のみぞ昔の名残を存すめり。周囲には樹木いや茂りに繁りて、人馬の声たへ、墨を流せるやうにくもりたる夕暮の空いと物すごく、目もあてられぬばかりなり。そのもとに、宏壮なる瓦葺きの独り櫂で、他屋を凌くが見ゆ。路人に問ふに、天理教会所なりといへり。

岩倉神社　新宮庄新宮村にあり。宇井氏の祖神也。

牛鼻神社　相野庄鮒田村の内にあり。熊野川のほとりなり。鈴木氏の祖神なりといふ

新山御旅所　新宮本社の西北五町許にあり。神馬所あり。毎年九月十五日祭礼の際、速玉男神の騎馬此処に来る。又、神輿所あり。毎年九月十六日、事解男の神輿此処に来る。

御船島　新宮庄本社の西六町許に在り。九月十六日祭礼のとき、神駕を船に乗せ奉りて此の島を行きめぐりたまふことあり。

などにもとおもへどえゆかず。雨またふりいで、三浦君、

はるゝまといそげば又もしぐれして　旅の衣のかわかぬぞうき

われも、

雨まじりふく風さむし旅衣　くまのゝ浦の秋の夕暮

街道を行くをりは、幼きものはいふも更なり、老いたるも若きも、男も女も、つねにおのれらの一行を珍らしげにうち見る、匹夫匹婦はそら兵隊がきたぞといひはやし、少し上ずめかしきは陸軍の測量手なりとひがごとすめり。それらは兎も角も、無邪気なる三尺童子が、支那兵よ、ちやん〳〵坊主よ、などゝ嘲笑せざりしは、質朴の地なる故か。

油屋にかへりしは午后五時過なりき。足すゝぎなどして裏の二階座敷に昇りぬ。ふすま隔てゝ書生らしきもの二人あり。一人が他の一人に向ひていうやう、今日は余儀なき次第にて君の室に邪魔にまいりたり、云々の声、先登第一の斥候兵の耳に入りぬ。思ふに、これは初めこの屋をうしはきませる山の神の速に服従

せざりし所以にして、此人は是非にとて終に攻め入りたる我等の勢力に辟易し、隣国に逃れたる敗軍の将なるべし。皆々集りぬ。下衣はみな悉く沾ひたれば、着換の料を催促し、火鉢を求むるなど、いと急なり。これにつけて、下婢どもの顔色までも晴れやらぬけはひなり。やうやくにして一枚の蝉のかたみともいふやうなる単衣を得たり。こゝに軽裘の思ひをなしつゝ火をかこみて、各も〳〵と衣を乾かす。衣干すてふ天の香山に登るにしもあらねば、足の苦しさも覚えず。愉快なる雑談に火の消ゆるを知らず。それより湯をあみ夕飯たうべなどいつもの如し。万歳の声に和する異体同様の腹皷の音と例の如くにして、雨のふるためにゆるみもせずよくさえたりしはめでたかりき。そゞろありきせむにも、雨ふれゝば笠取山の紅葉見といふが如き風流の遊びも出来ず。紅葉せる月の桂も見えねば、すみやかにふしどに入りぬ。

屋根を打つ雨の音、軒のかけひを伝ふ水のひゞき。これ天然の音、自然の楽にして、絲竹の音よりも一ときはすぐれて、おかしさいはむ方なし。日ねもす讐よ敵と思へりし雨、こゝに至りて無上の快楽を与ふるものとはなりけり。やう〳〵時うつり、四方寂として声なくゆくにつけて、音調はます〳〵たかまり、心いよ〳〵すみまさりぬ。

折しも三弦の響、雨をくゞりてきこえ来り、皷膜を打つこと激し。誰人がひきならすにかあらむ。可惜この天賦の雅韻を害ふはといと〳〵にくゝ思はる。されども夜の更けゆくまに〳〵漸く華胥の国にぞつきにける。

七日　自二新宮一　至二有馬一

本科四年生　宗村信喜

悪しや、よべの薄布団は我に空嚢の底をさぐらせて一服のアンチヘブリンを買はしめぬ。暁風いよゝ身にしみて覚ゆ。

くまの路や朝風さむし名におへる　ころもかせ山ちかくもあらなむ

朝来秋雨蕭々として地をたゝく。連日いまだ已まざるなり。われかつて小学にありし日、郷先生が一本の習字帖に「一夜帰心聴雨眠」と書きて授け玉ひしを、詩の心は如何にと問ひたる事ありき。熊野紀行は実に郷先生をまたず而、此疑問を解きぬ。さもあらばあれ淫雨、却りて他郷の客心をいたましむるに至らむとは。新宮の旅舘油屋を出でしは七時と聞きしかど、皆例の寝過したれば、慥に三十分は遅れしなるべし。熊野川を東に渡る。舟のうちにて安元氏、

村しぐれ旅の衣をしぼれとや　わたり行くてに降りすさむなり

何となう名残惜しく心引かるゝ心地してかへりみれば、虹落つる処、神倉山の仙嶺は、翠影淡く天涯に懸れり。

にひ宮のそかひに立つはみ熊野の　神くら山のたかねなりけり

船着けばやがて南牟婁郡にて、三重県の管轄地なり。鵜殿村を過ぎ井田村にかゝる頃、雨やゝやみたれど、猶晴れんともせず。山際の一筋道気またくつかれ脚なえて詮すべ知らず。熊野の秋景を見捨てゝ帰らむは諸友の常に惜む処なれど、如何はせむ。此の道、この日詩的の材料無しなど友の一人がうち言ひて走り行くも、吾を刺るにやと、且は小づら悪し、されば番に当り合せたるが不運ぞと、力の限りふみしめ行もをかし。されど細雨芭蕉に濺く秋声、芦の枯葉に老いたる秋色、また思へば詩趣なしとせんや。抑も雨は誰か為にかふり、露何の故にか置く。顧念点思こゝに至れば帰心更に矢の如し。

阿田村を越ゆ。行く〳〵田野の秋景をうたう。語調の好拙を顧みるに遑あらざりき。

雨にあらしにいとはれて　まちわびたりし秋の田も　かりいれ時となりぬらむ　翁は鎌を腰にさし　孫はうしろに引れつゝ　世をたのしげに語り行　酒や過しゝよべ一夜　顔まで赤にの穂にいでゝ　畔路たどる男あり　みのれる秋のたのしさは　人に追はれしすゞめさへ　落ほひろひておどるなり

後れたる四名の見えぬは仔細やあらむと待てば、一人が腸痛起して車やとはむと喧ぐとかけつけて言ふ。さてはとまてども来らず。やがて十一時にならむと

す。今日の道、大又越までは七里に余る程なるを、かくてはならじと心ならずも行くに、後方車声りん〳〵たるにふりかへれば、安元氏なり。意気頓に加り、更に病無きに似たり。いかにと問へば、何とかしけむ洋紙の端にもの書き付けて取らせぬ。披き見れば、

此の辺に走する車しなかりせば　松の根まきてわれは伏しけむ

車の有りたるが何よりの仕合せ、罪無き人を何か怨みむ。さるにても君は雅男なりけり。此の日、諸友が氏の為につくし、奔走苦慮、道ゆきぶりの千変万化、宛然、浪六が小説に似たり。

棚無小舟の波にたゞよふを見てつれなかりけむ露泉子、

かこや誰今日も嵐にうき沈み

氏、夙に俳道を以ちて館中にきこゆ。想ふに漁夫の行路、難を憐みて多少彼が為に情を寄たるにこそあらめ。分らぬなりに賞むれば、子いよ〳〵得意がりて、如何に〳〵といふも片腹いたし。談たま〳〵漁婦にうつりぬ。遂に槐園が「浪風に心おちゐる隙も無し　船のる人になどとつきけむ」の評論に於きて其の局を結べり。七里の浜ときて見すて難く、橋村教授と海岸に出づ、松原の風景言ふべくもあらず。

七里の浜岸の松原ゆき〳〵て　いにし舞子のあそびおもほゆ

菱州もまた、

うちよする浪の音清したちつゞく　七里が浜のなみきまつばら

鎌倉右大臣も顔色なかるべし。浜たかなといふ艸を摘みて、

浦伝ひ浜たかなえつこの夕　おほまたの里に酒あたためむ

市木の村はづれにみどり橋あり。名もやさしきに、文字さへ貫之流に書きながしたるは、いづれの雅男がすさび也けむ。左の方は海水あふれて山の麓を廻れり。此入江、波なくして中島の芝生に松の立てるもをかし。

水鳥をうかべて見たき入江かな

辛うじて有馬の松原を越ゑて、一茶亭に憩ふ。元気とみに加わりたるは、昼餉のむすび喰ひつくしたる為にやあらむ。

七日午後　自二有馬午餐一至二大又村宿一　本科三年生　金剛　幸之助

回顧すれば、予が初めて本館に籍を揚げしは去にし癸巳の歳、桜樹蕾を破り黄鸝春光を弄する時なりき、而して今は星霜を閲すること茲に六年。其の間、修学旅行を挙ぐること茲に四回に及ぶ。しかれども毎時病痾の為に支へられて、遺慨ながら其の恩典に浴するを得ざりしに、昊天未だ我を捨て給ざるにや。幸に今回の紀州行の驥尾に附くことを得たり。

怒濤磕として狂瀾空を巻き、暝雲黯淡と而天日光を失ふ時、熊野の洋上に金盥の呵嘖を受けなばいかに苦からむとの空想に迷ひしかども、さすがに止まり難く遮莫東洋に生を禀けし海国男子、よし檣折れ檝催け海底の藻屑となるとも何程の事あらむと、表には怪しの金看板を粧ひ、心の中には人知れぬ思ひを焦し、海神に祈願をこめつゝ、三日の午前五時、一隻の紀洋丸に身を搭し、汽笛一声、大王崎の逆巻く大浪を蹴り破りしは、昨日の如く思ひしに、目ばたきする間に行過ぐるは隙行く駒、嘘する間に通り過ぐるは月日の関、今日は既に七日なりけり。朝には滔々たる河川を渡り、夕には峨々たる巒峰を越え、草鞋印する所既に数十里の遠きに達しぬ。

午後一時三十分、有馬の露店にて三個の握飯に漸飢を医し、いざ進まんと例の鞄軽げに肩にかけて出で立つ。秋霖いささか晴間を得て、小春の空うらゝかなるに、吹く風さへ心地よき旅路なるかな。遠近の山の梢は早薄紅に紅葉して、我等を迎ふるに似たるもをかし。時に午後二時。行くこと数町、路傍の小高き所に石標あり。是なむ花の窟なりける。疲れたる足踏みしめ近づき礼拝す。岩の高さ二十五、六丈。所々に窪める所あり。又そが前に王子の岩屋とて、小さき岩あり。

神代紀に、

一書曰、伊弉冉尊、生二火神一時、被レ灼而神退去矣、故葬二於紀国熊野之有馬村一焉、土俗祭二此神之魂一者、花時亦以レ花祭、果時以レ果祭レ之、又用二皷吹幡旗一、歌舞而祭矣、

とあり。又、南紀名勝志に、

熊野村新宮庄に上熊野村、中熊野村、下熊野村あり。今新宮村と云も、元は熊野村なれども、新宮大神鎮坐之後、所の名称とせるなるべし。諸書に熊野村とあるは此所なるべし。惣じて牟婁郡を熊野といへるは新宮熊野村に因りて云ふ。

また、

花窟、世俗大般若岩窟と云。木本庄木本村の南二十町許にあり。（一本に有馬庄有馬村の東北に在りと作り）村の中に奥有馬と云処有り。其の西に産田神社あり。伊弉冉尊を葬りし処と云。或説に、花窟に葬りしとも云。大なる岩山にて社はなし。産田宮よりは東北なり。岩の高さ二十六丈。石表あり、高さ一丈三尺。岩窟より西北一町、山上に岩あり。灯籠峰と名づく。毎年正五九月、衆僧読経して祭る。

夫木抄三十一花祭　　光俊朝臣

神まつる花の時にやなりぬらむ　有馬村にかゝる白ゆふ

主花の岩屋にて天人のおもて（りカ）供養し奉るを偲びて　　増基法師

天つ人岩ほをなつる袂にて　法のちりをば打ち払ふらむ

花の岩屋までつきぬ見れば、やがて窟の山中をうがちて経をこめ奉るなりけり。是は未勤（勤）仏の出給はむ世に取出奉らんとする経也。天人常に下りて供養し奉るとあり。傍に王子のいはやといふあり。松かぎり有る山也。その中にいとこき紅葉共有り。むげに神の山と見ゆ。

のりこめてたつのあしたをまつほどは　秋の名残ぞ久しかるべき

夕日に色まさりていとをかし

心ある有馬の浦のうら風は　わきて木の葉も散らず有けり

また、

産田神社、有馬村の内に在り。則有馬庄也。相伝ふ、伊弉冉尊を葬りし所也。日本書紀曰、云々。或曰、花窟、葬二伊弉冉尊一之所也と。一説、花窟、火神産田伊弉冉尊を葬れる所也と云。按に、日本紀を以て正とすべし。

日本紀通証は、

那智三巻書曰、有馬村有二産田宮一。（今按、聞二之新宮神人一合二祭冉尊軻遇突智一也。）乃伊弉册尊神退之地而、其東有二隠窟一。亦曰二産立窟一。亦曰二花窟一。（花窟、見二増基熊野紀行一。）所レ葬二伊弉册尊一岩窟也。（今按、去レ宮三里許、海浜突出大厳壁也。）毎歳暮春、以レ縄作二花及幡旗一。（今按、攅二旗賢木葉一為二花勝一垂二之縄旗間一也。）囲二繞於窟一歌舞祭レ之。蓋往古遺俗也。（久安百首、大炊御門右大臣、木国也有馬村爾坐神爾手向留花波散羅之登曾思布、夫木抄云々、読人不識、春風爾梢咲行木国也有馬村爾神祭世与）

とあり。

抑、此の花の窟に付きては古来、諸説粉々として定まらず、或は伊弉册命の尊骸を葬奉れる古蹟なりと云ひ、或は然らずといふ。かく諸説の分るゝ所以は、神代紀の神避の語の解釈当を得ざるに基す。そのよしは古史伝に詳論せられたれば、此処には唯其の大略を弁じ置くのみ。

熟考ふるに、伊邪那美命の御尊体を此地に葬奉たりといふ説は、恐らくは牽強附会の説なるべし。その夜見といふに、漢土の語なる黄泉の字を当て用ゐ、神避といふ語は崩去のことと心得たるより、斯くは誤り伝へしならむ。かくて神避といふ語は、避てふ語に尊辞の神といふを添へたるのみにして、只避といふと聊も異なることなし。且又、伊邪那美命の予母都国に往き坐せるは、其の御産の有様を妖神の御覧じ玉へるより恥ぢ恨まして、御面を合せたまはじと男神の御許を離避りて、現身ながら往き坐せるなるをや。されば此の岩屋は、昔人が伊邪那美命

の尊の尊骸を葬し奉れる処なりと誤認し祭りもし拝みもしつるより、遂に彼の御霊の移り坐せるにか。いとも〳〵いみじきことにこそ。あなかしこ。

有馬村を過ぐれば、例の紀州の海岸なり。左には層々たる瓊山金厓を負び、右には洋々たる熊野灘を控え、青松白砂の間に道を通したり。造化の神は何故にこの筒米振る紀州の寒村僻地にのみかゝる絶美の神女を宿らしめしか。

たちつゞく松の木蔭にうちよする　並々ならぬこの旅路かな

須叟に而木の本に到る。当地は紀州有数の良港にして、人家櫛比して炊煙盛に立ち登れり。

因に云ふ、発途以前は木の本に一宿し、八鬼山の険を越えて荒坂津なりといふ二木鳥の旧蹟を探知せむ予定なりしかども、天災と日数との許さゞるが為に、更に方向を転じ、大又村を経て尾鷲に向ふことゝはなりぬ。いとも口惜しき限なりかし。

木の本を過れば又同じ紀州の山道なり。麓にて一行は二手に別れ、両教授と宗村君は新道に就き、余の一行は旧道を登る。旧道の方に進みしものは、半途にて道に迷ひ、進退維谷の難に接したり。前に進まんか、荊蕀縦横して険厓崆峒たるをいかにせん。後せんか。峻坂湫隘して道の遠きをいかにせん。されど血気盛の若武者連、何かは躊躇ふべき。左縈右廻して忽一方の血路を求め、ひた走りにはしりたり。登ること八、九町にて旧道は新道と合したり。時に牛牽きたる男あり。教ふるに旧道の近きを以てす。さらばとて仰山、年川、江雨の三子と予とは、先の難にも懲りず、又も旧道の方に進行し、あはれ一行の先登たらむものと、苦しき息の下に不知案内の羊腸たる小径を攀ちては登り登りては降り、辛うして頂上と覚しき所に出づ。あな無念や、先発してのけたりと思ひの外、予等と同装したる者二人、早くも峠の石に腰うち掛け居たり。眸を定めて窺へば、先に後れたりし高松、沢田の二子なりけり。何故にかくは早かりしぞ。捷径にてもありしかと問へば、彼方はうち笑ふのみ。暫此処に休憩して新道の一行を待つ。年川君、朝の程より心地悩ましとて苦しみ居たりしに、此の時漸元気快復せり。

往昔より此の峠を評議峠とよぶは如何なる故ありてにか。木の本より此の峠までは一里八町ありとぞ。又もあらはれたるは獅子か、熊か。獅子にもあらず、熊にもあらず、一人の男なりけり。色あくまでも黒く、たくましく片肌ぬぎたるさまいとおそろしきに、口角沫を飛ばして予等に道を教ふるさま恰も天狗に逢たらんやうに覚えぬ。一行をして足の疲を忘れしめたるは、此の男預りて力ありといふべし。

局山ぬし、又病のけありとていと悩めり。峠のとある茶屋に一休せる後、又も熊野の山道を拾ふ。例の時雨は押寄せ来ぬ。外套の城廓も彼等の鋭鋒には敵しがたくやありけん、将卒悉ぬれ鼠となる。野口、小坂の諸村を経て大又村に到る頃、早夕陽は西の山の端に沈み、雨いよゝ降りしきる。木野戸教授、例の鬚をさすりながら、

日数ふるながめにあきつ熊野路や　山のすがたも川の流も

三亥ぬし、

小雨ふり行きくらしつる山中に　心のみこそいそがれにけれ

われも、

宿るべき駅は見えず雨くらし　此の夕暮をいかにかはせん

折しも夕告げ渡る野寺の鐘、松吹く風に響きてかすかに聞えければ、

入相のかねに時雨のふりそひて　火影こぐらき大又の里

局山ぬし、病次第にたえがたくなりけるにか、あゆみては休み、休みてはよろめき、我が腕にすがりつゝ、霜にかれゆく虫よりも細き声音にて、「どうもひどい、中村屋はまだか」といふ。いとしくものたまふものかな。最早宿屋も程遠かるまじきに、さな心をいためたまひぞと答ふるも心ぐるし。

ふみ行けば又も木かげにかくれけり　うれしと見つる里の灯火

年川ぬし、

大又の宿のあたりは見えわかで　雨ふりしきる夕暮の空

午後六時三十分、やう〳〵中村屋に到着す。其のうれしさ譬ふるに物なく、恰も病雀花を喰ひて飛揚の翅を伸べ、轍鮒雨を得て儉喁の唇を湿す感あり。雨はいよよはげし。仰山ぬし、

かくまでと旅の哀はしらざりき　時雨ふる夜のふるさとの夢

われも、

細雨蕭〻満旅裘　遶簷点滴瀉高秋　疎鐘攪破家山夢　夢覚還添一段愁

例によりて宣戦の号令は下りぬ。あわや、一騎も残さじものと、何れ劣らぬ大丈夫が手に手に著とりて決戦を始む。今宵の金鵄勲章功一級は果して誰が手に落ちしか。

午後八時、寝に就く。

よひ〳〵にかはる旅寐の草枕　むすぶゆめ路は故郷にして

八日　自二大又一至二長島一　本科一年生　藤原末三

鶏鳴一声、故郷の夢は破られぬ。雨は昨日にもまさりて降りしきるなり。木野戸教授、

ふりつゞく雨にぬれつる旅衣　晴間なければほすよしもあらず

七時半、大又の宿を出立たむとす。草鞋よ〳〵と騒くは例の事なれど、今日は此処より六里が程は山越なる新道にて、只二、三の茶屋あるのみと聞けば、皆々新しきを一足づゝ取らむとすれど、宿にはなしといふ。少女をして近きわたり求めさせて、からうじて七、八足を得たり。さればせん方なく、やれわらじ穿きつゝもいでたつ。川に沿ひて行くこと半里許にして坂路にかゝりぬ。されど大雲取、小雲取の難場を踏越えたる我が行の健脚、かかる坂路何かあらむとて登り行く。一里許も来つと思ふ程に一の茶屋あり、此処に暫足を休めぬ。是より道は山の中腹を開きたるものなれば、一層嶮悪なり。左を見下せば深さ幾尋かあらむ。谷川の音、底にかすかなり。水は山上より滝の如くおち来て道に横れり。かゝる滝、道すがら幾許見たりけむ。こは正しく積日の降雨の為に出来たるものならむ。十一時頃、漸く峠に達し、此処なる茶屋に憩ひて昼食す。是れより道は下坂にして、尾鷲まで三里なり。此路、工事未終らざるか、又破壊せしか、幅一間許なる道も、角立てる岩石の数多く並べる為に一尺許になされたり。あな恐しや。一歩を過ちて左に落ちんか、身は千尋の谷底にころび落ちむ。右に倒れむか、足は忽此の石に傷られ、行くも三里、帰るも三里なる此の山中にて如何にせむ。皆々戦々兢々として、一歩〳〵に注意しつゝ行く。木野戸教授、

大又の又とはこえし空はれて　風はなくともこれの山路

あはれ、行けども〳〵道は依然として仝く、且下るに従ひ積日の雨に赤土とけて一歩毎に足は泥中にかくさる。嗚呼と長息して止まる事数回。されど詮すべなければ又勇気を鼓して進む。歩めど〳〵此の羊腸たる道は尽きざるなり。四時頃、からくも矢浜と云ふ所に出づ。尾鷲に達せし頃、雨は漸やみたり。

天公我等をあはれみ玉へるか、空一面のむら雲は天の一方にかき消え、日光初めて晃き出て、尾鷲の山は斜陽を啣み、外套の湿気は蒸発を初めたり。此処より矢口まで舟に打のる。稍漕き出でし頃は大空一碧、少しの雲だになく、前面多くの岩島は樹木生繁り翠色水面と相対せり。木野戸教授、

海原をわしるが如く梓弓　矢口をさして行く小舟かな

舟は大きからざれば動搔甚しく、波たつ毎に上下す。「それ大なる波よ」など云ひつゝ騒く程に、早くも矢口につきぬ。皆痛き足踏みしめて、十八町の坂路をいそぐ。白村に至りし頃は、いとさびしき夕暮なりけり。

談判数回にして漸く舟を長島に出すに決す。風つよく波はあらし。日もくれぬと船人いふ。日ははや西山に落ち、玉兎は此の青翠たる乾坤の間に跳り出でたり。この月、一歳中、今宵一夜よりは見ること難き陰暦九月十三夜にして、その清光水に映せるさまえもいはれず。所々にあらはれたる村雲の月を掩はむとする様な

ど、又一層の観をなせり。皆愉快〳〵と呼びつゝ打のる。安元ぬし、とりあへず、

白の浦今はこきいでむ大空に　月の御舟もあらはれにけり

木野戸教授、

いづくより船出せしぞと人とはゞ　月面白の浦と答えむ

白の浦やうらやむ人のをほからむ　船にて月を見きと語らば

己も、

雲間より浅糸さして照り渡る　あなをもしろの浦の月影

宗村ぬしも、

白の浦にかち枕して夜もすがら　月と共にや遊びくらさむ

松本ぬし、

海士となりすまはや白の浦小舟　うき世の外の月を友にて

舟なる三人の船頭は手を機械的に動し、全速力を以て行進す。此のわたりを桂木の浦と云ふと水手のいふ。三浦ぬし、

桂木浦浪にたゞよひこぐふねの　とまりや月のみやこなるらむ

金剛ぬし、

ゆく舟のかいの雫にやどるかな　桂木浦の秋の夜の月

木野戸教授、

浪の上にてる月見つゝ　桂木の浦こぎ渡る棚無小舟

次ぎて安元、宗村、三浦、金剛の君たちは、空飛び行く雁のごとく、ひきつぎ〳〵詠み出たり。

すみ渡る月の中なる桂木の浦まこぎゆく棚無小舟

雲霧はあとなくはれて青海原　潮の八百会に月すみわたる

雲の上にたゞよふ月のかげのせて　舟こぎ渡る桂木の浦

てる月の桂木浦をこぎゆけば　秋の哀は浪にくだくる

折しもかすかに灯の見えければ、いづくぞと水手に問ふ。左なるは三浦にて、右なるは故里といふ所なりと云ふ。木野戸教授、

てる月をみ浦の里の蜑の子は　さやけき影に貝拾ふらむ

安元ぬし、

三浦潟月夜よしとや海士の子も　袖ふりはへて貝拾ふらむ

三浦ぬし、故里の方なる灯に目を注ぎて、

故里ときけばしのばる思のはに　親は今宵の月やまつらむ

木野戸教授、

秋ごとに今よひの月やかくすむと　年ふるさとの海士にとはゞや

舟は岩と岩との間僅なる所を通らむとす。波は岩にくだけて白糸かけしが如く、又時ならぬ花の咲けるが如く、絶景いはむ方なし。金剛ぬし、

月かげよなれもうかれていでぬらん　岩にくだくる荒波の上に

かゝる程に、舟ははやくも長島近くこぎよせけり。木野戸教授、

見れど〳〵あかぬ月故あきの夜も　ながくぞいのる長島の浦

ゆくさには朝風のほわし熊野の海　かへる船路は月を見るかな

かくて長島につきぬ。

吾一人ゆくたびならば月見つゝ　今夜は此処に明さむものを

と思へど詮なく、あかりゆく友にいざなはれて、海浜なる嵐屋と云ふ宿に到れるは、八時すぐる頃なりけり。

九日　長島より野後まで　　本科三年生　三浦千畝

旅のつかれとにはあらざめれど、この四日、五日ばかりは、気分なにとなうすゝまず、筆をとれば頭おもく、机に向へば気屈し、万ものうくて、それが為このたびの紀行も未にえかゝずなん。今日は帰舘後早くも十日ほどにやなりぬる。同舘の諸友は已に皆日記かきをへたるなめり。さるに、おのれのみひとり残りたらむこと、いかに心うくやあらぬ。はた紀行にもれむも中中に本意なきわざなり。さ

りとて人の筆を煩はさんも心ぐるし。いかゞはせむ。今は心ならずも左の文とり出してこのたびの日記には代へむとす。見るが如く、左の文はおのれ桑梓におくりし水莖のあと、いとたど〳〵しきは更なり、出して人に見すべきものにはあらざるを、こも全くかゝずにやみなんよりはとてこそ、かゝる文もて金詞玉藻の間を談貂せむこと、諸友に対しても学館に対してもいと罪深く、且ははづかしきはみになん。

時候も大分寒冷に相成り、冬きぬとことわりがほの初時雨もふりみふらずみ定めなく、そゞろ荒涼を覚ゆる此の頃、殊に国の方は、こゝに比して又一段の寒さ、気候の度合は多少相異のことと存じ候ふ。御両親様には時節柄、折角御いとひ御自重の程遙に祈り申し上げ候以上。只今々回旅行の一通サツト御案内申し上げたるまで、いづれ紀行は先達て送呈御覧に入れたる伊賀紀行の如、他日印刷に附せらるべく日記は矢張昨年のと同様、時間をもて番を定め、その日その日の出来事はそれぞれ当番の人により、緻密に、精巧に、雄健に壮麗洒脱に得意の端に写し出さるゝ筈に候ふ。さて九日長島を発してより野後迄の間は吾が日記の当番にて候ふ。困却仕り候ふ。吾が生来の不文、元来の無性、日記など書くことは大々的不得手、何をかいてよいものやら殆当惑、さりとてかく一行に附尾し来りたる上は何もかゝずに済さるゝ訳にも参らじと、大分気がゝりに候ふ。御推察下され度く候ふ。しかし此の日は案外の好天気、一日久しぶりにて朝日の顔を拝みたる仕合せ、人々のよろこび譬ふるに物なし。もし無理にたとへば、地獄から夜遁げして今日始めて娑婆の風に吹かれた所とも申すべくや。今日の天気は余が日記かくべき日なればなどゝ、たま〳〵御天気を相手になにか自分の功徳でもあるやうに我ながら心おこりせらるゝもをかし。それに人々も今日はいかにしてもふらるゝ気遣(遣カ)なしと見て取り、ドーセふられたが果報者、雨中の旅も亦風流、今更の天気あがり気がきかぬなどゝ、我侭勝手の大平楽、テンデに気楽な口をたゝくも是また時にとりての好愛嬌と申さば申さるべくや。

今日の日記は自分の受持ち、かく責任が出来ては先天的朝寝坊の横着者も、さすが今日丈は人におくれじと殊勝にも三十分程はいつもより早くソト布団を這出せば、両教授は寝所で脚絆を穿きをらるゝ最中、シマツタと身を起せば一同もどさ〳〵と前後して起き、やがて朝飯も来たればそれと云ふを合図に小きは五、六椀、多きは七、八椀、われ先にとかきこみ、それも片付けば例によりて出立の用意、脚絆を穿く、外套を着る、握飯を鞄に叩きこむ、鞄を肩にぶらさぐる、かかるさわぎも一行にとりては毎朝の行事、格別めつらしくもあらねど、さりとてかかる狼藉者を始めて宿したるこの家こそ無上の迷惑、いづれ出た後の塩花は免れぬこと存じ候。

かくて一行こゝを飛び出したるは午前七時に僅十分ほど前、たゞ両教授のみは凡二十分ばかり一行に先んじて発足、さすが寝所で脚絆をめさるる御用意、旅の秘訣もここなりと一同窃に敬服致し候ふ。今、錦浦と云ふ処、このあたりときゝ候へば、いかで一わたり見て行かむものと思ひしかど、われ独一行におくれむもわびしからむとて、心ならずも断念して、

旅衣重ねきてむ錦の浦　うらみかねつつすぐる今日かな

後拾遺集に、「名に高きにしきが浦を来て見れば　かづかぬあまはすくなかりけり」と云ふ歌見え候ふ。書紀の神武の巻には、「天皇独与二皇子手研耳命一帥レ軍而進至二熊野荒坂津亦名丹敷浦一、因誅二丹敷戸畔者一云々」とありて、即本居翁は記伝に、「今も熊野の東北の極、伊勢国の堺に近き地に、錦浦と云ふ処あり。是彼なる丹敷浦なるべく云々」と云はれ候ふ。いづくぞと人に問ひ候へば、この長島より一里ほど東南の方にて、かの山影やがて錦浦なりとこたふ。をりしも雁かね遠くかなたの空をなきわたりければ、

きて見まく誰もほりける浦なれや　ころもかりがねなき渡るらん

長島橋を渡り二郷村を過ぐれば、足首やゝ仰ぐと覚へて、やがて荷坂峠の麓にかかる。又米の谷峠ともいふ由。宗祇諸国物語といふものに、「伊勢より熊野へ

こゆる里程百余里、山嶮しく川深し、ある所には山皆巖こりかたまりて一寸の土なく、家居悉板を壁とし石を竄(窟)とす。ある所には四方二、三里水なくて、雨を頼みて用水にし、雪を封じて飯をかしぐ。或は一生五穀をくらはず、樫の実おち椎を拾ひためて命の便とし、猿狸狩りつくして常の糧とす、云々」と見ゆ。此は余りに仰山なる話なれど、兎角に熊野辺は五穀少き処なりしなるべく候ふ。されば荷坂又は米の谷峠など云ふことも、当時伊勢の方より米など多く荷ひてこゝらを越えあるきしよりの名にもやと覚え候ふ。頂上は伊勢と紀伊との国境にて、北は度会、南は牟婁、昇り廿八町とぞ聞き候ふ。仰けば山脈迄と蟠りて長蛇の馳するが如く、道は其の中腹を迂廻屈曲して帯の如く引かれ、一寸けはしさうに見えたれば、

けはしさをなゝに坂と人とはば　人の心と我はこたへむ

歌にはかく路難をきめしものの、高が一里足らずの山坂。大雲取、小雲取とて古来名に負ふ峻坂嶮路すら物の数とも思はず、しかも風雨の真最中にふみ越えふみならして鍛錬ひあげたるこの鉄脚、何程のことかあらむ。マケヤマケヤ（こは、吾等昨年伊賀行の時より、嶮峻をたどる時共に唱ふるかけ声に候ふ）とかけ声打合せつゝ、無二無三に昇る。登る事一、二町にして、山肩を一直線につけたる石畳の旧路を見出しぬ。必定捷径ござんなれ、こゝでこそ先発の両教授にも追ひ及かめ。ナニ見事駆けぬけて見せむものぞと、そこよりは旧路をたどりて、凡三十分計にして難なく頂上に達しぬ。茶屋に憩ひてきけば、新道の半に足らぬ捷路なりといへり。やゝしばらくありて両教授見え給ひぬ。いそがば廻れの御正道を守られしと覚えて、一行よりは二十分ほど先に立たれ、二十分程おくてこゝに着き給ひしこそをかしけれ。心地よしと窃に隈川をかへり見れば、余りに無遠慮なりと制す、時に午前十時十分。両教授云ふ、敢て後れたるに非ず、坂半の茶屋に憩ひて海原を眺め居たればなり、呵々。是よりは道も至りて平かに、すべて降り路なれば、大内山村迄一里半が程は、只一息と駆け下り候ふ。回顧すれば大内山、雲間に高し。

名づけしも仰げばしるし大内山　みねこそ雲の上にそびゆれ

此の日、荷坂山を登る比より、左の足草鞋の紐にすれて少しいたみは感じたれど、今日は里程も近し。道路も坦なりと、充分便り、そのまゝおして来たれば、果して豆出来たりと覚えて、艸鞋にあたりていよいよいたし。間弓村過ぐる頃はたへぬほどなりしかば、三亥が宮様といふ称号を得たる先例もあればと、随分しのびたる積なれど自然色に出でにけり。是非なく候ふ、後よりきこゆるやうに、聞えぬやうに、

ものゝふのとるや真弓の村はづれ　ちんばひきつつゆく人やたれ

何者ぞ、失敬なりとふり返れば、四、五人続きて来、歌主誰ともしれず。いと腹だたし。そこを通れば、駒村といふも名ばかり、只走り馬が糞まきちらしたらむやうに、こちの薮陰に二軒、そちの溪谷に三軒と、都合十五、六軒の既然たる破屋見ゆるのみ。この道の辺のあやしげなる茶屋に、赤福餅といふ看板掲げたり。一行をかへり見れば、いづれも御意ありげなり。局山、やや真面目くさつて、赤福とは宇治の名物、吾等のこの餅に於ける、東京書生の焼いも等に於けると一般、ここで見るこそ奇妙なれ。ハテどんな餅か見たいものだ……見たいものだとは食いたいものだといふことなりとは、嘗て柳北先生の云はれたことなり。丁度御腹も北山時雨、ここ御察し申すとウッかり矢を放てば、「我にて知りぬ欲しき心は誰」だらうとすきねらうての返し矢、身をかはす隙もなく、ここサン〳〵の敗北、かかる駄洒落をならべつつ、零時半ばかり、柏崎といふ村迄参り候ふ。ここに一同、とある茶屋に腰打ちかけ午飯を喫す。此の家の後に白菊の咲きたるを見て、柏崎といふを折句に、

かれ〳〵のしばにしろきははつ霜と　さきまがひたるきくの花かな

きた冬の歌とて、

かみな月しきる嵐のはげしさに　さそはれてちるきゞのもみぢ葉

手帳のはしに書きて三亥に示させむ、「皆人餉の上に涙落してと云ふ注文か」

と冷かす。餉ほどびては不経済なり。名歌はよし給へとからかふは年川なり。さてここを立ちて宮川の一水源、野後川の上流、大内山川を左右に打渡りて、やうやう阿曽村に着き候ふ。この間に綢かけの山、阿曽の白倉、岩船橋など大分歌の題にも合格しさうなる所もありしかど、一、二首をひねるも、面倒臭しとてもらし候ふ。さすが局山は慈悲深き男とて、山田の案山子にも情をかけて、

　弓矢とりをたけびすれど秋ふけて　風肌さむく衣やぶれぬ

塩の宮を拝む。こは山の辺の罔阜にありて、小高き岩の上に建てられたる社に候ふ。ここらの岩石は悉塩泡の凝結せるもののやうにて、土にも付かず石にも付かぬ灰色したる化石に候ふ。その傍に小井ありて、水は沸々と底辺よりわきあがり、無色透明にて無臭なる清水に候ふ。衛生局の分析表には、刺戟性の塩味ありて、其反応は弱酸性なり、煮沸すれば著く悪児加里性を呈すと、何かはしらねど一種の鉱泉たるに相異なし。試に嘗むれば、いかにも酸くして塩味を帯び、いはゞ重炭酸に酒石酸を和したるやうなる物に候ふ。二、三年前ここに浴室を設け、この水をとりて一大鉱泉場を作らむと、こころみし人ありし由なれど、浴客少くはか〴〵しく行かずしてやみきとかいふことに候ふ。今はその建物なども取り去られて、只植込の桜樹楓木など僅に存れるをみるのみに候ふ。

ここを過ぐれはやがて野後村、その道の辺に、この村の共同墓地ともみえて、一の墓所を見受け候ふ。墓碑はいづれも何々大人奥津城、何々刀自墓など刻まれて、仏臭きもの一も見えぬは、矢張大神宮様の別宮滝原宮御鎮りまします処なればと、いとありがたく覚え候ふ。いつとても墓だの塚だの死者だの、亡者だのといふことは余り縁起のよい話にあらず候へども、しかし己は「旅者と墓」といふ問題に付ては、いささか考ふる所なきにしもあらず。（とは申せ、なにも旅行者はどこに行き倒れ、どこの土になるかわからむからと云ふ訳にはあらず。一口に申せば、旅行者は墓と云ふものを軽々に看過してはならぬと云ふ意味にて、此を詳く云ふ日になれば、中々手紙の片端や日記の片手間にかき尽さる、訳のものには候はず。）即この度、己が目にとまりたる二、三の墓所に付き、聊感ずる所を手短ながら、ちと真面目に申し述ぶべく候ふ。さてこの旅行中、墓所といふもの、目にとまりたるは、こゝの外に昨日尾鷲に入るときと、白浦を過ぐるときと、今日柏野を通ふ時と、都合四ヶ所に候ふ。尾鷲にて見たるは、墓石いづれもきよげに、時の花さへ夫々新く供へられ、それに風雨を覆ふ料にとて、小さき堂やうのものいくつも作り設けられたるなど、田舎にはいかにもめづらしく覚へ候ふ。白浦なるも、これまた一小溪村のものとしては、中々立派なるものと認め候。ひとり今日柏野にて見たる墓所のみは、いかにもあやしく、田畠などの新に開墾されたるときのやうに、只土塊や石ころのかき依せて、僅一尺ほどの高きに盛り、その上に円方何の形ともなき手頃の山石をとりて、無造作におかれたるには驚き入り候ふ。勿論文字とては、墓のはの文も刻れたるもの一も見受け申さず。斎宮の忌詞には、墓を土塊と申されたる由。して見れば、これが却つて古風の所かも知れず候へども、さりとて、現時猶かゝる未開の土地もあるものかと思へば、又あやしくもめづらしくも覚へ候ふ。いつも己は田舎めぐりなどしてその村その里に於ける、風俗、習慣、さては人情の厚薄貧富の差異、宗教心の強弱、その種類等を知らむとしては、先足をその村その里に入るゝにさきだち、第一着に墓地をその郊外に尋ぬるを便なりと致し居り候ふ。よし墓碑の大小良否こそは、その家々の貧富にもよるべけれ。しかし墓地の清浄なると不潔なると、供の花や手向の水の新きとしからぬとは、必しも人の貧富にのみかゝるものならねば、人情の厚薄も略此らによりて見うるべく候ふ。かの「あるときはありのすさびににくかりき　なくてぞ人は恋ひしかりける」などいひつるも、単に男女間の癡情を訴へたる恋歌なりとして、捨てゝ仕まへばそれ迄の話なれど、人情と云ふものは実際かうあるもの、これが抑人の真心なりと見たるときは、人が死者亡者を遇する厚薄によりて、生者間に於ける交情の真想を卜知することも、強ち無駄なりとは申され間敷く候ふ。されば墓畔いときよげに、掃除などもよく行きわたり、手向の水も新く、供養の花も殊勝げに、

その上、桜楓、松などのさるべき樹木さへよく植え置かれたるなどは、あらぬ他人のよそ目にも、なにとなくうれしく見らるゝものに候ふ。所が、墓碑前後に傾き、荊棘縦横に延び、卒塔婆伏し、垣破れ、白昼なほ狐狸猪兎のかけ廻ると云ふ様なる所を見ては、誰しも人生の無常を観じ、人情の頼なきを覚へ、そゞろ凄涼悲哀の感を催すものに候ふ。

滝原の大滝、こは御調瀑とも申して、ゆく道すがら長者野と申す処より、左の方に二、三町程わきに入り、野後川の流にある滝に候ふ。高さ僅一丈ほどもあるべく、那智の大瀑布に目を濯ひ来たれる一行には、態々立よるほどのものならねど、誰も滝原宮に詣でゝは、見る滝なればとて行く。只己と三亥とのみは、昨春こゝに詣でしをり、一度見たることあればとて行かず。橋村教授も、幾度も見たればとて止めらる。木野戸教授のみは、空しくこゝに待ちをらむよりはとて行かれたり。局山歌ありとて示さる。

野後川瀬にすむ神やいかならむ　かけわたしたる瀑の白木綿

年川は充分軽蔑して、

名も高く大滝とても人はいへど　只山川のなるにぞありける

宿につきたるは午後三時前。いつも日暮道遠の嘆声絶えざりし此の旅行には、かく夕陽を高くいたゞきなから、晴天白日に大手を振つて意気揚々宿に着きたるは近来の大手柄、こゝ特筆大書する値ありと申して然るべく候ふ。此の日の先登者は豊汀、菱州、江雨の三人、柏崎あたりより一行をのりこして、頻に膝栗毛をいそがしたるは、察する所いづれ野心ありてのことなるべし。

一同旅装のまゝ滝原の宮に詣づ。昨年参りたるは時あたかも暮春の好季、宮域の桜花はやう〳〵ちりそめて、神林の若葉はやゝ緑せし頃なりしを、此の度は、冬の初秋の暮とて、露霜の経緯もてあやなせる紅葉の錦は老杉古樟の間になどよくおり出されて、春秋の風景自異なるより、触目の感も更にその新なるを覚え候ふ。当宮のことは、皇太神宮儀式帳に、

滝原宮一院　　称天照大神遙宮御形鏡坐

並宮一院

とありて、今の五十鈴宮に遷り坐す以前は、こゝに四年間鎮り坐しゝ由に候ふ。太神宮本紀に、

従二其処一幸行美地爾致給奴、真奈胡神爾国名何問給支、曰久、大河之滝原之国止白支、其処乎宇大之大宇禰奈乎為天、荒草令二苅掃一天宮造令レ坐支、

と見えて、いとかしこき御宮にこそ候。こゝをよみたる古歌いと多けれど、今その二、三をあぐれば、

夫木抄　　為家

滝の原ならびの宮の神たから　猶すゑつゞくおきつ白なみ

仝　　西行

波と見る花のしづ枝の岩枕　滝の宮にやおとよどむらむ

神祇百首　　元長

たきの宮の道さまたげになりぬらむ　浪と見るまで咲ける卯の花

他は略し候ふ。さて局山、

千早振神代のむかしあなかしこ　こやいでましの大宮所

おろがめば神さびいます宮所　など御心にかなはざりけむ

三亥、

天そゝりたてる鉾杉しみさびて　仰ぐもかしこたき原の宮

年川、

きて見ればいともたふとしたきはらの　神の宮居はとこしへにして

菱州、

たき原の神の御前は秋ふかし　紅葉をぬさと手向けて行かな

隈川、

あふぎ見る野後の宮のかしこしや　森神さびて殿すが〳〵し

おのれも、

大神のとほのみや居といふとほに　神さびまさむ宮居たふとし

宮域を貫きて流るゝを頓登川と云ふ。水清くしてさまもよく、五十鈴川に似たり。

いにしへはこゝにみや居とともむと川　きよき流は今もかはらず

此の日の宿は橋本屋といひて、己が昨春もとまりたる家にて、室も同じ処なり。なにとなくなつかしき心地せられ候ふ。

今夜はまづ此の度の旅行にて最終の宿りなればとて、両教授より青列従事を恵まる。天の美縁に一同望外の喜び、それは何分ありがたしと、をのをのいさんで任地の座にものす。（但両教授には如何なる都合にか、助教授なみの旅費すら給与あらざる由、今回の旅行は道路の遠長と、物価の騰貴とによりて、己等の補助費は既に尽き、昨夜の宿料よりは両教授の支弁なりときく。何分気の毒と申すべし。）こゝに四門開け下情通し、一坐の隅よりやゝ変テコなる議を呈するものあり。曰はく、這回の旅行に於きて、宿屋の飯を食ふことは今夕を以て終とす。ソコデ今夜は歌或は詩、発句或は川柳、なになりとも各得意のものを以て、即坐に一首づゝやるべし、若成らずんば、罰依飯後之鐘、これをひらたく申せば、先代萩の千松をつとむることとなり。かの若詩不成罰依全谷之酒数など云ひし、唐人の駄洒落も古臭し。よし罰杯をくはした所、トテモそれに狼狽する如き、慾得知らずの馬鹿正真漢もをる筈なし。依ッてこゝ一ッ斬新の工風をもッて右の議を呈出するものなりと、発議頗る得意なり。何なりと一ッやらねば飯食はさんとは、随分酷なことをいふやつかなと、ツト一座の動静をうかゞへ、それよけむ、それ面白し、イカニモ賛成など、満坐一致の勢、中々一木の支ふる所にあらずと、独面ふくらしても肝心の腹ふくらさぬとではせん方なしと、先木野戸教授。

いざ子ども舞へや歌へや滝原の　里もとどろになりとよむまで

局山のは大分長いもので、咳ばらひも体裁よく、

みだれゆくよをうらなげき　かはりゆく時をうれひて

いたづらに泣きてくらさば　秋風に身もやせはてむ

よしさらばしばし浮世の　雲水をわが身の友として

旅衣たちしにはあらず　しかはあれど野くれ山くれ

海渡り河を下だれば　心なぎて楽しからむを

御社に詣うでゝみれば　荒れましゝ様になげかれ

古塚を吊ひくれば　いにしへのことししのばる

さてもうき此のよの中に　語るべき友はあらじや

旅に出でゝ求むるとても　心ある人はとれがたし

よしさらば吾又一人　世をなげき人を怨みむ

旅の空にも

三亥のは発句一首、

鬼わらぢ財布くひけり熊野みち

隈川は、

きの国の熊野の山路ふみこえて　はやもかへるかいせの国へに

年川は、

故郷の母やあやなくながむらむ　わがゆく旅の夕暮の空

菱州は、常にも似ずヂツト四角張りて、

容夢無端落故郷　清風一覚夜凄涼　秋宵空対滝原月　鴻雁声々惹恨長

檀村は、

野じりとは誰が名づけむ山川の　きよき河内のこれの宮所を

三散は、

道すがら里の子供にたはむれて　慰めかはす旅路なりけり

江雨は、

いやたかくしげれる杉の神さびて　あふくもたふと滝原の宮

己も、やう〳〵のことで、

家にあれば寝てをる朝を夙におき　旅はうきものさてつらきもの

これは旅を消極的に見ての沙汰、一ッ積極的によむ時は、

家にあれば見られぬところおほく見て　旅はよきものさて面白きもの

寝所にもぐりこみしはたしか十時過ぎと覚え候ふ。先これ迄は自分が日記の受持、あとは、よし鼾に緩急の差ありとも、長短高低の別ありとも、それまでの穿鑿はなにも要らぬ話と、われも大概にして邯鄲にものしぬ。ましてそれよりあとのことは、仮令盗賊が出て来やうが踊り込まうが、一切万事、あとは与り関せず焉。

かくて翌朝こゝ出立ち、舟にて宮川を下り、午後七時頃目出度帰舘仕り候ふ。いづれ詳しき所は、紀行印刷出来上り次第必一部送呈仕るべく候ふ間、それにて御覧下され度く候ふ。尤も己がこの蕪雑に記したる長島より野後迄の所は日記の料にと一通サット書きて見たるものに候へば、草稿の又草稿の位なる積にて御笑読願ひ上げ候。先は帰舘御報知旁此の如くに候。　不備

皇學館第一寄宿舎にて、臥榻の上に横りながら（失礼とは存し候へども）

十月十一日　　千　　畝

御両親様膝下に

十日　最終日　　本科三年生　安元久雄

無慙や鶏鳴一声、緩夢忽さむるとやはり野後の旅寐であつた。例によつて先づ起き出でしは両教授です。続いて十一人の面々も残りなくおきあがつた。朝日子の影は東山の方にあたつてたゆたふて居る。暁方の雲は光鋩に射られて五彩の錦の幕を張渡した。今はやう〳〵秋も高くなりゆきて、気も澄み渡つて居る。吹き来る風は暑くも寒くもない位で、丁度旅行の好時節である。今朝はいつもにも似ないで奇寒稍肌に徹し、寒い〳〵と云ふ声が聞えて居る。昨日まではこうも思はないでした。するとやはり熊野の方が余程温いのである。よく思うて見ると熊野は南に漫々たる蒼海をひかへ、北には巍然たる高山が搆へて居る。野後は又地形がこれと大変違つて居る。森林も稍繁茂して山谷湿浸の地である。だから気候にも寒温の差異があるか知らぬと思つた。

吾等一行が軽装飄然として舘門を出発したのは二日の夕刻五時であつた。今日早くも行旅の空に八日を経過し、愈最終日となりはてたのである。時に今朝の寒さに皆の者がそこらの火鉢を取り囲んで手などをあたゝめて居る。処が誰も言葉には得出さないけれど、なんだか名残惜げの有様が慥かに見うけられた。だと云つてこうやつて何時までも旅行して居るわけにもゆかないから、するとやはり後れまい先にもやるまいとして、各々旅装を調へ始めた。朝餉をもそこ〳〵にすまして旅舘を出でたのは七時三十分であつた。

今日は昨日にまさつて天気も上々吉である。秋天は玲瓏として、さながら水で洗つたやうである。道の辺にある草木は露がいと繁く置いて頭重げにしなつて居るけれども、一行の勇気は益々加はて居る。処が沢田君はなんだか気色もすゝみ兼たるふぜいにて、後からぼか〳〵とやつて御座る。「君なんとしたんです」とは、早くも余が唇から迸しりし言葉であつた。すると仝君は「少し腹が痛い」と云つて声もいとしぶり勝ちである。二人は先発隊より二、三町が程も後の方にしんがりをする。君よ、余の二の舞をなし給ひぞ、とかなんとかつぶやきつゝ、行手の方を追つた。行路三十町許にして舟木といふ処に着いた、兼ねてこゝよりは舟の便をかるべき予定である。だから川辺に降りてそこらの船頭を相手に談判を開いた。処が吾等の一行を彼等はなんと見たのでしよう、恐らくいつもの陸軍様、且遠国の旅人、不知案内なる人だと彼等の僻眼を以ちての見解であつたろう、むげに高き賃銭をのみ云ひはりて聞かなひ。すると此方の予算が大きにくるつて来るから、容易くまとまるべしとも思はれなかつた。そこで皆が日比の勇気にまかせて、徒武者だ徒歩だと云つて追々行手の方に出で立つ人もあつた。けれども此処より山田までは殆ど十一、二里もある。すると只僅少なる談判の何によつて平々凡々たる陸路を取るか、変化無限なる流水に掉すか、興不興其の価値何れにかあ

る。取るも捨つるも又吾等にある権利である。だからこゝは考一考せざるべからずとは二、三人の唇から逆出したる大気焔であつた。元より彼等は無学文盲、取るに足らない愚夫卑夫に過ぎないのである。すると彼等にあまり強くあたつても何の利益もないから、程よく談判したが遙にましだと思つた。処で彼等と再び談判を始めた。固より彼等には聊かひけねがある。若し一言一句を誤れば、遂に彼等は御客を失つて、折角の金儲も目前に放擲せんとする場合である。されば彼等に聊か悔悟の風が見える。今は先に傲情一偏なる気色は何処にか消ゑ失せた様子である。漸く折れて、前の半額迄に引さげ来た。愈々心も其方に傾いて来た。処でこのことを先発隊に報知せなければならない。局山子がかけつけて、件のことを告げた。一行はたやすくこれを承諾して、愈々舟に乗ることに定まつた。処で隈川子と余は、いで舟を出させむとて、再元に帰つたのである。時に二人の船頭が競争を始めて相互に争つて居る。さきに受けがつた船頭は年齢五十の上を二つ三つもふけて居る。いか様彼れが正直なることは慥かに面影に表はれて蔽ふ可くもあらぬ風体である。これとかはつて後者の船頭は絶対的反対である。年の頃なら三十前後、男子真盛り、しかも骨格たくましく屈強なる剛の者である。顔面には天然痘の形見をさへ残して、色黒々として黒漆の如く、いかさま一癖ある者たることは又疑ふべくもあらぬ面魂である。すると前の船頭は、これが鋭き口調に制せられて、そこらの小屋にうづくまつて動かなくなつた。固より隈川子と余は前者の船の方を好んで居る。何となれば、稍新しくて而して積荷もあまり多からず。丁度に程を得て居たからである。だから強いて此方の船をとて、先きの船頭を励まして力を添へたけれども、何の益もなかつた。これ全く後者の鋭鉾にくじけたのである。只戦々競々として一言半句をも得出さなくなつた。遂には何処に行きしか後影も見せなくなつた。其の有様がなんともかとも云はれぬ程をかしかつた。すると例の一方の先生は一層得意顔に佞弁を弄して来る。而して又々先の賃金を高くなし居つた聞かない。そこで隈川子と余はあまりをこがましとは思ふたけれども、彼等の不当にも乱暴なるのを憤つて、断然思ひたつべしと云ふて後方に立帰らんとした。すると例の先生何と思ふたか、しきりに「まいります／／」と呼んで居る。こいつ人を馬鹿にして居つたな、いか様彼等にたばかられたと思つて見ると腹が立つ位であつた。彼等は元より無学文盲の輩、理否曲直をわきまへず、徒に目前些細利益を貪りて渡世をしているものである。彼等に正理を説き聞かした処で、彼等の耳に何をかとゞむべき。所謂豆腐にかすがい糠に釘と同様、馬耳東風も啻ならないのである。寸毫何の利益もないから、彼等が云ふにまかせて漸船に乗り移つた。時既に十二時である。先発隊の人々は吾等の遅きをかこち、首を伸べつ縮めつ如何計か待ちつらんとは、隈川子と余との談話であつた。四、五町許も下りけんと思ふと、早舟木の渡し場である。こゝに先の人々は三々伍々、彼方の石に腰打ちかけ、あるは又此方の草村に打ち伏して、いかさま退屈らしき有様であつた。此処にて漸打揃つて船に乗ることが出来た。愈々棹さして下り始めたのは丁度午后の一時でした。人々は大方昼餉終つたと云つて居る。隈川子と余とは急ぎわりご取出して、両岸の景色を眺めつゝ水を茶のかはりに船中で昼餉をすました。宮川の深き流れはその由緒浅からぬわけがある。けれども今更こゝへ新しく喋々する必要がないから、こゝには暫く略することゝした。この流左程長しと云ふでもなく、水源は近く大台の原山に出でゝ、僅々十数里を流れて伊勢の海に注いでをる。而して一渦一流愈々急である。ましてけふは日頃降りつゞきし雨に水かさも一層ましてをる。乗船の便を借りて最も功得かある。処で木野戸教授、

乗る船の心ゆくまで降るかな　真砂流るゝ速川の瀬を

余も、

此比の霖雨に水かさいやまして　降る小舟の早くも有哉

舟行は愈々迅速である。川は百折迂廻して、山間を縫て降つている。瀬々の急流にはあちらこちらに種々なる魚類が沢山飛んでいる。豊汀子はこれを見て、

三瀬川の清き流の上つせに　鮎子さばしる誰かをつらむ

と詠み出でた。両岸を眺むれば高き山である。けれどもこれを熊野の重岳に比すれば遙に低い。断崖絶壁両々相屹立して、天然の一巻軸をなせる処は一もない。只平々凡々たる流である。けれども又徒歩とはましだと思つた。中には水夫若し一棹をあやまたんか、巌々たる崖牆のもとに船体微塵に砕かへるべしと思はるゝ一刹那、腋下流汗を絞らんとせしことも両三回あつた。又河底幾尋竜も潜伏しつべしと思はるゝ程の蒼々たる深淵を過ぎしことも幾回あつた。時にこゝらの景色を見て傍より豊汀子が、

河風のそよげばやがて青淵は　波のちゞみは織りはたすなり

とよみいてた。やゝ降りて瀬々の急流に至れば、舟行益々迅速である。激流は岩にあたつて泡沫を飛ばして居るとたん、あはや外套をぬらしたと云つて騒いだ人もあつた。間もなく逢鹿瀬と云ふ処にかゝつた。こゝはそのむかし倭姫の命の大御神の御杖代とならせられ、諸国に宮所を尋ねあるかせ給ひ、今の滝原宮にいでましゝ時に此地をも過ぎんとせられしに、偶上つ瀬から鹿肉の流れて来た、依つてこれに由縁して、今猶この所を逢鹿瀬と云つて居る。固より二千年の古代と今代とは、其の間に聊地形を変し来たつたのは勿論である。けれどもその名はとこしなへに変ることはない。稍降りて大久保村の間にかゝつた。時にいまめかしき三人の婦人が彼岸の方にあたりてたゝずんで居る。例の船頭は早くもこれと見出した。「いざ船にめし玉へ」と声もいとたからかに叫んだ。処が彼の婦人は降り船を待ち合せたるもの。「その船此方によせ給へ」と頻りに返答している。船中は殆ど乗客の余地もない位である。いとまどるければ、船などよすべからず、降せ降せとむやみに船頭に云つた。かくあながちに云へども、遂に船頭は聞き入れなかつた。左程にいと間は取らせ申さぬ、暫し許し給へと、彼方の岸に船をつけた。するとかの婦人は此方のせきたつる声にあやつられ、急ぎ急ぎて此方にかけつけて船に乗り移つた。処が船中一の称すべき奇景もないから、只徒然なるまゝ船頭のたはごとにつれて雑談となつた。こゝより少し降ると久具の神社の裏手にかゝる。老松古木は稍鬱蒼として繁げつている。一行は船中より再拝して過ぎた。間もなく岩出と云ふ処についた。先の婦人はこゝにて上陸した。そこより又暫あつて藤波の里にかかる。この時旬、夕陽は西に没して紫雲靉靆四山をつつんだ。惜しくも藤波の景色は只眼前に蒼茫として横たはつている、時に一輪の嫦娥は神路山の端に懸つた。清影水に落ちて銀波いよ〳〵清く、夜色蒼茫として四山は夢よりも淡く、満天の白露は落ちて声なく両岸愈々寂寥としている。秋夜の景、実に生絹一幅の山水画図である。木野戸教授、

霊ちはふ宮川のみを照すなり　神路山に出し月影

余も、

宮川の真砂の数もよむばかり　清く照せる月の影哉

船中は詩歌朗吟の声益々高し、「久方の月の桂も秋ばなを　紅葉すればや照りまさるらん」と、げに皎々たるこよいの月も清く、愈々隈なくてらしている。「見る人の心もかかれまろかにて　ちりもくもらぬ秋の夜の月」、慥にこれは月照法師であつたろう、やはりここらの月を詠したのである。又、不平漢は、「月みれば千々にものこそかなしけれ　我身一の秋にはあらねど」とわび恨んでこの頃の月を詠んだのでしよう。とやかく思ひ出て交々沸いて来る。人々元より其の境遇によりて思想の異なるは免れざる処である。余、又腰折三、四首を得たる中に、

天の原くもりなきよの月影に　心づくしの果もみゑけり

今は吾等ここに数日、山水の媚を賞し来て、しかも又宮川の流に棹さして、神路の山にさし出るこの月影をながめて、正に帰着せんとしてある。

をも白のわたりの船は今宵ま同じ影と宮川の月

何とも云はれない風景である。これも全く行旅の楽である。論田に着し上陸したのは六時であつた。舟木より流を降ることここに九里、時間経過せしこと五時間である。此間、山水の称すべきもの一もなかつた。けれども由緒浅からざる流

を降りて、しかもこの月影が最価値を与へた。若し十二、三里の行路、徒歩を取りなば如何であつたでしよう。

吾等の一行、舘門を出発せしより指折数ふれば今日九日、行程往復殆数十里に及むでいる。或る時は太平洋を渡り、或る時は那智山の瀑布にうたれ、或る時は大雲取の峻嶮を越え、或る時は熊野川の急流を降り、或る時は白の浦の月に嘯き、今日は又宮川の流に棹したのである。変幻出没殆ど極りなく、実に仙人の修業もかくやと思はるゝ位であつた。今は神明の守を受けて一行は恙なく神垣のもと山田に入つた。進んで外宮の前迄来た。処が吾等の親愛なる予科・専科生諸氏の出迎を受けた。実に学友の間かくあるべきことながら、吾等の一層感謝の情にたえなかつた。しかしていま、専科・予科も亦共に北勢旅行を終へて、今日より一日前に帰舘したのである。だから相互の旅状を語りあひつゝ、相擁せられて足を宇治に運んだ。つきぬ物語は後日の楽しみにとて、愈々すみ馴れし舘内寄宿舎に帰着せしは丁度時計八時を報ずる頃でした。

三国のや野こえ山こえ海渡川下りつゝかへり来にけり

学の旅路　附記

年川坊

是より余をして此の旅行を概括し、聊聞見せし節々を記述せしめよ、固より詳細なる旅行の実況に至りては各自担任ありて、既に之を書きつづれり。されば更に事新しく茲に記す必要なからむ。故に其の大体を総括して、いさゝか述ぶる所あらむとす。

此の第四回修学旅行は、日程凡そ九日にして、行路は往復殆ど百数十里也。すぐる所は名所旧跡悉探索して一も洩らすことなく、人情風俗も亦聊洞察して、以て見聞を増益せしこと少しとせざるなり。

抑も旅行は克く吾人をして自然と同化せしむるものなり。彼の迤迤たる山、彼の潺湲たる流、波の長汀曲浦、或ものは美麗、或ものは高潔、或ものは清爽、或ものは快豁、悉皆自然と同化せしめむとするものに外ならざるなり。澗溪の音浣々として王を弄するが如く、琴を弾ずるが如し。殷々たる落瀑、亦は吾人をして思はず戦慄して肌を寒からしめんとす。又、春侯柳絲、清影を傾けて、艶姿風に飜らんとするに至りては、天然の美、風光の妙、何らの快ぞや。吾人をして天地の人間にあらざることを語らしむ秋風、明月の夜愈々清く、草葉玉露を跳らし偶天空雁字を連ぬるに至りては、天地の精妙なる、吾人をして殆ど其の形容詞に苦しましむるものあるにあらずや。若夫草原の寒月、溪間の清風に至りては、愈々吾人をして自然に一致せしむ。彼の山水秀麗の地は能く偉人を生ずと。これ山水秀麗の地、克く吾人をして自然と同化せしむる所以なり。昔、林氏と云へる者は、梅林馥郁たる佳境に其の身を養ひ、神韵髣髴として、遂に梅に類せりと云ふことを聞く。英雄若高山大沢を跋渉せば、吾人は能く其の英雄と高山大沢とを弁ずること能ざらむ。又、詩人、一度この煙景霧光を経由せば、吾人は其の詩人と煙景霧光とを区別し能はざるなり。蓋し、自然の同化が彼と此とを以ちて倶に一致せしむる所以なるべし。吾人は林氏の如き、或は英雄詩人を学ぶ者にあらずと雖、旅行は或る点に於きては必要なる処少しとせんや。余、常に旅行の必要を感じ、その念倏然として禁ずること能はず。されども如何せむ、憐むべき一寒生にして且修学の身、寸閑を得ず思止まることしば〳〵なりき。

余、今この神都に寓居すること殆ど三ヶ年、既に神都の好景に見馴れて、学窓の許只鬱苦として例の悩病に呻吟し、あはれ何処に行きてかの病を療せむ。那辺に徘徊してこの身を養はんと思ふ情転切なりき。偶々紀州熊野地方に向ふて修学旅行すべき命令を受けたり。亦幸なる哉。吾等の修学旅行たる、只其の健脚に誇らんが為にもあらず、名山大川を知らんが為にもあらず。将又諸国巡礼、行脚的の霊山仏地を崇拝せんが為にもあらざるなり。要する所は即、神武帝の御順路を探索し、且名所旧跡を訪ひ、人情風俗を観察し、以ちて修学の素要とせむとするにあるなり。

二日の午後五時、一行は清潔なる意志と高雅なる理想とを抱きて、軽装弁然として舘門を出発せんとす。時に秋風は旅衣を払ひて、天地亦寂莫たり。一行は漸進みて鳥羽港に着し、翌朝未明、紀洋丸に投ず。汽笛一声、無情の黒煙を汀渚に残して、汽船は波樹を蹴て行く。船将に大王崎にかゝらんとする頃、朝日子の影は漸紅輝を四方に放ちて地平線上に浮び出んとす。

浮きあがる瓠形の日の出哉

暁雪は漫々たる波上一面に棚引きて光鋩之を射り、五彩の錦幕を形取らんとす。

さしいづる影清らなり　朝日子の雲の旗手も色々にして

佳景実にたとへなし。船は愈々進みて今は太平洋に出でたり。遙に眺むれば万頃の煙波渺として際涯なく、汀渚の岩角は波を砕きて白雪を飄すが如く、逆巻く波は稍高くなりて船体は益々動揺す。余は始終甲板に直立して動かざりき。

大丈夫のなに恐るべき青海原　風は吹くとも波はたつとも

激浪は澎湃として船べりを洗ひ、海国の男子、勇気愈々激昂して、実に胆量を養ふに足れり。船は旬数十海里を走りて既に錦浦にかからんとす。奇巖危石波間に直立し、海岸の眺望称すべき所多し。

時ならむみ雪ふるなり錦浦　岩打つ浪の砕け〳〵て

この日、夕刻に至り天候俄に変し、聊風雨の兆ありとて、舟師船を出さず。遂に二木島港に淀泊せり。夜半に至りて、四隣寂として声なし。只枕は響く浪の音に屢愛夢を破られて、往古神武丁未の舟師を思ふことうたた切なり。翌日未旦に再船を出し、波濤を蹴て行く。幾多の港湾・海岸を経過して、上陸点三輪崎港に着す。この湾口にあたりて数年前土耳其軍艦の座礁せる危巖猶直立せし。之を目撃するもの誰か惻隠一掬の涙なからん。この港湾甚深からず、数多の岩石は波間に散見し、各処に点々互布して、危険云はん方なし。

三輪が崎荒き島回は海土小舟　心してゆけ岩もありとふ

こゝに海路数百海哩を渉り来る其の間、許多の絶景に心神を楽しましめ、縁波帆影に眼を洗ひ、清想自ら油然たり。一行は船客に見送られて悉上陸す。海浜怒号激しき処、千曲百折せる道路を右廻左折して行く。既に浜宮に達し、神武帝頓宮の旧地を吊ふ。今は古杉繁茂し、樹下雑草茫々たり。懐古の惰輔(ママ)禁すること能はず。

きて見ればこゝも宮居はあれはてゝ　只侭ならぬ浮世をぞ思ふ

暫し呆然として旅衣をしぼらんとせり。こゝより行路一里、那智村にかかれり。途中偶産土神の祭典ありて、神輿の行列に逢ふ。里人数百、老いたるも若きも、けふをはれに着飾りて供奉するものの如し。皆鎮守の森をさして行く。神道すたれ邪教盛んなる今日、猶古式を改めずして此の如くに神事に供奉す。彼等の精忠賞賛すべし。ここより漸進みて那智山の麓にかかれり。見上ぐれば畳々たる石段愈々峻嶮にして、両側は老松古杉鬱蒼として立ちこもれり。滝のさ霧に吹かれてにや、あたり甚だ湿へり。一行は愈々勇気を皷舞して登る。

辿りゆく那智のみ山の石畳　登りはてゝぞ神に祈らん

宮殿華麗にして千木高き夫須美の神社に叩頭九拝すれば、心意更に高遠の境に入る。紅塵の衢を去つてこの清淡秀麗の地に来しば、何人か清想油然として涌かざらん。

峯高く木々し繁れば千早振　神も宮居をここに占けむ

げにかかる処をこそ真の神仙郷と謂ひつべけれ。此処を辞して瀑布を見むとす。那智山瀑布多く、四十八滝と云ふ。滝の音と共に最も世に名声高く知られたるを一の滝、二の滝、三の滝とす。中に最も大なるは一の滝にして、瀑底に至つて仰ぎ見れば、一道の大瀑、天を劈ぎて滾々として落下すること幾百尺、無数の緊塊は層一層し、水煙断続して極りなし。而してその響は轟然として万雷の一時に落つるが如し。潭底を撃ち絶壁の隙よりは、飛泉の淡々として逆り出づるもの亦幾十条なるかを知らず。潭中は沸々として恰も鼎のわくが如く、余沫雲霧を吹いてまた寸碧を見ることを得ず。

たきつ瀬の音もとどろに雲霧を　吹き散すなり那智のみ山に

滝壺より吹き起る激風は余瀝を飛して、旅衣悉霑はんとす。嗚呼、この神霊の境、思はず快哉を呼ばしむ。天然自然の精妙、亦何ぞここにいたる。翌日は名におふ大雲取、小雲取の峻嶮に足を錬はんとす。蜿蜒たる坂路は愈々嶮に、山谷は愈々深し。荒漠無人の境、大雲取、小雲取合せて六里の山程、谷を踰え阻を攀ち、名も知らぬ怪鳥の鳴声をききつつ、からうじて路を求めて行く。さすがに大雲取は小雲取よりも高く突兀として声立せり。若一歩をあやまたば、奈落の底に墜ちて、身体も微塵に砕かれなむ。まして雨風さへはげしく、手の方は雲霧朦朧として咫尺を弁ぜず。然れども又ここに一層の雅致風韻を添へて、眺望益々壮なり。

かき曇る大雲取の峯つづき　わけゆく道の限り知られず

これ亦天地の現象好画軸なり。然れども足漸重し。

雲取や乗つて越えたき坂路かな

羊腸たる山路を辿りて、日没後やう〳〵湯峯に着せり。此処は又一種変体なる自然界なり。熱湯地中より逆出し、人々之れに浴して以て健康を養ふに足れり。沸騰せる処には、湯花と称する一種の結晶体の妙薬を生ず。人々之を用ゐて瘡痍を療すとゆふ。ここに至りて天地自然の作用、益々奇と謂ふべし。

花やこれ草木計りと思ひしに　湯にも花咲くことも有けり

科学の進歩せる今日に於きては亦怪むに足らざるなり。然れども、古人は慥に之を神仏の恵与とし、或は牽強附会なる説を立てて不思議の事とせるは明なり。これ全く地中の水脈地心の火気に熱蒸せられ、為に沸騰して地上に逆出するものなり。依りて多くは火山脈の通過せる所この温泉あるゆへり。ここに至りて益々自然界の変化極まりなきを驚かざるを得ざるなり。

翌日、進みて本宮に至らむとす。途中、数多の近村里人に逢ふ。彼等は一面識なき吾等に向つて敬礼の意を表して行く。これ全く素樸の風厚き山里の風習なり。且彼等に道を問へば、遠巒近障一々指点して路を教ふること最も懇切なり。彼の那智にては、旅舘の主人態々数町送り来りて順路間道を教ふるが如き、一として淳樸ならざるはなし。殊に小学児童の如きに至りては、吾等の一行過ぐる毎に一々脱帽して敬礼の意を表せり。都会の児童ならば脱帽はおろか、却りて冷笑的評語を加ふるに過ぎざらむ。又、吾等が通過するに甚しきは、一家族こぞりて門に出でて吾等を歓迎するものの如し。陸軍といひ海軍と称し、或は測量技師といひ官吏といふ、取々に推測的観察を下せば、此の点は田舎伝来るの風習にして、人智稍進まず交通不便なる山間僻地として亦免れざる処なり。彼等の衣服装飾に至りては、都門人士の如く流行生活に伴ひ奢侈華美を尽せるとは天地の差違あり。誠に彼等は外見を飾らず、内に居るも外に行くも単に一襲の衣服、しかも木綿を以て事足れりとせり。質素の風、実に吾等の戒とするに足る。然れども、彼等には又汚点少しとせざるべし。旅行中第一に目立ちしは、奇々妙々なる葉巻煙草を喫煙せることなり。彼等の多くは常に草木の葉を取来りて直に烟草を巻き、起つも坐するも労動にも歩行にも之を口にして、瞬間も放たずといへり。此等の野蛮的習慣に至りては、最も厭はしきものなり。然れども、概して彼等、田舎的生活の質朴にして淡泊なることは、実に親はしとも親はし。更に進みて本宮に来り、熊野本宮を拝し、一舟子を雇ひて一条の銀蛇の如き熊野川に棹し、山間を縫ひて滾々たる流れを降らむとす。昨日の峻嶮、今日の河流と変じ来る。豈又愉快ならずや。流は一瞬一刻甚速に舟行最も迅疾なり。

熊野川波の早瀬に棹さして　おろす小舟に乗るは誰か子ぞ

こはもとより、波の漂渺として際涯なき蒼海、或は峻嶮攀づ可からずして細径断続極なき高山とは亦大に趣を異にせる楽天界なり。九里間川流の両側は懸崖絶壁両々相屹立し、壑を隔つる山腹より線々として垂下する飛流の称すべきもの、或は突兀たる山の称すべきもの多し。今は漸九里峡として世人に膾炙せられんとす。吾等今又この絶景に深く快哉を呼ぶこと幾回、嗚呼、天然自然の風景、亦何ぞ巧妙なる。この風景を見尽して、正に新宮に至らんとす。偶一村、時雨しきり

に降りきて旅衣自ら霑ふ。昊天果して何の意か。

降る雨に衣ぬれけり旅の空

新宮に来り神倉山に詣で、次に徐福の墓を吊ふ。徐福は秦の始皇帝の時の人にして、第七代孝霊天皇の御代、我が国に帰化せしことは、史籍に伝へたり。然れども、この墳墓に至りては聊疑なきにしもあらざるなり。これ恐く俗説ならむ。余は敢ていはんとす、只虚空の墳墓に過ぎずと。然れども土人は今猶この墓を崇敬し、四季詣でて手向草絶ゆることなしと云へり。

唐人に何の祈願が手向せり

新宮は稍開けたる一市街なり。兼ねて理想にゑがきしよりも遙にまされり。この附近に於きては珍らしと謂ふべし。諺に云ふ、「処風俗国言葉」、又云ふ、「処変れば品かわる」と、実に異様なる風俗と新器物とを見受けぬ。殊にこの地方の俗言たる「のいし」の如きは最も耳立てるものなりき。更に驚愕せられしは、彼の天理教なり。教会堂の如きは建築広大にして、教会所長の官宅又華美を尽せり。多くの信徒を有し全盛を極めたるものの如し。附近の地、至る所に殿堂空に聳えたるを見るに、皆天理教々会堂たり。而して寺院の高大なるものは殆ど見受けざりしは、中々に不思議なり。思ふに、この地方は天理教の本家たる大和に接近し、且彼等は他の宗教の手の及ばざるこの山間僻地に入り来て巧に方便を弄し、以て愚民をたぶらかし、己の全盛を極めんとするものの如し。余、未天理教の何ものたるかを知らざれども、思ふに亦一の淫祠に過ぎざるなり。聊考論なきにしもあらざれども、そは他日に譲らむ。

翌日全所を出発す。雨猶止まず。町外れに至り、再熊野川を流る。

霧登る川面さむしけさの雨

この地方は道路稍開通し、海岸怒濤激しき曲浦の松風を辿る。時に村時雨益々降りすさみて、一層の風景を添へたり。

うちしきる波音高く勇ましや　雷落つとあまたれつつ

この間、数多の田畠と村落を経て、有馬村に至りて花の岩屋に詣づ。大岩畳畳として、老松蔓蔦周囲を繞りて亦壮厳なり。土人、今猶祭礼に古式を改めず。神徳亦深ひ哉。

あるは花あるは果をささげつつ　神祭るとふ花の岩屋に

次に木本に至る。こゝも亦稍町をなせり。然れども例の戸戸の見物推測的の評語は折折吾等の耳朶に響けり。此処よりは又山間を辿る。評議坂と云へるあり。

一プクと頭ならべた評議坂

新道は廻転して稍遠く、旧道は坂路けはしけれども最も近し。一行は二手に別れ、先登隊は新道を辿る。

山越しやさきになりけり後の雁

真木立つ山中をたどりて行く。暫晴れし空は又かき曇りて、雨再降り出たり。

村時雨定めなき世の秋の空

まして日はくれなむとす。ここに於きて旅愁羈情転切なるものあり。是又天地自然の妙力なる哉。

さしてゆく旅宿の空は何処とも　見えわかぬまで雨降りすさむ

日没後、大又に着す。此処らは最も山間僻地にして、只音なふものは松吹く風、谷川の音より外になし。山里の風習、亦素朴なり。彼の旅宿の妻君下女、筒袖の衣装揃ひにて給仕せしなど、彼等の素直淡泊なることを証するに足れり。

翌日、雨なほやまざれば、勇気を皷舞して山間を辿る。山深く、怪鳥折々木の間に声を洩らし、山路六里の間、樵夫の住家二、三軒を見受けたるのみなりき。彼等、何の因縁、何の快楽ありてか、この里遠き山間僻地に住居する。人間の生涯、実に様々なる哉。尾鷲に着す。亦稍町をなせり。此処に来て再海岸に出でたり。矢口の渡を渉り、秋風に伴はれて、更に白の渡を追はむとす。遙に右を望めば、太平洋は万頃の煙、波渺として際涯なく、左は桂木三浦故郷長島の津々浦々なり。汀渚の岩角、波を砕きて恰も白雪を飄がへすが如し、時に夏陽は落ちて、

明日天に懸り、影金鱗を破り、波音愈愈清み渡りて一層の趣きを添へたり。ここに至りて何人か自然に同化せざるを得む。

白の浦隈なく晴し秋の夜は　月も雲間に暫し宿れり

又、

秋もまた高くなりけり宵の月

実にこの佳景は、又何となく吾等をして旅愁覊情を起さしむるものあり。天地自然の現象、此の如人意を左右す。是亦何らの精妙ぞや。翌日、長島を出発し、幾度も行き帰りつつ馴れ来し海湾を後の方に見限りて、又々山間に入りて大内山を踰ゆ。

見馴れ来し千尋の海をあとにして　山に入りけり大内の里

間もなく阿曽に来る。一の炭酸泉あり。聊塩分を含む。昔時はこれを神の賜として、側に塩の神を祭る。実に古人の愚想を証するに足れり。漸進みて野後に至り、滝原の宮に九拝し、森厳なる神域に額突けば、愁意倏然として霽れ、心気更に清浄たり。

ここもまた神佐備にけり滝原の　御稜威かしこき瑞垣の森

翌日は再宮川の流に棹さんとす。川流を降りゆけば、心腸益々清潔なり。これを熊野川に比すれば、平凡にして奇景の称すべきものなけれども、皎々たる月影を添へて、清光佳景、亦尋常にあらざるなり。

霊ちはふ神路山よりさし出でし　月影清き宮川の里

今は既に宿舎に近づかんとす。一行は意気更に昂然として、この月に誘はれて帰る。ここに日子を重ぬること九たびにして、千変万化極りなき天地自然の精妙なる山海の間を、勇気と健脚とを以ちて踏破蹂躙し来れり。然れども海湾、山岳、川流、各比較し来りて、何れを絶景佳境として区別し難し。一の称すべき所あれば、又一の缺けたる処あり。一得一失は真理にして、天地自然界の精妙も亦之を免るること能はず。今此等の真景を完備せしめむか。愈愈雅致風韻をそふべけれども、足らはざる処に自ら余情を保ちて益々精妙と謂ひつべし。元来吾等、英雄詩人を学ぶ者にあらざれども、人間の意志理想に至りては、何ぞ異なる処あらむ。彼の雪月花を見、或は風の音を聞き、或は鳥の鳴く声を耳にしては、誰か心を動かさゞるものあらむ。全く万人に通有せる同情なるべし。且又吾等、天然と一致し自然と和合せんとして旅行せるにもあらざるなり。然れどもここに跋渉し来りしあらゆる山岳河海は、只秋景の間に横はれるもののみなりしかども、其の中自ら吾等をして自然と一致せしめむとせるもの幾許なるかを知らず。而して人情風俗の如きに到りても、洞察せしこと亦少しとせざるなり。吾等この旅行の苦楽と観察とを永く記臆に止め、敢へて忘失することなくば、益すること必多かるべし。

兼　好

峰のあらしうらわの浪もききなれぬ　かはるたびねの草の枕に

神武天皇巡幸路次につきて

三浦千畝

明治三十年十月、吾等皇學舘本科生、修学旅行を紀伊熊野の地に試みぬ。或人曰はく、かの山間遐僻の地、果してよく修学旅行の目的に副ふや、いかにと。蓋、彼等は未熊野の地のいかに吾国史に関係して重要の地なるかを記せざるなり。昔、　皇祖神武天皇、明達確如の資を以て、その皇兄皇子と議し、坐何地者平聞着天下之政と詔り給ひ、乃東幸して皇都を大和の地に遷し給へり。此時に当り、遼邈の地、猶未玉沢に霑はず。群虜こもゞ起りて、或は山に、或は川に、暫々皇師に抗しぬ。而して　天皇は少も撓み給はず、孜々として神策を冲矜に運し、遂に　天皇の鴻業を恢にし、万世の大本を立て給へり。嗚呼、偉なるかな。吾人この奠都の偉業を欽し、この経営の神功を仰ぎ、而して宝祚の無窮を今日に誇ると同時に、　天皇がこの偉業を創め、この神功を完くし、この宝祚を培し給ふに付て、恐くも御みづから六師の衆を統べ、大御手に弓取もたし、大御身に太刀とり帯はして、宸襟を悩し玉体を労し給ひしこと、いくばくばりしかを忘るべから

ず。而してかの熊野の地の、この奠都東幸の歴史の上に於きていかなる関係あるかは、少く吾が国史を繙きたるもの、共に知る所なるべし。今回旅行の目的は、神武天皇巡幸の路次、及その当時の地名にして今日分明ならざるもの、及これら事蹟の荒味に属せる所を闡発し、以ていささか史伝が缺所を補ふ所あらんとするに外ならず。然れども、かかる重大なる研究は、博学高識の士にして始めてこれをよくすることを得べし。吾等如きが漫りに喋々すべきにあらざるは論なきなり。故に余は只先哲諸家の考説を採録し、その所説はいかなるものなるかを見、以ていささか自家の経験に益する所あらむとす。而して文中往々自家の私見を挿み、先哲及諸家の考説に対して敢て是非の言をなしし所なきにしもあらず。これ甚自家を省みざるものにして不遜なるもの、如くなれども、余がここに挿記せる贅言は元より史論といふ程のものにもあらず、又考証と称すべきものにもあらず。只この旅行に於きて実際にその土地を踏み、その山河に臨み、その結果として竊に感ずる所を書し、以て他日の回想に供せむとする自家の覚書たるに過ぎざるのみ。故に余がこの贅言は、諸家の考説に対して一も補益する所あらざるは云ふ迄もなく、又一も毀損する所なきことをも深く自信するものなり。

荒坂津、亦名丹敷浦

書紀に曰く、

天皇独与二皇子手研耳命一帥レ軍而進至二熊野荒坂津亦名丹敷浦一、因誅二丹敷戸畔一

この荒坂津、亦名丹敷浦といふ地の所在につきては、古来、諸学者のしきりに研究し且考証し来れる所なれど、今日なほ分明なることあたわず。所説いよ〳〵滋くして、所在ます〳〵埋する如き感あり。実に遺憾といふべし。さて諸家の考説に於きてその重なるものを掲ぐれば、先左の三説なるが如し。

甲　東牟婁郡浜宮（亦渚浦といふ）を以て古の丹敷浦なりと云ふ説

乙　南牟婁郡二木島を以て古の丹敷浦なりといふ説

丙　北牟婁郡錦浦を以て古の丹敷浦なりと云ふ説

右三説に付き、漸次諸家の考説を列記し、以てその適否を較し、且いささか余が卑見をも附記せんとす。

［甲］東牟婁郡濱宮を以て古の丹敷浦なりと云ふ説

この説は、書紀通証、同通釈等のとる所にして、三説中やや古き説なるが如し。今その説等を掲ぐれば、書紀通証（谷川士清氏著）には、

後拾遺集、錦浦登云処爾弖、道命法師、名爾高幾錦乃浦乎来弖見礼婆潜加奴蜑波少加里介利。又云二錦宮一、又云二渚宮一。西行法師歌、夜毛須我良沖乃鈴鴨羽振之弖渚乃宮爾杵鼓撃。今称二濱宮一処是也。距二新宮一三里許。

書紀通釈（飯田武郷氏著）にはこれを補足して左の如くいはれたり。（ここに掲ぐる文は同氏がものして嘗て大八州学会雑誌四巻に出されたる「神武天皇従熊野入坐中洲路次考」によれり、されば通釈の文とは字句に少の差異ありと知るべし、以下掲ぐる所の文皆然り。）

此の荒坂津一名丹敷浦と云ふ処は上に云へる三輪が崎狭野など云へるあたりの海湾の総名にて今も土人錦の浦といふと熊野神社宮司浜田男麻呂いへり、此説実に然り。

さて［乙］の二木島説並に［丙］の錦浦（長島郷）説に対しては左の如くいへり、

これを岩橋秀栄が説に錦浦は長島村の一里ばかり東なり、此の地昔は志摩国なりしとぞ云へるせつ記伝にもうべなひて今も熊野の東北の極伊勢国度会郡の堺に近き地に錦浦と云ふ処あり、是彼の丹敷浦なるべく又　天皇の大御歌に伊勢海之云々とよませ給へる、是らを思ふに此の時熊野の地を東北へ行き廻り尽してかの丹敷浦まで幸行せらるなるべしと云れしは甚しき誤なり、本居内遠氏が巡幸路次弁に弁じられたるはさる事なれども其の地理はなほ信がたし、是は次にいふ、いかに上古の事なればとて記伝にいはれたる如き迂廻

なる路を取り給ふべきよしもなく、また伊勢国境まではる〴〵至りまして何の故もなくもとの方に立帰りて熊野の村に入り坐すべき由もあらじをや。

又、丹敷戸畔のことに付きて同通釈、

丹敷戸畔は通証に今浜宮有二小祠一伝言祭二丹敷戸畔一とあり、此の説によらば此のもの浜宮の辺に住居れりけむを今かく誅ひ給ふははじめ熊野神邑あたりまで進み給ひけむを暴風のために御舟たゞよいて遙なる瀛中の伊勢海の見ゆるあたりまでも放れ出でたりけむを、今吹き戻されて丹敷浦浜宮のあたりへ再び着き給ひそこにて此者を誅し此れより熊野邑にと途を定めて入坐しし ものなる事決し、よく〳〵地理を考へて知るべし。

なほ諸書に見ゆるものを掲ぐれば、

（熊野巡覧記）

一荒坂山。今三輪崎に荒坂山あり。しかれば三輪崎は本名荒坂津に疑ひなし。一錦浦。浜宮村海辺の本名なり。一丹敷戸畔祠。渚宮の北方に小き叢祠あり。丹敷戸畔の社と云ふ。錦浦明神と呼ぶ。

（紀伊国名所図絵）

一荒坂山。三輪崎にあり。一に荒津山と云ふ。勅撰名所歌集に、紀伊国荒津山、神武紀に云ふ熊野荒坂津亦名丹敷浦、万葉集に、荒津の海汐ひ汐みち時はあれどいづれの時か吾こひざらむ。一錦浦。日本紀丹敷に作る。浜宮村海辺の旧名なり。

（那智荘正徳記）

一錦浦。浜宮村在所の辰巳の方。一丹敷戸畔社。地主の神なり。

（紀伊続風土記）

一浜宮村。頓宮の遺跡王子の社の巽にあり。

以上は浜宮辺を丹敷浦なりとする考説に関する重なるものなり。さてこの説の理由なりとする所を摘記すれば、

（一）浜宮を錦浦としてよみたる古歌あり（通証）

（二）三輪之崎狭野辺の海湾を今も錦浦と云ふ（通釈）

（三）天皇が伊勢国堺迄も幸行し給ふこと路甚迂廻なり。又故なきにもとの方に立帰り給ふ由也（通釈）

（四）浜宮に丹敷戸畔を祭れる小祠あり（通証・通釈以下諸書）

（五）浜宮に天皇頓宮の遺跡あり（紀伊続風土記）

（六）三輪崎に荒坂山あり、又荒津山と云ふ（熊野巡覧記・紀伊国名所図絵）

右六項は浜宮を以て古の丹敷浦也とする要点也。さてこの六項に付きいささか余の卑見をのぶれば、

（一）浜宮を錦浦としてよみたる古歌也といへることいかゞ也。後拾遺集なる道命法師の歌は果してこの所にてよみたるものなりや、いなや。さだかならず。南紀名勝略志には此の歌を長島郷の錦浦の所にをさめたり。長島郷の錦浦古来名高き処なること和名抄・神鳳抄等さるべき諸書に見えたるにてしるべし。されば此の歌は長島郷錦浦にてよみたるものと見る方至当なるが如し。又西行法師の歌も渚宮と云ふ所をよみたる迄にて錦浦といふ地名には少も関係なきものなり。故にこの二歌は浜宮を以て錦浦なりといふ引証には曾て要なきものなるべく思はる。

（二）三輪崎狭野辺の海湾を国人は今も錦浦と云ふといはれたること、これ又いかがにや。余親くその地に臨み土人につきてたづぬるに、錦浦あることを知らず。只赤色といへる地名ありと云ふ。しかるに巡幸路次弁にも「那智の麓浜宮の辺の小名に赤色といへる地あるをもて丹色（とカ）とありけ（かけるカ）るより阿加以呂とよみ誤り来れるならむといへど、いと物遠き上に云々」といはれたれば、国人の中にはこの赤色を丹敷なりなどいひふらすものもあることにや。

（三）天皇が伊勢国堺迄も幸行し給ふこと路あまりに迂廻なりといはれしもきこえがたし。いかにとなれば、天皇が草香の白肩津より遠くこの熊野辺までも

行きめぐりいでませることは、殊更に迂廻の路をとり給ひしものにて、背負日とあるに合せてもこを疑ふまじきものをや。なほ後にいふべし。又「故なきにもとの方に立ち帰り云々」といはれたるも如何なり。いかにも通釈の説の如く天皇巡幸の巡路次を熊野川に沿ひて大和に入りましゝものと定めいふときにこそ長島辺より野々川尻迄立帰らねばかなはざる路なれば、この疑も出づるなれ。もし記伝又は巡幸路次弁などの説の如く、長島或は二木島辺より直に吉野の東辺を経て菟田に入り給ひしものとする説ならむには、もとの方に立ち帰り云々といふべき路次にはあらじかし。

（四）浜宮に丹敷戸畔を祭れる小祠ありといふこと、こは余もこの度の旅行にて浜宮神社に詣でし時親くこの小祠を見たり。丹敷戸畔を祭れるものなりと土人のいひをることはまことなるべし。しかるに浜宮神社の由緒書に左の如く記されたり。

熊野の口碑によるに、上古丹敷戸畔族類数人あり、各険要に割拠す云々、此の地又其一人あり、　神武天皇東征の時、皇師に抗し誅せらる、故を以て古来之を祭祀す、云々。

之によりて見るときは必しも丹敷浦の丹敷戸畔を祭れるものなりとはいはれず。只丹敷戸畔の族類数人ありてその一人ここにて誅せられたるをもつて之を祭祀せりとの伝なり。これ頗考ふべきものなり。余想ふに、始めは只天皇に誅せられたる者を祭れりといふほどの伝なりしを、やや附会して後には丹敷戸畔の族類を祭れりなど云ひ、更に転じて今は全く丹敷戸畔を祭れるに至れるものにはあらじか。

（五）浜宮に　天皇頓宮の遺趾ありと伝ふることこは真なるが如し。然れどもこれあるが故にこの地丹敷浦なりとはたゞに定めがたし。

（六）三輪崎に荒坂山あり、又荒津山といふとあれどいと疑はし。こは荒津山といひしを後にこのあたりを丹敷浦と思へるより、遂に荒津山を荒坂山とよびかへたるものなるべし。名所歌集には紀伊国荒津山と出でたれど、万葉集の歌はここをよみたるにはあらず。三代実録十六に新羅賊船二艘筑前国那珂郡乃荒津爾到来天云々、唐商人揚清等三十一人駕二一隻船一著二荒津岸一などある筑前の荒津（今荒戸と云）をよめるなり。（なほこの荒津をよみたる歌、十二に三首、十五に一首見えたり。）若三輪崎に荒津山ありとせば、そは元の名にて、荒坂山とは後人の附会せる名なること明なり。

以上は事蹟に付きての論なり。地理と事実との関係より察するもの、浜宮辺を古の丹敷浦としてはいかゞと思はるゝこと多ければ、余はこの甲説に従ふこと能はず。なほ後に云ふべし。

［乙］南牟婁郡二木島を以て古の丹敷浦なりと云ふ説

こは本居内遠翁の説にしてその巡幸路次弁に論ずる所の要領を掲ぐれば、紀に丹敷浦とあるは今の二木島の事なりと思はる。ニキシとニシキと音近ければ、転じたるか、ニシキ島といひたるがシの省りたるかなるべし。又隣村に新鹿村あり、是荒坂津の名の残れるならむ。アラとアタと近く、サカとシカと近し。ラとタと音通ふ例は許多をコヽタといひ蔦と云ふも葛の転音なり。サとシとはことに近く通ひて逆をサカシマとも邪をヨコシマといへる同じ。かくの如く定めてみれば、熊野、荒坂津、熊野高倉下などあるに叶ひ、自レ此於二奥方一莫レ使二入幸一とあるにも前途山深くてさもいひつべく、此地より横に北山郷の山堺を経て大和国に入りまし伯母峰などの地を経て吉野の東より菟田の宇加志村の辺へ出ませりと見れば、記紀両伝ともに合してよく解すべし。元来丹敷と云る地は、和名抄郷名部に志摩英虞郡の下に甲賀、名錐、船越、道潟、芳草、二色、余戸、神戸と出でたるを考ふるに云々。次に二色とあるを見れば東北より西南への順次也。されば此の二色郷といへるは今の錦浦二郷村の辺よりひろく南方古の国堺なる二木島のあたりまでをいへる名にて、上代大名に広くいひけむ事察すべし云々。二色といへる旧来の大

名は纔にその郷の東のはてなる浦の名にのみ残りたるを、その地にのみ拘りて解せむとするより不審多くなれるなり云々。今の錦浦辺は前にいへる如く志摩国にて、猶古くは志摩は伊勢国に接したれば、共に前文に熊野荒坂津、又彼処有レ人号曰二熊野高倉下一と見えたるに合ひがたく、熊野と云へる事如何なり。

猶前説の如く、今の長島辺(ママ)の錦浦は延暦の儀式帳にも錦浦(田)坂と見えて錦の名古ければ、大古は又今の如く此の所まで熊野のうちなりけむと思ふ人もあるべけれど、儀式帳にも志摩国と見え、前条に弁ずる如く、所々の名志摩国なる証連綿たればさはいひがたく、且彼処有レ人号曰二熊野高倉下一とあるは則丹敷浦にての事なれば、高倉下は其所に住みける人ときこゆるに、今の長島、相賀、尾鷲のあたりにさる伝はかたばかりもなく、高倉下を祭れりなどいふ社もきこえず。今此高倉下の事は皆新宮辺にのみいひ伝へたれば是れも叶ひがたく、荒坂津などいへる名も伝はらず。とにもかくにも今の錦浦にては叶ひがたし。

右は巡幸路次弁の所論なるを、近頃東牟婁郡那智村なる山田正といふ人同くこの二木島説をのべて「熊野荒坂津史蹟考証書」といふをものせり。その緒言を見るに、氏はこの考証をものするに付きて査究すること多年なりと。余未悉氏の考説をとること能はざれども、氏がこの熱心に対しては余その労を多謝せざるを得す。且氏はいへり。他日橿原奠都の偉業を創建せらるゝもの実に至大の皇謨に頼ること固より論なしと雖も、顧みて史上経歴の始終より繹ぬれば、蓋荒坂津は堂下の一階にあらざれば、或は九重の関鍵たる観なきに非ずと信に然り。而して余輩今回の旅行、その意亦こゝにあるなり。さてその考証の要を掲ぐれば、

古来この二木島港を以て熊野荒坂津なりと伝称するもの実に其憑証なきに非ざる也。今先日本紀の文義を以て之を実境に参照するに、二木島港の位置たるや、今の新宮古（熊野神邑）の東北約十里を距るの一大良港にして、今尚往来の船舶此近海にして風浪の難に遇ふ時は多くは二木島港に入りて之を避くるを得る也。古事記伝の説は長島郷錦浦を以て荒坂津とするものに似たり。抑長島郷錦浦は二木島港を距る海上数里の東にあり。紀伊続風土記の説の如く、上古には二木島以東今の長島浦近傍まで総称して錦と称したるや疑ひなし。但中世以後長島郷錦浦の地方は伊勢の神領となりたるが故に特に其の名著しく世に聞ゆるに至れるならむ。下条載する所の高倉下の旧蹟、二皇兄の神蹟等、現に二木島港の陸上に存在す。彼此参攷すれば、熊野荒坂津は今の二木島たるや疑ひなからむ云々。但地方伝の一説に、帝、二木島港に上陸ありて後更に舟行東進せられたりと。この一説果して信ならば、長島郷錦浦までも廻幸ありしならむ。然れども今の錦浦を以て熊野荒坂津なりと為すことは別に其の徴憑なきを信ずるなり。

右は山田氏が考証の要点なり。なほ氏は荒坂村に存在する古蹟なりとて左の数項をのせたり。

楯ヶ崎　古来伝ていふ、帝此浴海にして暴風に遇ひ皇舟漂蕩す、其の載する所の楯此所に漂着す。故に名づく云々。或は云、太古神明此所にして闘戦す云々。

曾根坂　其頂上は即古の紀伊国・志摩国の境界なり。此の坂路ば即古に所謂荒坂なりとす。上人言ふ、上古此の山中にして丹敷戸畔誅伏せらる。山中に其の塚あり云々。今其の所在を知らず。

逢川　地方の古伝に、上古　帝上陸の時、土人等皆此の溪頭に出て帝に謁見奉迎したり。或は言ふ、高倉下命、此の溪頭に出て　帝を奉迎したり。故に逢川又は逢初川ともいふ。

天之倉山　地方の古伝説に拠るに、上古、高倉下命、此の山上に鎮座す。神武天皇二木島港に上陸の時、神剣を献じ帝を助けて悪神を平定す。後新宮なる神倉山に遷座す。後世其の地に社殿を建てゝ之を祭祀す。

室古阿古師両神社　上古　神武天皇東征の時、此の海上にして風浪の難に遇ひ、　皇兄稲飯命・三毛入野命共に海に入りて薨ず。風浪収るの後、土人等舟を出して漁す。時に皇舟の漂流するを見、之を救ひ得て港内に入り、且二皇兄の屍を覓めて帰り之を奉葬す。爾後その陵を崇敬して産土神となし、毎歳（五月五日・十一月二日）祭典を執行す。其の式法は都て当時の状景を模擬するもの也云々。

元宮　二木島港の北岸なる小丘の半腹に一小霊域あり。地方に元宮と称す。中略。地方の古伝には上古神明の宿舎せし所なりと伝へ、古来此の境域を犯するものは忽にして神明の罰を受くと称して云々。

以上、本居内遠翁の巡幸路次弁、及山田正氏の荒坂津考証にいへる二木島説の要領を摘記すれば、

（一）二木島はニシキ島の転呼、或は省略語にて、新鹿はアラサカの転呼なり（路次弁）

（二）二木島辺より北山郷を経て大和に入坐す路次は記紀両伝に叶ふ（路次弁）

（三）長島村錦浦は古志摩国に属して熊野の地にあらず（路次弁）

（四）二木島港は往来の船舶風浪難を避くるに足る（山田氏考証）

（五）楯ヶ崎太古神明闘戦の地なりと伝ふ（山田氏考証）

（六）曾根坂、此の山中に丹敷戸畔の塚ありと伝ふ。これ古の荒坂なるべし（山田氏考証）

（七）逢川、天皇上陸の時土人等謁見せし処、又高倉下奉迎せし処なりと伝ふ（山田氏考証）

（八）天之倉山、上古高倉下こゝ住せりと伝ふ（山田氏考証）

（九）村社祭神は稲飯命・三毛入野命の二皇兄なり（山田氏考証）

（十）元宮といふ処あり、上古神明宿舎せし処なりと伝ふ（山田氏考証）

此十項の要点に付き聊か卑見を述ぶれば、

（一）二木島は錦浦の転呼或は省略也、新鹿或は省略なり、荒坂の転呼なりといへること、これ或はいはれざることにはあらじ。されど他にさるべき憑拠を得てこれを証明せざるべからず。若いたづらに転呼訛称をいはゞ、いづれの地か転呼訛称をいはれざらむ。況や他に既に錦浦と称して古来著明なる地あるをや。書紀通釈にこれを評して巡幸路次弁に考へ出たる路次は、かの二木島をニシキなりとなし、新鹿をアラシカなりとなしたるまでにて、たしかなる拠もなく、また其の前途も何れの路により給ひしといへる考もなければ、従ひ難しといはれたり。されば余は、他項に於きて果してこの考を助けこの説を成り立たしむるに足る事蹟あるかを見むと欲す。

二木島と新鹿とは全くその海湾を異にせり。即新鹿は二木島の西方壱里ほど隔りて処既に異なり、かにかくに荒坂山亦名丹敷浦といふには当らざるもの、如し。

（二）二木島より北山郷を経て大和に入坐しゝものと見るときは記紀両伝に叶ふといはれたることきこえがたし。そは二木島辺より横に北山郷を経て吉野郡の東辺を通り菟田宇志賀に出たりといふ路次は、書紀に「乃尋二烏所向一仰視而追レ之、遂達二于菟田下県一」とあるにこそやゝ叶ふべきなれ。古事記の「故随二其教覚一従二其八咫烏之後一幸行者到二吉野河之阿尻一云々」とある伝には全然たがへる路次なりけり。なほ後に云ふべし。

（三）錦浦は古志摩国に属して熊野の地にあらずとの論、こは数項中にありて最力あるものなるべし。いかにも長島郷錦浦は延暦の儀式帳、和名抄、神鳳抄等さるべき諸書には皆志摩国としてあげられ、而して志摩国は元伊勢国より分ち置かれたるなれば、上古伊勢国に属したるならむと思ふも理の如くなれど、しからず元来熊野といふ地名は今の南北東牟婁郡辺の地をひろくさしたる名にして、今日の所謂郡名にもあらず、又郷名にもあらず、即上古の国名とも見るべきなり。さて上古は熊野といふ国をなし居しかども、和名抄など

にこの熊野の名みえざるは、当時既にこの国廃せられ、その西部は紀伊国に属し、東部は志摩国にかへられたる後なればなるべし。しかるを記伝に「抑此の地は牟婁郡の半に過ぎて数十里に亘りていと〳〵広く、一国ともあるべきを一郡にも建てられず、和名抄の郷名だに載ざるは、山国にて古は民いと少かりしと見ゆ」といはれたる説はくはしからざるに似たり。古事記に熊野村云々と見えて村名の如くもきこゆれど、さにあらず。こは只熊野といふほどの意にて村の字を用ひたるものなるべし。そは後々は郡名となりし草香、名草等の地をば書紀に草香邑、名草邑としてあげたるによりても、村或は邑などといへるは只おほらかにその地をさせるものなることをさとるべし。されば熊野村とありとも熊野は村名なりとばかりは定めがたし。故熊野神邑、熊野荒坂津などあるその神邑、荒坂津等をこそ村名なりとは見るべきなれ、国造本紀には志賀高穴穂朝御世錦速日命五世孫大阿斗足屋定帰国造と見えたり。かにかくにこの熊野てふ名はいと広き土地に冠らせたるものなること疑ひなきものゝ如し。いかに山国なりとて当時もし一郡或は一国になりをらむにはそを載せざる理なし。いはむや熊野といふ地名は歴史上古くより著明なりしものなること少も疑ひなきをや。されば上古は紀国、熊野国、伊勢国と堺せしものなりと知るべきなり。さてかく見るときは、この三国の境界はいかにありしか。熊野とはいづこよりいづこまでの名なりしかとの問ひなかるべからず。余思ふに、書紀に「越二狭野一至二熊野神邑一云々」とある文より考ふるに、この狭野てふ処こそ正しく紀伊と熊野との国堺なるべく思はる。しからざればこの越の字きこえがたし。山などならむには越ゆともいふべきに、佐野は海辺にて海陸いづれの路を幸したりと越ゆとはいふべからず。さるを殊更に越の字を用ゐられたるは国堺なればなるべし。さて西方堺を佐野とすれば、東方の堺を二木島辺とすること余り狭きに過ぎたり。且地勢上より見るもの以東を悉伊勢国としてはいかゞと思はる。依りて熊野の東界はなほ今日の如く錦浦辺迄として見る方いかにも隠当なるべきか。且巡幸路次弁の云ふ所もやゝ曖昧なる云ひざまなり。そは前に「今の錦浦は志摩国にて、猶古くは伊勢国に接したる処なれば、錦浦（熊野カ）と云へる事いかゞなり」と難じ置きながら、その末文に於きて「この二色郷といへるは今の錦浦二郷村の辺よりひろく南方、古の国界なる二木島のあたりまでをいへる名にて、上代大名にひろくいひけむ事察すべし云々。丹敷戸畔は則此の上代大名にいへる二色郷といへる程を主領居たる者ときこゆれば、我が領地の堺に出で戦ひたりと見れば、則二木島の地にて、紀の趣もしか聞えたり」といへること、前後撞着せる論なり。いかにとなれば、今の錦浦辺のひろく二木島辺迄は古の丹敷浦なり。しかしてこの丹敷浦、古は志摩国或は伊勢国なりといふときは、二木島も亦古は志摩国或は伊勢国なりといはざるべからず。しからむにはなほ熊野荒坂津、熊野高倉下などゝはいはれざる理なるべし。もし一歩を譲りて今の二木島は古の国堺なればなほ熊野の方に属けて熊野荒坂津といひたるものとすとも、丹敷戸畔はこの二木島に住居せしにあらずして、今の錦浦近くに割拠し居たるものにて、ここは只その領の堺なりきといふことに付きては路次弁も認むる所なるべし。

（四）二木島港は往来の船舶風浪の難を避くるに足る良港なりといふこと、いかにもこの認は熊野海にありて一良港たることは、現に余等も三輪崎に着くるべき船をこの二木島港に着けて一夜風浪を避けたるなどなれば、そは自も証する所なり。然れども熊野の海岸屈曲湾入して尾鷲の如き他に船舶を泊すべき良港甚多きことをも知れり。

（五）楯ヶ崎、ここは太古神明の闘戦の地なりといひ伝ふる由なれども、これを以て荒坂津の所在を証明する事蹟とは見ること能はず。昔神明が闘戦せし所なりといひ伝ふる所はいづれの地方にも多くあることなり。又皇軍の楯ここに漂着せりなどいふことは例の附会にてとるに足らず。思ふに土人等がかか

ることいひ出せるはここを古の丹敷浦なりとするに付きて牽強せるものなるべし。

（六）曾根坂を以て古の荒坂なりといふこと、こも牽強也。曾根と云名と荒坂と云名とは何の縁故もなきは更也。別に拠として見るべきものあることなし。只二木島をば古の丹敷浦とするに付きて、この曾根坂は近き所にありて位置もやゝ適するやうなればといふ迄のこと也。されば丹敷浦とはこの二木島にして一も疑ふ所なしと決定せる場合ならむにこそ、或はかゝる臆測の説をもなすことを得べきものなれ。（町村制実施の際、二木島外三村を合して荒坂村といふ新村名を設けたりと聞く。こは余りにほしきまゝなるわざなり。この荒坂の所在に付きては錦浦の如き、浜宮の如き、多くの学者のそれ〴〵考証して、古の丹敷浦はここならむといひ置きたる所なほ他にもありて、未いづれ真なりとも定かならざるに、只僅の事蹟と一篇の巡幸路次弁とにすがりて直に二木島を以て古の丹敷浦なりとし、専断にも荒坂といふ地名さへ私せること、実に古跡地名の剽竊者といふべし。世にかかることよりして史学上の迷惑を来せること甚少からず。かの甲乙二村を合併するに、国史或は郷史上多少趣味ある旧村名をうち棄てゝ甲村名の一字と乙村の一字とをとり、そをつぎ合せて何の意味もなき新村名を作り出すなど、歴史といふ観念も地理といふ注意もあらぬものが日に多くのみなりゆくは、余等の常に慨嘆する所なり。しかれどもこれ等は単に国史上或は郷史上、趣味あり縁故ある旧名を埋滅すといふに止り、由来史学上の紛雑錯誤を来すとまでには至らず。しかるに二木島の新村名の如きは然らず、決して許すべからざる史学上の罪人と云べし。こは序なればいささか断りをくなり。）

（七）逢川、こを　天皇上陸の時土人が奉迎せし処、或は高倉下が謁見せし所などゝいひ伝ふる由なれども、例の附会にてとるにたらず。もし此辺荒坂の津にて天皇が闘戦し給ひし処ならむには、土人等が　天皇に手向ひ拒き奉りこそすれ、奉迎謁見すべき筈なし。次に高倉下が謁見せし処と云ふこと、こは少しきこえたるやうなれども、凡べてかかる伝どもは、この二木島を古の丹敷浦なりと巡幸路次弁などに云ひ出せるより、その説を補はむ料にと強ひて土人等が附会牽強せるもの多し。されば紀伊続風土記にさへこの逢川にて高倉下云々のこと見えず。只寛永記といふものを引きて「此川にて大神宮熊野権現と逢ひ給ひしことあり云々」と記せるのみ。

（八）天之倉山ありて高倉下が住せし処なりと云ふこと、これ亦信けがたし。巡幸路次弁には「彼処有レ人号曰二熊野高倉下一」とあるは則丹敷浦にてのことなれば、高倉下は其処に住みける人ときこゆるに云々、今此の高倉下の事は皆新宮辺にのみ云伝へたれば云々」とありて、高倉下は二木島辺の人ならむと迄はいはれたれど、高倉下の住みし天之倉山などいふ処ありとは更にいはず。又紀伊続風土記にもこを載せざるにても疑はし。且「天皇二木島港に上陸の時、神剣を献じ云々、後新宮なる神倉山に遷座す云々」などいへるは、凡べて由なき漫りごとなり。兎にも角にもこは古き伝にあらざることはいと明なり。

（九）村社の祭神は稲飯命・三毛入野命の二皇兄なりといふこと、これ頗考ふべきものなり。山田氏の考証にある如く、果してこの両社は二皇兄を祭れるものなりとすれば、これ実に貴重すべき史蹟たること論なし。かつ又一村社として空く荒敗（廃カ）を土人の手に委し置くべきものにあらざるなり。（実は二皇兄のこの熊野海にて薨去し給はざることは姓氏録の証する所にして、山田氏が「二皇兄已に溺れ薨し給へりと誤認して云々」といへるが如し。されど余この神社の由緒書なるものを親しく見たるならねば容易にその信偽をいふこと能はざるは勿論なれども、そは果して古来の伝説なるか、はた近来ここを丹敷浦とするに付きて土人等が牽強附会せるものなるかは一疑問なるべし。なほよく考ふべきなり。この二皇兄のことに付きて頗研究を要すべきことなほ多し。いささか卑見なきにあらざれども、この別問題なるべければこゝにはいはず。）

（十）元宮とて上古神明の宿舎せし処と伝ふる地ありといふこと、こは只天皇の

こゝにも駐駕ありしならむとの参考迄に見て置かば足りなむ。荒坂津の所在をたづぬるに付きてはさしたる要もなきものゝ如し。

右の如く見来るときは、この二木島を丹敷浦なりといふ説も未容易に信をおかむことかたきものゝ如し。なほつぎ〳〵論ずべきなり。

［丙］北牟婁郡錦浦を以て古の丹敷浦なりと云ふ説

この説は古事記伝のとる所なり。その要を掲ぐれば左の如し。

此時の幸行の路次は、正しくは何の地とも今さだかには知りがたけれども、まづ書紀に至二熊野荒坂津亦名丹敷浦一因誅二丹敷戸畔者一時神吐二毒気一人物咸瘁とありて、次に高倉下の事ある。今も熊野の東北の極伊勢国度会郡の堺に近き地に、錦浦といふ所あり、是彼の丹敷浦なるべく、また天皇大御歌に伊勢能宇美能云々とよませたまへる、古は由なき処を取出て歌によむことなければ、必ず此の時に伊勢海の境迄幸行て御覧しけるなるべし。是らを以て思ふに、此の時熊野の地を東北へ行廻り尽して彼の丹敷浦まで幸行るなるべし。

此の記は上に到二熊野村一之時といひて高倉下の事ありて、此段も即其地にての事にして、自レ此於二奥方一莫レ使二入幸一などゝあるを以て見れば、此処も皆熊野の地の中程あたりまでの事にて、甚く東方伊勢の堺などまで到坐りとは聞えぬに似たれども、上文に背負日とあるを以て見れば、甚く東方まで廻り幸行て、さて西方を指して倭国に入坐す道ならでは叶はず。

この錦浦の著明なることは、巡幸路次弁に、

今の長島郷（ママ）の錦浦は延暦の儀式帳にも錦浦坂（山）と見えて錦の名古ければ云々

なほ諸書に見えたるは、

（和名抄）

志摩国英虞郡二色郷

（神鳳抄）

錦御厨

（南紀名勝略志）

長島村の東一里ばかりなり。続拾遺集に、名に高き錦の浦をきて見ればかつがぬあまは少かりけり

この北牟婁郡錦浦を以てその丹敷浦なりといふ［丙］説は、前二説に比すれば極めて単簡なり。これを前二説の例により要領を摘記すれば左の如し。

（一）錦浦の名、古来著明にして、諸書又これを証す。

（二）背負日といふ文よりみるに、熊野の地を東北へ行き廻り尽さゞるべからず。

（三）天皇の御歌に神風の伊勢海湾云々とあり。古は由なき処を取出して歌によむことなし。

この丙説の主とする所、只右の三項あるに過ぎず。高倉下にかかる伝もなく、荒坂津といふ名に似たる所もきかず。且当時そこの豪族酋長ともみるべき丹敷戸畔の事蹟さへ一もきく所なきが如し。いかにも前二説に対しては余りに単簡に過ぎたる感なきにあらず。而して此丙説のかくの如く事蹟の項目少きにもかかはらず、余は寧この説を以て最事実に得たる説なりと信ずるものなり。

（一）錦浦の名、古来著明なることは、さるべき古書等に載りて動すべからざる事実なり。かの赤色浦を丹色浦と引直し、二木島を丹敷浦と附会せる如きとは元より同日のものにあらざること、誰も疑はざることなるべし。されば余は此の一項に付きては充分信を措きて可なることと思ふ。さてこの錦浦を諸書に志摩国として掲げたること、書紀に熊野荒坂津亦名丹敷浦とあるに叶はざる如くなれどもしからず。その理由は既に［乙］説三項の所に於きて略いひ置きたり。

（二）背負日といふより考うれば、必熊野の地を東北に行き尽さゞるべからずといはれたるも、げに理あることなりかし。書紀通釈にこれをいみじき誤りとして、いかに上古の事なればとて記伝にいはれたる如き迂廻なる路を取給ふべきよしもあらじをやといはれたれど、是ぞいみじき誤りなるべき。いかに

となれば、　天皇が遠く草香邑白肩津より紀伊国を遙々熊野の地迄幸行し、所以は元より　皇兄五瀬命が吾者為二日神之御子一向レ日而戦不レ良（書紀には天皇御自詔り給へるつたへなり）と詔り給ひし大御言のまに〳〵背負日以撃と期し給ひてわざと迂廻の路をとり給へるにて、決して大和に入座すに順路よりし給へるにあらざること云ふも更なり。これをいかに思ひてか、殊更にさる迂廻なる路を取り給ふべきよしもなく云々とはいはれけむ。もしこれを迂廻なりと咎めむには、この熊野迄幸行せる路次をばなにといふらむ。八咫烏出でて後にこそ、そを嚮導とたのみて進むにも退くにも、はた日を負ふにも日に向ふにも、すべてそのたゝむ後より幸行し給ひけめ。さればこの通釈のいふ所は八咫烏嚮導し奉りてより後のことならむにはやゝきこえたることもあるべし。されど　天皇が初の大御心には必背負日を期して殊更に迂廻の路をとり給ひしものなること明なり。（なほ想ふに、　天皇の大御心には記伝の一説に云へる路次の如く、熊野より伊勢に入り、同国高見山辺を越へて、たゞちに西向して大和に入り座さむものと思召せるにもあるべからむ。）且この丹敷浦の地には丹敷戸畔の如き虜族ありて、禍心を抱蔵し兇勢を逞くせむと搆へたるものさへありしをや。　天皇いかでか此兇賊をゆるして中洲には入り給へき。又記伝に「此の記は上に到二熊野村一之時といひて高倉下の事ありて此段も即其地にての事にして自レ此於二奥方一莫使二入幸一など、あるを以て見れば、此処も皆熊野の地の中程あたりまでの事にて、甚く東方伊勢の境などまで到坐りとは聞えぬに似たれども云々」といはれたれど、こは余りに意を用ゐ過ぎたるものにあらじか。記に奥方とあるは必しも熊野村の内なる山奥といふことにはあらじ。只是より前方には進み給ふなと云ふほどのことにみてあるも妨なかるべし。されば奥方とあるは伊勢国にもあれ、大和国にもあれ、いづれにもあれ、　天皇が背負日と思ほして進み幸行さむとする方をさしてこそ奥方とはいへるなれ。必しも熊野の地の中程より奥方に入り給はむとせるならねば聞えぬといふ理なし。

（三）伊勢能海云々の御製に付きての論もげにさることとこそきこえたれ。重複するやうなれども記伝の文を掲れば、

さてかく近くもあらぬ伊勢海の物をも取出て譬させ給へるは、前にもいへる如く、嚮に熊野を経賜ひし時に伊勢国の堺なる錦浦までも幸行しかば、其所に親く所看行して大御目に付たりしが所念出られつるからなり。（上代には凡て由もなきに他国の事を引出よめることはなし。紀国錦浦より今の道五里ばかり東に伊勢国度会郡に贄浦といふあり。其拾町ばかり海中に大石といふて、いと大なる石あり。此御歌によみたまへるおほいし、即是なるべし。今も其石に細螺多く着るを、其浦人はしりじろといへり云々。）

とありて、これぞ動くまじき論なりける。書紀通釈にもさすがこの論をばうちけしかねて、只地名沿革の上より左の如くいへり。

按に天皇既に紀伊国に幸行せる時、牟婁郡熊野神邑あたりの海中にて暴風に遇ひて御舟漂蕩たりし時、遙なる澳中に吹放たれまして、伊勢海の浦々をもまのあたりみそなはし給ひたりけむ。今は紀伊国と伊勢国とは中間に志摩国をさへ隔たりければいと遠くなりぬれど、当時はかの熊野あたりやゝさかりて伊勢国堺なりけむも料りがたし。さればかの漂蕩坐りし時、伊勢海の浦々なる大磯どもに立たる巌石の状など見所行しが、此時まで大御目に付たりしから所念出て、今かく比喩へ給へるなり。これを記伝に今の伊勢国度会郡なる贄浦と云あたりなりと解れしは、かの丹敷浦を今の国堺なる錦浦と思ひ混へけるよりの誤なり。

右通釈には「当時はかの熊野あたりやゝさかりて伊勢国堺なりけむも料りがたし」といはれたれど、此の考の当らぬことは前にも已にいへる如く、志摩国はもと伊勢国より分割したる国なれど、なほ後には熊野国廃せらるゝと同時にその東部をも加へて志摩国に入れたるものなるべく、こは地理を見ても

よく知らるべきなり。又国人某のいふ所なりとて掲げたるを見るに「二木島の南方に室古明神あれば、牟婁にて北方に阿古師明神あれば、志摩国英虞郡なるべし云々」といはれたれど、そは後々にての沙汰なりかし。古代の熊野国廃せられて、その西部は紀伊国牟婁郡となり、その東部は志摩国に加へられて英虞郡と也たる沿革後のことは或はさもあるべし、されどこれをもて沿革以前の上古をいかでか規しうべき。この地名の沿革に付きては前段已に云ひおきたればこゝには略きつ。

以上二・三両項の事実はやゝ想像に属したることなれば、しばらく疑を存し置くも可なり。さて第一項の錦浦といふ地名の古来著明なることは、決して塗抹すべからざるものなりけり。今かゝる著明の錦浦あるをすてゝなほ他にこれを求むるものは、必竟此地東方に偏し過ぎたること、且高倉下・丹敷戸畔等のことに付きてさるべき伝なく、荒坂津といふ名に似よりたる所も此錦浦辺にはきこへざることなどより種々疑を挾みたるならむことは、さまで疑ふべきことにはあらざるべく思はず。まづ第一に、高倉下のことをいはゞ、巡幸路次弁又書紀通釈その他の考説にも、書紀に時彼処有レ人号曰二熊野高倉下一云々とある文を解して、彼処とあるは荒坂津又名丹敷浦をたゞに指したるもの如くいはれたれど、余のみる処はしからず。書紀に彼処と云れたるは必しも荒坂津のみを指せるにはあらずして、こは熊野の地に付きて広く彼処とはいへるものなるべし。古事記には、到二熊野村一之時大熊髪出入即失云々、此時熊野之高倉下齎二一横刀一到レ於二天神御子之伏地一云々と記せり。これによりてみるに、高倉下が己が住居地より参来て天皇の遠延伏せる地に到れることときこゆれば、必しも高倉下を以て荒坂津に住める人なりと解せずともよかるべし。且もしこの高倉下をば荒坂津に住せるものとみるときは、丹敷戸畔（荒坂津は丹敷戸畔が押領せる地なるべければ）の領地にひそみ居たるにて、少も勢力なき人ならざるべからず。されどつら〳〵当時の状を想ふに、高倉下は決して無勢力なる一土人とはみるべからず。必熊野の地の式部を領してや、威権をふるへる豪族なりしこと、諸書の伝によりてはほゞ想像せらるるなり。書紀通証は諸書を引きて左の如く証せり。

旧事紀曰、天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊、天道日女命為レ妃、天上誕二生天香語山命一、天香語山命天降名二手栗彦命一、亦名二高倉下命一、随二御祖天孫尊一自レ天降二坐於紀伊国熊野邑一、神代紀曰、天火明命児、天香山、是尾張連等遠祖也、熊野社記曰、地主社祭二高倉下命穂屋姫命一、旧事紀曰、天香語山命異妹穂屋姫命為レ妻、今在二本宮一云々。

書紀通釈には、

神社録曰、神蔵大明神、相伝高倉下命得二天剣一之処也、亦高倉大明神（在高田村）所祭高倉下命、饒速日命子也、母天道日女命、熊野神主祖神也、掠井赤木長井大山諸村同神社存焉云々。（高田、掠井、赤木、長井、大山、皆新宮と本宮との間にある村名なり。）

これらの伝によりて、高倉下は当時已にその地方を領して丹敷浦の丹敷戸畔と相対峙せる一豪族なりしこと知られたり。なほいはゞ、熊野の地を二分して紀国に接する西部は高倉下これを領し、丹敷戸畔は丹敷浦辺に割拠して其東部の地を領し居たるものなるべし。さて記紀二典の文面のみにては、神剣を献るとき高倉下が始めて　天皇に謁見し奉れるやうに記されたれど、なほ深く考ふるに、前に越二狭野一到二熊野神邑一とある時已に　天皇に遇ひ奉りて、さて己が住居せる神邑に皇師を迎へたるものならでは、事実叶はぬが如し。依りて余が想像を加へて記紀二典を解すれば、　天皇初め熊野神邑に到りませるとき、暫く高倉下の許に駐駕なりて、さてその間に天岩省（盾カ）にも登り給ひ、あたりの地勢をもみそなはし、丹敷浦には丹敷戸畔といふ豪族あることをも聞しめし、こゝに於きて更に軍を引きて海路東進し賜ひしものなるべし。かく東方に迂廻し給ふことは、専背負日詔り賜りひし　皇兄の大御言に従ひ給ふものなるは、更に又丹敷戸畔をも平げ給はむの大御心なるべきこと、前にもいひたり。さて　天皇が漸軍を進め給ひて熊野

荒坂津即丹敷浦に至り、そこにて豪虜丹敷戸畔を誅し給ひしもの也。時に皇軍神の毒気に当り、人物威□(ママ)して腹振ふこと能はざるに至りしを、高倉下、　天神の御教によりて始めてこれをしり、いたく驚きて　天皇の□(ママ)伏させ給へる丹敷浦には到り、神教のまに〳〵神剣を献りしものならむかし。されば丹敷浦は元より丹敷戸畔の割拠地にして高倉下の領地にあらず。これ高倉下にかゝる伝のこの丹敷浦になくして独新宮辺にのみ所以なるべし。こをしらずして、二木島に高倉下が住せし天之倉山ありて、後に新宮の神蔵山に移れりなど、由もなき作り言をさへ言ひ出たせるこそ拙なけれ。又丹敷戸畔の事蹟、ここに伝ざらぬこといかゞともおもはぬにあらねど、　天皇に抗せし兇賊なれば、誰も祭らざりしものならむと見てあらむもさまたげなきが如し。（甲説には、浜宮に丹敷戸畔の祠ありといはれたれども、其たしかならざることは已に論ぜり。もしこれをたしかなるものとしても、浜宮と狭野とはいと近き処なれば、前に越二狭野一至二熊野神邑一とあるときにこそ丹敷戸畔は誅せらるべき筈なれ。しかるを前には何事もなく　天皇が熊野神邑に入り給ひしとは、いと〳〵疑はし事実にあらずや。かにかくに浜宮を又丹敷戸畔の祠はたしかなる説にはあらず。次に荒坂津と云地名の存在せざることとは甚口惜きことにはあれど、こは独この錦浦のみに限りたるならねば、今更いかゞはせむ。）

余は想像説にて固より顧るに足るものならねど、試に荒坂津に付き卑見をのぶれば、書紀に至二熊野荒坂津一云々とある荒の字、或は後人の誤写に出てたるものにあらざると。今錦浦の北方凡一里ほどの辺に荷坂と云ふ山あり。こは伊勢と熊野との堺にて、のぼり二十四、五町もありて、直立五、六百間程ある山なり。さて荒と荷とは字躰やや似たれば、もとは至二熊野荷坂津一云々とありしを、終に荒字に書き誤れる如きことなしともいひがたし。此の荷坂山の麓にて、錦と長島との中程に二郷村といふ地名もあり。こは元荷の郷と云ひしを、後に村の字を添へて荷郷村と云へるならむ。又長島といふ地名も、高倉下が天剣を献りし時、天皇が忽然と寤め給ひて長寝乎（書紀には予何長眠若此乎とあり）と詔り給ひし大御言によりたる名にもやと思はる。かく考へもて行けば、この外かかる処いくらもあるべし。されどかかる臆測は好みてすべきにあらざれば、今強ひてはいはじ。

依りて余は荒坂津といふ地名の今日分明ならざることは余儀なきこととして、丹敷浦はいづこまでも今の錦浦なりとして少も差支なからむと思ふ。前にも云へる如く、この古来著明なる錦浦を捨てて殊更に他にもとめて附会牽強の説を作るに至れるは、必竟今の錦浦にては事実上或は地理上にて不都合の点あらむかとの恐より起れれり考説にて、他に確たる理由の存するにあらず。而して此の錦浦の事実上・地理上少も不都合なきのみならず、大に適当なる位置たることは、既に業に論じおきたるが如し。

（頭注）評者云、皇太神宮儀式帳神堺の条に以南志摩国鵜倉山高、錦山坂並為山堺と見え、南紀略志に、錦浦北名錦坂、紀伊与伊勢之界、里程一里至伊勢度会崎村とあり、この坂即荒坂ならむか。又或人は今牟婁郡錦村荒坂また戸畔の栖といふ地名あり、又近年戸畔の墓と言伝ふる古墳もありともいへり。実地に就きてよく正さまほしき事なり。又云荒坂は荷坂の誤写ならむかとの考面白し。ニシキとニサカと音通ひ又ニシキの約はニとなるなり。

以上の如く、錦浦を以て古の丹敷浦なりとする時は、甲浜宮説・乙二木島説は共に荒坂津或は丹敷浦といふことには関係なきものかと云ふに、そは勿論なりと答ふべきはいふまでもなし。されど土人がこの附会の説をなすに至れる原因はあらざるかといはゞ、余はこれなしとは元断言せざるなり。山田氏の考証に、浜宮説に対して左の如く云へり。

今按ずるに、帝、名草邑より舟行して〇(ママ)野に入り、始めて此地に上陸ありて後、東北に陸行せられ、遂に佐野を越へて熊野神邑にまで進まれたるものならむ。此事蹟あるが為に、後世錦の浦の名をも附会せしには非るか。

この論、さもあるべく覚ゆ。さて二木島はいかにといふに、余はまた山田氏の

言をかりて左の如くいはむとす。

今按ずるに、帝、熊野神邑より舟行して暴風に遇ひ二木島湾に入り、此の地に上陸ありて後、東北に陸行せられ、遂に熊野荒坂津亦名丹敷浦にまで進れたるものならむ。此事蹟あるが為に、後世錦の浦の名をも附せしには非るか。

かくみるときは、かの二木島とある処は兎に角に　天皇の上陸し給ひし地なるべし。しかるときは、書紀に　天皇独与二皇子手研耳命一帥レ軍而進とある文も、ここに上陸ありてそれより陸路軍を師ゐて進み給へることにて理よく叶ひ、又山田氏の考証にいへる、　帝、二木島湾に上陸ありて後、更に舟行東進せられたりとある地方の古伝説にも叶ふべし。又室古・阿古師両神社の由緒にも元宮とて上古神明の宿舎せし処ありと云ふにも、逢川にて土人が　天皇に謁見せりとあるにも、二木島は船舶の風浪を避くるに足るとあるにも、凡べてよく叶ふべきなり。

以上の如く、丹敷浦とは今の錦浦なりと断定するときは、次に、

天皇、熊野の地より大和に幸行し、路次は何辺なりしか

といふ問題に移らざるべからず。この路次に付きても学者の考説種々ありて、今いづれとも定めがたし。その重なるものは左の四説なるべし。

（一）錦浦辺より伊勢大杉谷にかかり、吉野の東辺を経て菟田に達し給へりといふ説（記伝の説）

（二）錦浦辺より伊勢大杉谷にかかり、同国の河俣谷を経、高見山を越えて菟田に達し給へりといふ説（記伝の一説）

（三）二木島辺より北山郷の山堺にかかり、吉野の東辺を経て菟田に達し給へりといふ説（巡幸路次弁の説）

（四）新宮辺より熊野川に添ひ十津川庄に出で、それより北向して吉野川の河尻に達し給へりといふ説（書紀通釈の説）

右四説に付き、逐次先哲及諸家の論ずる所を掲げむ。

〔記伝〕

さて其より大倭国に入り坐さむとするに、山中嶮絶、無復可行之路と書紀にみえて、八咫烏の道引に頼りて辛くして越坐るをおもへば、此道は殊にゆゆしき荒山中なりけむと思はれば、彼丹敷浦のあたりより伊勢の大杉谷へかかりて吉野へは越へ坐せるなるべし。大杉谷といふは多気郡の西の極にて甚山深く、西方は吉野川の源なる大台へ続きて今も土人の吉野へ越る山路あるなり。是ぞ東より西を指して物する路なれば、彼の上文に背負日云々とあるによく合へりける。

〔同伝一説〕

此処書紀には果有頭八咫烏……遂達二于菟田下県一とありて吉野を歴賜へる事はみえず。若書紀の伝に依て此時吉野をば経給はず、熊野より直に宇陀へ越へ坐りとせば其路次はかの伊勢の大杉より同国の河俣谷へ越坐し高見山を越えて宇陀に到坐るなるべし。河俣谷といふは大杉より北方にて飯高郡の西の極にて高見山を越て大和へ物する道なり。高見山は河俣の西の極にて伊勢と大和との堺なり。この山を越て西は吉野郡の内の杉谷村といふへ出づ、このあたり宇陀郡の境に近き地なり。

〔巡幸路次弁〕

紀に丹敷浦とあるは今の二木島の事なりと思はる。中略。かくの如く定めてみれば、熊野、荒坂津、熊野高倉下などあるに叶ひ、自レ此於二奥方一莫使二入幸一とあるにも、前途山深くてさもいひつべく、此地より横に北山郷の山堺を経て大和国に入りまし、伯母峰などの地を経て吉野の東より菟田郡の宇加志村の辺へ出ませりと見れば、記紀両伝ともに合してよく解すべし。

〔書紀通釈〕

かの熊野荒坂津より新宮神蔵を歴て熊野川に添つつ上れば即熊野本宮なり。そこに地主神高倉下社ありといへば、かの神霊剣を天皇に献りしはこの中間

にありぬべし。そこより大和の方へと物する道は今の伏拝果無などの郷々を通りて吉野郷十津川庄に出づ。十津川は熊野川の源なり。それよりまたあまたの郷々を歴つつ上(下)れば宇智郡阿太に到る。これ即記に吉野河之河尻といふ処なり。

以上四説の中、記伝の説と巡幸路次弁の説とは、只錦浦よりすると二木島よりするとの差あるのみにて、吉野の東部を経て菟田に出でませりと云ふ点は同一なれば、ここには別に分ち論ずる必要なかるべし。又記伝の一説なる伊勢国より高見越して直に菟田に達し給へりといふ説は、記伝自その記を棄てて「地理を思ふに吉野の東方の山奥を経て菟陀へは出坐りとするぞ優りて聞ゆる云々」といはれたるほどなれば、こも爾別に論ぜず。さてこの三説は共に書紀の伝によりて立論せるものなれば、余はこれを称して紀説といひ、古事記の伝によりて立てたる第四説〔書紀通釈説〕をば記説と称し、以て両者の適否を較し、いささか卑見をものせむとす。〔前熊野神社宮司浜田男麻呂氏の神武帝熊野巡幸実地考（大八洲学会雑誌第四巻に載せたり。其の大体は飯田氏の説と同じ。）〕にも引載せる岩崎長世氏の神武天皇御経歴補をみるに、曰く、南海に廻り幸まして那智山に登り、直に大雲取を越て小口村に下り、また小雲取を越て本宮に出まし、熊野川を遡りて大和国には封入ましなるべし、大雲取・小雲取といふも実は大熊取・小熊取にて、古事記に到二熊野村一之時大熊髪出入即失云々とある如く、此山中にも大熊など多かるを兵士ども勇にいさみて討取つつ越ゑさせ給ひし故に、山の名に負ひしが、後世訛れるものなりとあり。これ一説なり。想ふにこの説は浜宮を丹敷浦とみる時は都合よき路次なるべけれど、此道は熊野山ややひらけて後那智と本宮とを往きかふ修験者等あまた出で来てよりこれ等のものかたよりにとて設けられた山道にこそあれ。それよりはなほ新宮辺より熊野川に添ひて幸行せりとある方優るべし。かにかくに此説は第四説〔記説〕に大差なければ、こも別に分ち論ずる要なきが故に、ここには省けるなり。さればこの両説は全く記紀二典の伝を異にするより生ずる問題なりとしるべきなり。ここに記紀二典の文を掲ぐれば、

〔古事記〕

於レ是亦高木大神之命以覚白之、天神御子自レ此於二奥方一使二入幸一荒神甚多、今自レ天遣二八咫烏一、故其八咫烏引道、従二其立後一応二幸行一、故随二其教覚一、従二其八咫烏之後一幸行者到二吉野河之河尻一、中略、自二其地一踏穿越幸二宇陁一、故曰二宇陁之穿一也

〔書紀〕

既而皇師欲レ趣二中洲一而山中嶮絶無二復可レ行之路一棲遑不レ知三其所二跋渉一、時夜夢天照大神訓二于天皇一曰朕今遣二頭八咫烏一宜以為二嚮導者一果有二頭八咫烏一、云々、乃尋二烏所向一仰視而追レ之、遂達二于菟田下県一因号二其至之処一曰二菟田穿邑一、中略、是後天皇欲レ省二吉野之地一、乃従二菟田穿邑一親率二軽兵一巡幸焉至二吉野一云々

右二典の文を比較せば容易にその伝の相異なる所あるをみむ。しかるに記伝にも書紀通釈にも強ひてその所伝を一致ならしめむと勉めたるものの如し。記伝に「此時の幸行は熊野より吉野の内の東方の山中を経て宇陀へ越ゆるにて、河尻といふより石押分の事までは此時の事にはあらずて、是は後に別に幸行る時の事なりしが混ひつる伝ならむかし」と考、書紀通釈には「記伝に此紀を疑ひて吉野の幸行を此の時の事ならむといはれたれど、この井光などに逢給へるはなほこの時の事として、後に再吉野に幸行せりとみむに妨なし、云々」とあれど、記紀二典いづれも再度吉野へ幸行の時などといふ趣にあらざるは、一読してしらる。書紀に渉二于丹生川上一用祭二天神地祇一と後にみえたれば、そのをり吉野の地を歴て幸行になりしや否やは暫くおき、この熊野より大和へ幸行の路次に付きては、只記には吉野より菟田に至り給へる、記伝には直に菟田に達し後に吉野に幸行たりとの前後の差あるのみ、さるにかかる説の出で来るは、全く紀の伝をもとり記の伝をもすてじと思ふよりの誤なるべし。そは要なきことなり。異なる伝は異なる

伝としてみしあらむに少も妨なきものをや。さて記伝の説は一向に背負日とある皇兄の大御言によりて路次を定めむとせり。曰はく、

上件河尻といふより国巣までの事、地理に合さればなり。若し此を国巣よりとするときは、踏穿越といへる文似つかはしからず。国巣より宇陀へは然いふばかり嶮き路にあらず、程も甚く遠からぬものをや。若この度熊野より幸行の道路を今世に熊野の本宮より吉野郡へ越て十津川・天川などいふを経て下市へ出る道ある是なりとして、宇智郡の阿陀を出たまひ、次に飯貝の地を経て吉野山に入坐し国栖に到坐るなりともいふべきか。如此くみれば、河尻に到坐りといへるもよく叶ひ、其より次々国栖までの路次も皆叶へり。然れども彼十津川などを経る道は北方をさして大和へ来る路なれば、彼背負日云々とあるにも叶はず。またこの時に阿陀へ出たまはむには、其より径に大和の国中へこそは幸行すべきにさはあらで、また更に吉野山へ入たまひ東方なる宇陀にしも幸行ること何の由もなく、また踏穿越とある文も国栖よりにては似つかぬなど、彼此叶はぬことおほきぞかし。然ればかにかくに河尻とあるより国栖までの事は、返す〳〵書紀の伝の如く異時の幸行とすべきなり。

いかにも背負日といふ点よりみるときは熊野川に沿ひて大和に出で給ことその方位にたがへるもの、如し。されどこは前にもいへる如く、背負日とは皇兄の大御言にして、八咫烏は　天神の嚮導として遣されたるものなれば、此間自軽重なくてかなはむやは。仮令背負日とは皇兄の仰にして且道理ある大御言なりとせども、天神の大御命に背き奉りてもそれに従はざるべからずといふ理は万々あるべからず。されば背負日と云ことは未八咫烏の嚮導あらざるほどのことなるべし。既に天神の嚮導ある以上は東西南北いづれの方に進み行給はむと何の不祥かあるべき。記伝の論はひたぶるに背負日とある大御言にのみなづみて自レ此於二奥方一使二入幸一といふ天神の大御言あることを忘れたるものにはあらじか。且熊野川に沿ひて吉野川の河尻に幸行さむこと、南より北に向ひて進み給ふ路次なれば、強に日に向ふ方向なりとはいはれざるをや。また「此時阿陀へ出賜むには其より径に大和の国中へこそは幸行すべきに云々」といはれたること、いかにも理あるに、たれどあらず。そはこれを反対の側よりみるときは左の如くもいはるべければなり。書紀通釈に、

今の心を以て思いり其処まで至らずとも上市など云渡を過ればたゞちに大和国中なる十市郡高市郡などの方に出る路あれど、今は其をばよそにみて、国巣（栖）よりかの龍門庄などいふ地のなほ奥深き山中なる樵夫の通路だにあらぬ嶮路を直径（さま）に踏通りて、国人に聞くに、此間山脉続きていと険しけれど、今は通路もありて凡そ（て）二、三里もあらむといへり、宇陀郡なる穿邑へと幸行るなり。さるははやく十市・高市等の郡の方さまに向て中洲に入座すべきなれども、虜どもここかしこに満塞りて居れるよし聞召て、其へは幸行まさず。なほ東方へと向ひ進みませるは一にはかの背負日といふ事をおもほしめし、一には虜どもの強豪（きたり）をしばし避給ふに有べし。

想ふに、　皇兄が背負日と詔給へることは、宗（ママ）と長髄彦を伐つに付きての大御言なるべし。然るときは長髄彦が領せる大和の中部、十市・高市辺に入り座さむには、菟田辺より西の方に向ひて進み給ふならでは叶はざる方位なり、されば天皇の熊野川に沿ひて吉野河の河尻まで至り座してもそこより直に大和の国中には幸行さで、なほ東進して菟田までゆきたまひしにこそあらめ。かくして大和の中部なる十市・高市辺に進みたまひしものとすれば、阿陀より菟田に達したまふまでは日に向ふ路次なれども、菟田よりは正しく西の方に向ひて進みたまふべきなれば、八咫烏の導く所も自背負日とあるによく叶ふべき義にこそありけれ。決して何の由もなき路次にはあらざるなり。故に余は記説［書紀通釈説］を以て至当なるものと信ずるなり。かく路次に付きては古事記の所伝を以真也とし、丹敷浦の所在に付きては錦浦説を正きものとするときは、通釈に云る「伊勢国堺まではる〴〵至りまして何の故もなくもとの方に立帰りて熊野の村に入り座すべき由も

あらじをや」との疑なきことあたはず。記伝に古事記の方をすて、書紀によりて路次を説たるも、必竟この疑を解かねてのわざなるべく思はる。されどつら〳〵考ふるに、こは少も疑ふに足らざることにて、事実上却りてかくなくては叶はぬことならむとぞ思はるゝ。武元立平が史鑑に神吐毒気云々の文を解して左の如くいへり。

毒神は人牧の虜威を逞くする者なり。高倉下の剣を献るは策を陳して之を鎮撫するなり。天皇寤めて言ふは善言を嘉納し初迷ひ後覚むるを謂ふなり。

かゝる臆測的解釈は輒く信ずること能はざるは勿論なれば、是のとき皇軍の□(ママ)労せることこの羸兵をもつて直に中州に入るの危険なりしことはやゝ事実るが如し。されば天皇神剣の霊威と高倉下の忠実とに頼りて毒神忽平息し士卒復醒起せりと雖も、すゝみて中州の強虜地に入り玉はむには充分その士気を回復し軍旅なを整頓せざるべからざるは論なく、かつ大神の自レ此於二奥方一使二入幸一荒神甚多、今自レ天遣二八咫烏一、故其八咫烏引道、従二其立後一応二幸行一との御教誥もあれば、この地の豪族にしてかつ忠実なる高倉下の住居地に立帰りたまひ暫く士気を養ひ軍を整へ給ふ等の必要ありしこと疑ふべからず。されば熊野川を上りて大和に入坐せりとする路次は少しも妨なきのみならず、事実上さあらでは叶はぬことなりかし。さて以上余のべたる卑見によりて、天皇の名草邑より熊野に到り、それより大和の菟田に達し給へる間の路次に付き、試にこれを挺記すれば、則左の如し。

天皇、紀伊国名草邑より佐野を越えて熊野神邑〔今の新宮〕に到りたまふ（書紀）。時に熊野の豪族高倉下皇師を迎へ奉る（余の想像）。こゝに天皇、高倉下の住地なる天磐看(盾カ)〔即神蔵山〕に登りて国見したまふ。仍りてなほ迂廻して中州に入りたまはむとして、海路軍を引きて東進し給ふ。海中卒に暴風に遇ひ（書紀）、皇軍、二木島港に上陸す（余の想像）。茲に丹敷戸畔を誅戮し給はむとして、陸路東進したまふ。此の時神〔古事記には大熊とあり〕、毒気を吐き、人物威□(ママ)え皇軍大に疲弊す（記紀）。時に高倉下命、夢に天神の詔りを受け、ここに皇軍の□(ママ)え座せるを知り、即丹敷浦に来りて神剣を献る。於是皇軍悉起き、熊野の悪神やうやく誅に伏す（記紀）。既にして、皇軍、大和に入らむとし、山中嶮絶にしてゆくべき道を知らず。時に天神、此より奥の方へな入りましそと教喩したまひ、八咫烏を遣して嚮導せしめたまふ（記紀）。故御教のまに〳〵暫らく軍を神邑に還し、六師を整へたまひ（余の想像）、さては八咫烏のうしろより熊野川に沿ひつゝ（書紀通釈）、吉野河の河尻に到りたまふ（古事記）。こゝに阿陀の鵜養の祖贄持の子に遇ひたまふ（古事記）。それより吉野川に沿ひ吉野〔今の上市辺〕に到り、吉野首等の祖井光に遇ひたまふ（古事記）。なほ進み幸行して国栖に到り、吉野の国栖の祖石押分の子に遇ひたまふ（古事記）。そこより龍門庄を過ぎ、山中奥深く踏穿ちて（書紀通釈）宇陀の穿邑に達したまふ（記紀）。

（奥付）
明治三十二年五月　八　日印刷
仝　　年仝月十一日出版
三重県度会郡宇治山田町大字中之町八拾二番屋敷
寄　留
編輯兼発行人　安元久雄
同県同郡同町大字中之町三十四番屋敷
印刷人　久土目周蔵
同県同郡同町大字舘町
発行所　神宮皇學館
同県同郡同町大字中之町三十四番屋敷
印刷所　山田活版所大成舎